
魔法少女リリカルなのはD.M.C

VerGil

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはD・M・C

【Nコード】

N4715N

【作者名】

VerGil

【あらすじ】

『JS事件』から僅か三ヶ月。ミッドチルダを再び恐怖に陥れる存在は、予兆も無く現れた。人の肉を喰らい、魂を貪る魔の住人《悪魔》。熟練の魔導師をも喰らうそれに、時空管理局は遂に重い腰を上げ捜査を始める。そして、ある二つの手掛かりを導き出す。悪魔の件を任された古代遺物管理部機動六課、通称《機動六課》に出された指令。その中に、手掛かりはあった。悪魔退治専門の便利屋と呼ばれる店《Devil May Cry》。そしてその店を営業する、最強の《悪魔狩人》【ダンテ】の名が、そこには載せら

れていた。

M i s s i o n : i へ始まりのワード〈前書き〉

作品紹介：

この作品は「Devil May Cry」と「魔法少女リリカルなのは」のクロスです。DMCの方は【1】から数年後、なのはの方はJS事件から三カ月後の設定になっています。オリジナル・知識間違い多いですが、最後までどうかお付き合いください。

V
e
r
G
i
l

Mission・1 〈始まりのワード〉

「ちくしょう！何だってんだ一体！！」

「くそっ！くそっ！化け物め！！」

「助けてくれえ！足が、足がッ……！！」

次々と《餌》になつていく管理局の魔導師たち。異形の存在を恐れ、冷静さを欠いた彼らにこれを脱する術は無い。体を食い千切られ、血の泡を吹きながら倒れ、骨までも喰い尽くされる。

人の恐怖の根源、それは人の頭蓋骨の様な姿をした《悪魔》と呼ばれる魔界の住人たち。

「クソッ！生きてる奴は応答しろ！誰か！！」

最後まで残った一人に、じりじりと詰め寄る悪魔たち。

「うわあああああ！！！！」

大きな口を開け、丸呑みにされる未来を予想し失禁する魔導師。しかしそれが実現する事は無く、彼に詰め寄っていた数体の悪魔は兜割りよろしく一刀両断される。

泣きながら呆然とする彼の前に立つのは、夜の闇に溶け込まない真紅のロングコート。月明かりに鈍く反射する銀の髪に、右手には巨大な大剣を握り締めている。

その男が余裕気に呟く。

「雑魚ばっか…。管理局もこんなのに手こずってやがるみてえだな。大丈夫か、あんた？」

振り向いた顔は確かに人間のものだった。敵では無いと安心した魔導師は白目を向いて倒れ込む。恐怖の存在を前に、精神的にも限界を超えていたのだろう。

その様子を見て、呆れた様に肩を竦めながら笑う男。しかしその目は人間でありながら人間でない様な、異質の雰囲気漂わせていた。

「さてと…。 ”仕事” を始めるか…!!」

剣を目前の悪魔に構え、不適にニヤリと口元を吊り上げる。コトが風に揺られ、その合間には二丁の大型拳銃が顔を覗かせる。

「派手にいこうぜ？ L e t · s r o c k b a b y ! !」

そして大剣を一振りし、数十体の悪魔の群れに男は飛び込んだ。
った……。

…

「また”アレ”みたいやな…」

「そんな…！被害者の状況は…？」

「昨日は数人で行動していた魔導師が襲われて、一人だけ奇跡的に
生き残ったみたい。あとは…残念だけど…」

それを聞き、肩を落とすなのは。フェイトとはやても同様の反応
である。

昨晚起きた《魔導師襲撃事件》。JS事件が落ち着ききつていな
いミッドチルダを、再び恐怖に染め上げようとしている。

「また《悪魔》や。今回はタイプ02が多数…。今回の生存者も確
実に《悪魔》やゆーてる…」

「悪魔…。でも、悪魔なんて御伽噺の中に出てくる想像上の化け物

としか…」

「それは分かるよ、フェイトちゃん。でも、現に少ないけど生き残った人たちや目撃者の証言も似通ったものばかり。映像もあるんだから、信じるしかないよ」

頭を抱えるなのはたちの前に映し出されている一つの画像。これまでにミッドチルダで起こった《魔導師襲撃事件》の犯人とも呼べる存在。あるものは巨大な鎌を持ち、あるものは木製の人形の姿をし、あるものは死神の様な漆黒のローブを纏い空中を浮遊する。

それらはどれも科学などでは証明できない現象。人の恐怖の根源、古からの存在。

《悪魔》と呼ばれる者たち。

「でも、今日の話はこれだけちゃうんよ。もう一つ、一番重要な仕事”が回ってきてな」

「仕事…？」

「まあ、六課しか請け負う事のできん仕事やるな」
「どういうこと？はやて」

疑問符を浮かべる二人。全てを知るはやては、少しの間を置いた後に話し始めた。

「まず二人も知ってる通り、連日ミッドで起こってる襲撃事件。犯人は未だ見つからず、それも噂では《悪魔》がやったって言われと

る。死傷者も大勢出とる。そこで、六課にこれが来たんよ」

モニター画面が変わる。それは何かの書類の様なもの。

「まず被害者たちが共通して言う”一人の男”の存在。これを探し出す事。も一つが何人か浮浪者が言ってた、”悪魔退治専門”の便利屋の存在。この二つを探し出して、この事件を解決させるのがこの仕事での私たちの役目」

二人の目に映るのは数体の悪魔の画像と先程の書類。そして書かれた二つの単語。

「キーワードは「Devil May Cry」と「ダンテ」
や！」

そして鳴り響くスクランブル。はやては待ってましたとばかりに笑みを浮かべ、その場で指令を出す。

「数体の大きな”アンノウン”の魔力を感知したみたいや！なのはちゃん、フェイトちゃん、頼んだで！！」

「うん！」

「分かった！」

部隊長の出動命令により、ライトニングとスターズ、二人の隊長はアンノウン殲滅のため出動する。

その先に出会う、一人の男の存在を知らずに……。

Mission・1 〈始まりのワード〉（後書き）

〵〵予告〵〵

戦場で彼女らが見る男。《反逆》の名を持つ大剣を操り、《白と黒》の二丁拳銃を使用する狩人。

彼は悪魔を狩る男。信じるものは誇り高き魂。

彼らは皮肉にも《悪魔》を通して出会う事になる……。

Mission・2 《必然の邂逅》（前書き）

ダンテ？あんな男の何が知りたいんだい？

アイツは機嫌が悪けりやどんだけ金積んでも仕事しねえ、良けりや魔力弾の雨の中を妙な大剣一本で駆け抜けちまう。そんな奴さ。細かい事なんざ分からねえ。

悪魔を狩る男？そうだよ、あいつがそうさ。何でも親と兄貴の仇とか。

ただ、アイツに狙われちまったら悪魔でも同情するぜ。まさに”悪魔も泣き出す”だからな。

とある

浮浪者の証言

Mission・2 〈必然の邂逅〉

「Huh・・・暇だな」

ソファーに大きく凭れ掛かりながら天井を見つめる男。本来なら鋭い碧眼が、今は死んだ魚の様になってしまっている。よく見れば店内も所々埃が積もり、お世辞にも清潔とはいえない。

「昨日は連ちゃんて雑魚共とだったが、張り合いが無いと鈍っちまうからな・・・」

それは彼の名言の一つ。『刺激があるから人生は楽しい』、しかし今の彼はそれとは真逆の状態にある。自作の二丁拳銃をくるくると回し、やがて飽きた様に机の上に放り投げる。そして溜め息を吐き、雑誌を顔の上に乗せてソファーに横になる。

しかし昼寝でもしようとしたのに、寝そべった瞬間に事務所の黒電話が鳴り響く。ジリリリン とけたたましく鳴っているが、暇だった時の仕事なので先程とは違い、乗り気で電話に出た。

「《Devil May Cry》だ。：OK、そーいう話は嫌いじゃねえ。場所は：ああ、分かった」

しかも”当たり仕事”だったので、益々機嫌が良くなる。口笛を

吹きながら壁に立て掛けてあった大剣を鞘無しで背負い、机の上に乱暴に置かれた二丁拳銃を指で回しながら腰のホルスターに納める。

「よし、行くか…。派手なパーティーになりそうだ」

これから向かう場所に何があり、何が起こるのか。まるで全てを予知しているかの様に楽しげな笑みを浮かべ、外の店の前に止めてあった大型バイクに跨って彼はどこかへと走り去った……。

…

「状況はどうなってるかな？」

【数は13、大きくも小さくもありません！でも、既に被害者が出てみたいですよ！】

「了解、至急現場に向かいます…！」

後方支援組のロングアーチと通信を取りながら現場へ急ぐ二人。

相手はあの《悪魔》で、既に被害者も出ていると言うのだ。ゆっくりしている時間など存在しない。

やがて現場が見えてくる。それを空から見たのはとフェイトは思わず息を呑んだ。

地面を這う巨大な蜘蛛の様な悪魔。しかし蜘蛛にしてはごつごつとした、岩の様な外骨格。一つしか無い目は、視界に入った者に向けられる。

「現場に到着……これから殲滅を開始します……！」

その光景に内心恐怖を抱きながらも、果敢にデバイスを起動させる。しかしどうしても実物を前にすると、恐怖が心を支配する様な感覚に囚われる。

古から存在する、人の「恐怖」という感情の根源。想像上の怪物は、今自分たちの目の前にいるのだ。

「フェイトちゃん……」

「何？なのは」

「私、今……すごく怖いよ」

「……私も、だよ」

しかしひるまない。これまでに幾度と無く修羅場を潜り抜けてきた彼女たち。いつでも、どんな状況でも諦める事は無かった。それ

は今も同じ。例え相手が異質の存在でも、決して屈する事はない。

その決意を持つ二人に迷いは無かった。

「行くよ、レイジング・ハート!!」

「頼んだよ、バルディッシュ!!」

バリアジャケットを装着し、デバイスを起動。なのはの周りには桃色の球体ができあがり、フェイトは手に持つバルディッシュ・アサルトの魔力刃が巨大になる。

しかし、その攻撃が実行される事は無く。

「ゴアアアアア——!!」

「な、何!？」

「なのは!」

砲撃を開始しようとした時、突然『空から大剣が降ってきて』、蜘蛛の様な悪魔の胴体部分に突き刺さる。そこからは人間の様な赤い血液が垂れ流れ、やがて悪魔は土塊へと戻る。

突然の事なので少しパニックになったのはだったが、落ち着いて陸を見たとき”一人の男”の姿が目に入った。

悪魔を貫通して地面に突き刺さっていたあの太剣をいつのまにか右手に持ち、左手には普通の拳銃より遥かに大きい拳銃を握っている。

る。

「《サイクロプス》ねえ…。姉ちゃんたち、大丈夫かい？」

「きつ、危険です！そこから離れてください！！」

「心配してくれてんのか。もし怪我したら添い寝してくれればいいさ」

なのはの忠告をまったく聞かず、悪魔に詰め寄っていく男。不適に笑い、その鋭い碧眼は悪魔をも威圧する。

「って事だ。お前らの相手はこの俺、さっさと掛かってこいよ」

拳銃を握ったままの左手で手招きをする。しかしその余裕の表情には、狩人としての感情も忘れてはいない。

「グオオオオオオオ——！！！」

「Let's rock!!」

彼は笑みを浮かべたまま、サイクロプス悪魔と戦闘を開始した……。

…

「もう降りてきても大丈夫だぜ」

呆然としたまま宙に浮いている二人に手招きをする男。それでやっと気がついたのか、それでも周りを見回しながらゆっくりと降りてくるのはとフェイト。

「貴方は一体…」

「俺か？俺は…そうだな。ただの無職の浮浪者さ。早くおうちに帰りな…」

「ちよつと待つてください！」

手をひらひらと振りながら踵を返して帰ろうとするダンテを呼び止めるフェイト。その視線の先には、彼が背負う大剣と腰に携えた二丁の拳銃。

「それはデバイスじゃないですよね？」

「Huh・鋭いな。まあ、今回くらいはよしとしてくれよ」

「駄目です！質量兵器の使用は厳禁、これは鉄則ですよ！」

「そうか…じゃあ」

バルディッシュを構え、退かないフェイトの眼を見て小さく笑う。すると大剣を抜き、悪魔の時と同じようにフェイトに向けて構えた。

「生憎、女性^{レディ}に切先向ける趣味なんて無いんだがな。回収したけりや、俺から取ってみせてくれよ」
「くうっ…!!」

彼の威圧に押し返されそうになるが、それを振り切って跳躍。空中で攻撃態勢に入る。

振るったハーケンフォームのバルディッシュの刃が離れ、高速回転を行いながら彼に迫る。

しかしその魔力刃は男が振り払う大剣に相殺され、驚愕の表情を見せる。

「残念だったな。そういう歓迎は嫌いじゃないぜ」

「そんなッ…!!」

「んで、こいつはどういうことだい？」

今度はフェイトに踵を返し、溜め息を吐きながら振り向く。しかしその両手はバインドによって拘束されており、視線の先には魔力を収束し終えたなのはの姿が。

「ごめんなさい…でも、怪我はしないから大丈夫ですっ!!」
「なあ姉ちゃん。矛盾って言葉知ってるかい？」

言葉と行動が真逆のなのはに、思わず冷や汗も出る男。しかしここまで来てしまった。もう撃つまでに時間は無い。

「デイベイイイン……!!」

「Stop!話を聞いてくれ——」

「バスタアアアア——!!!!!!」

彼の叫びも虚しく、膨大な魔力が放射状となつて一気に襲い掛かる。非殺傷設定にはしてあるが、ともに喰らえばある意味死んだ方がましと思えるほどの痛みを味わうであろう。

彼は小さく愚痴をこぼしながら、静かに目を閉じる。

そして着弾寸前。なのはの目には斜線軸に立つ彼の姿が一瞬《悪魔》に見える。だがそれはほんの一瞬で、気付けば着弾。そこから煙が立ち上っていた。

「やりすぎちゃった、かな……？」

自分のデバイスに問いかけるが、『大丈夫でしょう』という曖昧

な返事にも素直に安心してしまつところがちょっとおかしい。

しかし着地したなのは、驚くべき光景に出くわす。

「ハッハ、こりやすげえ。さすがは『管理局の白い魔王』だな」
「嘘……！そんな……！」

煙の中からゆっくりと歩いてくる先程の男の姿。傷は付いていないが、あれ程の砲撃を受けたハズなのに服にすら傷がついていない。そしてなのはの事を『魔王』として知っている。

「さてと、俺はまじで帰るぜ。今回は”ハズレ”だったみたいだしな」

「”ハズレ”……？」

「ああ。あんたらも管理局の人間なんだろう？この写真の女、見つけたら電話くれ」

彼の手から放られた写真を慌しくキャッチするフェイト。その写真に写っていたのは、綺麗な金髪をツインテールにし、整った顔の美しい女性。その裏にはどこかの電話番号が書かれていた。

「女の名前は【レイシー】。管理局にも関係あるハズさ、じゃあな」
「ま、待ってください！」
「What? まだ何かあんのかい？」

今度はさすがに振り向く事は無かったが、立ち止まって笑う。フ
イトは息を呑み、ゆっくりと男に問う。

「私は管理局の【フイト】テストロッサ【ハラウン】と申しま
す。貴方は…【ダンテ】という男性を見かけた事はありませんか？」

「【ダンテ】だって…？」

「はい、私たちは彼を探してるんです。今度また違う意味でお伺い
すると思いますが、何かその人について知っている事はありません
か？」

すると彼は急に笑い出す。最初はこらえていた様だが、やがて我
慢でできなかったのか分かりやすく吹いていた。

そして一通り笑った後に、再び歩き出しながら大きな声で言い
残す。

「【ダンテ】の事は良く知ってるぜ。ただあんな男に関わっちゃ、
いくら命があっても足りないね」

手をひらひらと振りながら、木の傍に止めてあったバイクに跨る。

「俺の名前は【トニー】だ。【トニー】レッドグレイヴ。便利屋
やってんのさ、良かったら一度来てみるよ。じゃあな！」

最後に見た彼【トニー】の顔は、何か楽しみなものを待ちきれない様な、嬉々とした表情。まるでこれからミッドで何が起こるか、全てを見通している様な目だった……。

Mission・2 《必然の邂逅》（後書き）

【トニー】と【ダンテ】。彼らの関係は何なのか？

一度六課に戻り、はやてや他の隊員たちと話し合う二人。現場で会った悪魔の姿、それを一人で擦じ伏せた銀髪の男。そのニヒルな笑い方は、彼女らの目に焼きついている。

そして《便利屋》。それは彼が経営しているという。

まだ彼女らは知らない。《Devil May Cry》と【ダンテ】。そして【トニー】の関係を……。

M i s s i o n ・ 3 〈たどり着いた手掛かり〉 （前書き）

無断の長期間の空白、すいませんでした。

不定期更新でもこの時間差はまずいですよね……（汗

これからももしかすると一ヶ月以上時間が空いてしまつかもしれません。その時は何卒ご了承ください。。。

では、本編をお楽しみ下さい。

Mission・3 〈たどり着いた手掛かり〉

「なるほどなあ…。分かった、二人ともお疲れ様。ゆっくり休みな」

「うん、後はよろしくね」

「じゃあ、はやてちゃんもお疲れ様…」

最後に小さく微笑み、隊長室をあとにするのはとフェイト。彼女らが出て行ったあと、大きく溜め息を吐いて頭を抱えるはやての姿があった。

「【トニー＝レッドグレイヴ】か…。また分からへん事が出てきたやんな…」

その書類には一枚の写真が貼り付けられていた。それはフェイトたちが現場で出会った男【トニー】の姿であり、重要人物として管理されていた。

新たな関与者【トニー】と、搜索している人物【ダンテ】の関係。そしてトニーの質量兵器の保持。

六課は彼の捜査も兼ね、もう一つのキーワード《Devil May Cry》という便利屋の捜索を始めた…。

：

「レイシーって人、そんな事が……」
「うん、間違いないよ。無限書庫の中にあつた書類に載つてたんだよ」

六課のテーブルを囲んで話をする三人の姿。フェイトとなのは、その横にはユーノがいた。机に置かれている一冊の本。どうやらそれは過去の事件に関する文章らしいが、その内容こそが今の彼らの表情を張り詰めさせている原因だった。

「実質的な動きは確認されてない。けど……ほぼ確実にスカリエッテに協力してたらしい。一緒にいる姿も幾度と無く目撃されてるんだ」

「だったら尚更！あの人はなんでこの事を……！」

「それは僕にも分からない。けれど、その事件に関与している可能性は高いはず」

「……」

黙り込むのはとフェイト。悪魔をいとも簡単に殲滅し、尚且つこの件に関わっている可能性が高い。敵かと言われれば答えにないが、否定もできない。

「とにかく僕は彼女についてまた調べるよ。なのは達も、頑張ってみつけられるようにね」

「うん、ありがとうユーノ君……」

ユーノはそのまま去り、フェイトとなのはだけが残った。静かな空間の中、なのははある一つの考えを導き出していた。それはフェイトも偶然なのか、まったく同じ事を考えている。

真紅のコートを纏った男。悪魔を一刀両断する謎の大剣。そして最重要人物の存在を知っている者。

これらのワードを組み合わせ導き出された名前こそが……

「「ダンテ……」」

…

「ここが……そうなのかな……？」

「一応ね。分かりやすく《Devil May Cry》って看板も出てるし……でもなんたってこんな所に……」

ようやくたどり着いた一つ目のキーワード《Devil May Cry》の場所。それはお世辞にも清潔とは言えない、ミッドという『ゴミ溜め』と呼ばれる場所にあった。

周りの雰囲気とは正反対の、一部が壊れている派手なネオンの看板。昼間でも電気は点きつ放しで、チカチカと電球が切れかけている様だ。

「人、いるのかな……？」

フェイトに向けて苦笑いを浮かべるのは。フェイトも同じように苦笑いで返す。

「行ってみなきゃ分からないよ。さあ……」

勇気を出して一步を踏み出した、その時だった。

「Hey・何か用かい？……って、この前の姉ちゃん達じゃねえか」

「あつ、あなたは……！」

不意に後ろから掛けられた声に振り向くと、そこには見覚えのある男が立っていた。

日光に反射して鈍く輝く銀の髪。昼間の瓦礫だらけの景色にあからさまに浮いている真紅のコート。背中には髪と同じようにして輝く、髑髏の装飾が成された不気味な大剣。腰には従来の拳銃とは比べ物にならない大きさの二丁拳銃。

間違いなく、あの時出会った男 「トニー・レッドグレイヴ」
だった。

「こんなところで何してるんだい？」

「それはこっちの台詞です！ここは人が滅多に寄り付かない場所ですよ？」

「そんな事言っても、寢床の役割を兼ねてる店がそこにあるんでな」「そこって……ええっ！！？」

トニーの指差す先は、彼女らが目指していた所と同じ場所。彼は堂々と、自分の店だと言い切ったのだ。

「まっ、細かい事は気にするなよ。用があんなら中で聞かせ」「ちよっ、ちよっと待って下さいよ！」

二人をすりと通り越して、トニーは店の方に歩いてゆく。呆気

にとられていた二人だが、落ち着きを取り戻して彼の背中を追って中に入った。

「悪いな、薄汚れた店だが楽にしてくれよ」

「は、はあ……」

正直薄汚れたではすまないだろう。二人は口に出さずとも、同じ事を思う。

店内のいたるところに蜘蛛の巣が張り巡らされ、埃も積もりつばなし。ゴミ屋敷とまでは行かないが、商売する気はあるのだろうかと言いたくなる。

しかし何より不気味なのが、得体の知れない”何か”の数々。牛の様な角を生やした何かの頭部の骨に突き刺された剣や、壁に減り込む様な形で大の字に固まっている人型の何か。更にはコウモリらしき物の石像、机には大きな鎌が突き刺さっている。

本人はそんな事は慣れたのだろう。何の躊躇も無く足を机の上に乗せ、くつろぎタイムに入ってしまった。大剣も壁に立て掛け、二つの拳銃も机の上に放り出された状態だった。

「あの……お話、伺ってもいいですか？」

「ああ、そうだったな。悪い癖だ、許してくれよ」

足は下ろさないが、なのは達に視線を向ける。これ以上は無理だと悟ったのはは、その状態のままで彼に事情を話し始めた。

「まず、最初に。私は機動六課の高町なのはといいます」

「同じくフェイト・テストロツサ・ハラオウンです」

「OK・はのかとウェイトだな」

「違います！」

「Oh・悪い悪い。続けてくれよ」

早速間違えるトニーに、思わず溜め息が出てしまう二人。ちゃんと話を聞いてくれるのだろうか、もう心配になってきた。

「えっと……。私達はまず、このミッドチルダの治安を守る事が第一の仕事です」

「良く知ってるぜ。ちょっと固い様な気もするけどな」

「それは仕方無いんです。質量兵器は危険すぎる……。世界を滅ぼし兼ねませんから」

静かに彼に言い返すフェイト。その視線に、諦めたように肩を竦めるトニー。

「それで、私達は……」

「回りくどいぜ。さっさと用件を言ってもらわなくちゃ、俺もそんなに暇じゃないんでな」

「……」

実際には死ぬほど暇なのだが、話自体を聞くということが彼にとっては時間の無駄。

「……分かりました。ではストレートに言わせていただきますね」
「OK．．．どんと来いよ」

一つ咳払いをし、視線をトニーに戻してなのは言った。

「私達は六課の任務で、《Devil May Cry》という悪魔退治専門とされている便利屋と、悪魔を狩るといわれている「ダンテ」という人物を探していました」
「で、とりあえずここにはたどり着いたってワケか」
「そうです」

そこでフェイトに変わり、彼女が語り始める。

「そして次は「ダンテ」の番。その人物の情報を聞き出すために、ここに来たんです」

「そうかい。それはわざわざご苦労さんだったな」

「それで、彼はどこにいるんでしょうか？ と聞きたいところですけど……」

「なんだい？」

一度間を空け、確認する事を確かめる。それは彼に失礼な質問かもしれないが、現状ではそうとしか考えられないのだ。

「貴方が……そうじゃないんでしょうか？ トニーさん、いや……ダンテさん？」

「Huh・こりゃ痛い質問だ」

彼の反応を見て、少しずつその可能性を高めていく。目の前にいる男はトニーでは無く、ダンテなのではないか？ 根拠も何も無いが、二人の勘がそう告げていた。

しばしの沈黙の後、口を開いたのはトニーの方だった。

「先に聞いとくが……ダンテに何の用なんだ？」

「それは本人にしか言えません。機密事項ですし……」

「機密事項だろうがなんだろうが、ダンテっていう男は気に入らない仕事には乗らないんだよ。いくら金積まれようが、な。本人が言ってるんだから間違い無いさ」

ニヒルな笑みと共にこぼれたその言葉に、なのはとフェイトの表情は一瞬だが緩まった。やはり一石二鳥。だが相手も相当頑固のようだ。

なのはは諦めたように苦笑いを浮かべ、次に彼にこう話した。

「今ミッドで続いている悪魔関連の事件。ダンテさんには、その件についての協力を求めています」

「悪魔、ねえ……。一つ忠告しとくぜ、お二人さん」

「「？」」

「生半可な考えであいつらと殺り合うのはやめとけ。いくら魔導師だろうが、悪魔ってのは人間でも無けりや機械でも無い。人間に取っちゃ、干渉しちゃいけない存在だ」

口元は笑っていても、目は笑っていない。冷たい碧眼はなのはとフェイトの心の内を察しているかの様で。二人は何も言えず、ただその場で黙り込む。

しかし、その沈黙を破ったのは「ダンテ」だった。

「って言っても俺にとっちゃ、楽しみの一つでもあるんでな。最近の仕事も多かったが……こっちの方が”殺り甲斐”がありそうだ」

「……！」

「寝床と朝夕の飯の保証。あと”コイツ等”の許可。そんだけありや十分さ」

その言葉は二人の表情を笑顔に変え、ダンテ自身も笑みを浮かべていた……

…

「つと……狭苦しい車だった」

「はは……身長、いくつあるのかな……？」

大きなあくびをしたダンテと二人の前には、六課の隊舎が見えていた。

M i s s i o n ・ 3 《たどり着いた手掛かり》（後書き）

魔導師達の目に、彼はどう映るのか。

異様な雰囲気醸し出すダンテに、違和感を覚える六課の面々。
しかし何故なのか、彼が話す事実は嘘と思えない。

それは誰よりも彼が、長い間異形の存在を相手にし続けてきたから。

Mission・4 〈悪魔を狩る男〉

「これが機動六課ねえ……随分と立派な建物じゃねえか」

「はい。部隊も決して古い物では無いので……」

「なるほどね……」

口笛を鳴らしながら歩いていくダンテ。何故か案内役の自分達が置いていかれているのか分からず呆然としていたなのはとフェイトだったが、慌ててダンテの背中を追って走っていった……

…

「じろじろと見られるのは慣れてるが……レディばかりってのは嬉しい誤算だな」

「はあ……」

先程から自分達の話聞いていないダンテに溜め息をつきっぱなしだった二人。せっかく為になる話をしているのに、本人はまったくの上空。

しかし、視線の先にいたある人物を見つけ、なのはとフェイトは目を丸くする。

「はやてちゃん!？」

「あはは……待ちきれんくて来てしもた。ごめんごめん」

「おや、こりやあ可愛らしいお嬢さんだ」

「子供扱いせんとして下さい！機動六課部隊長の八神はやてです！」

「おっと失礼。随分若い隊長さんだな」

さすがに彼にも予想外だったのか、慌ててはやてに謝る。そう言っても、彼女程の若さで隊長を務める等は聞いたことの無い話だが。

しばらく頬を膨らませていたはやてだったが、一つ咳払いをしたあとに気を取り直してダンテに言う。

「こんなところで話すのもなんですし……とりあえず部屋まで行きましょうか」

「ああ、そうだな。立ち話つても俺の柄じゃねえ」

そう言つて、はやては座っていた椅子から立ち上がり、先頭を取つて歩き出した。なのはとフェイトもそれに続き、ダンテもその二人に並んで歩き出した。

「Huh……話には聞いてたが、予想してた以上にトンデモナイ部隊みてえだな、ここは」

「まあ、精鋭中の精鋭を集めてますからね」

ダンテが驚くのも無理は無い。機動六課はかの『J S事件』を中心となつて解決した部隊でもあり、『管理局の魔王』と呼ばれる高町なのはや『ノワールライトニング』の名を冠するフェイト・テスタロッサ・ハラウン、部隊長も『夜天の王』八神はやて。まさしくエリート中のエリートを集めた部隊なのだ。

「っと……ここか。やっぱり自分の部屋は持つてるもんだな」

「ささ、中へどうぞ」

ドアが開き、中に入ったあとにダンテに手招きするはやて。一度小さく笑みをこぼし、ダンテは中へと入っていった……

…

「……そんな感じです。ざっくりですみません」
「気にしないでいいさ。だが、つまり……だ」

一度間を空けてから、ダンテは三人に確認する。

「俺にこの部隊に入って、姉ちゃん達が言ってた様に『悪魔を狩るのに力を貸せ』と?」

威圧感を大いに含むその言葉に、はやては表情を変えずに息を飲む。まるで睨まれているかの様な鋭い碧眼は、はやての視線をはずさない。

しかしはやては一度目を瞑り、数秒後にぱっと目を見開いてこう言った。

「そうや。でも、『魔導師でも相手にできない』そう言ったのはダンテさんのハズ。だからこそ、あなたの力を借りるんや」
「……………」

相手に畏怖する事無く、彼女は堂々と言い放った。予想外だったのか、ダンテは一瞬目を丸くしたあとに苦笑を浮かべる。

そして、次にその沈黙を破ったのはダンテだった。

「ハハッ、こりゃ驚いた。大体の奴らはこうやって驚かしてやれば逃げてくんだが……まさかお嬢さんが逃げないなんてな」

「子供扱いせんといってくださいって!」

「悪い悪い。だけだよ……」

黙ってしまったダンテに、はやては首を傾げる。しかし次に彼から返ってきた言葉は、彼女らの表情を歓喜に染める内容だった。

「組織つてのは好きじゃないが……たまには体験してみるのもいいかもな。ただし、ある程度は自由にさせてもらっぜ」

「——はいっ！」

「これで決まり、だね」

フェイトがなのは小さく微笑みかける。なのはもそれを笑顔で返し、ダンテは満足そうに頷いていたのだった……

…

「えー、ゴホン。皆ちよつと聞いてなー」

「あれ？どしたんだろ。ねえティア」

「分かんないけど……隊長がわざわざ前に出て話すんだから、大事な事なんじゃないの？多分」

それぞれの視線がはやてに注がれ、前に立っているのは隊長を務める三人。そしてその隣には、あまりにも浮いている服装をした大^ダ男^{ンテ}。

最初ははやてに集まっていた視線も、程なくして隣のダンテに向けられる様になった。

「えっと……皆も知つと思うけど、なのはちゃ……高町一等空尉と、ハラウン執務官の活躍のおかげで！探してた人物を見つける事ができました！」

「探してたって……ダンテって人でしょ？まさかあの人が？」

「だとしたら最悪ね。見るからに色々とヤバそうじゃない……」

「そりゃ悪かったなお嬢ちゃん。この髪の毛は地で、コートも赤が一番”ヨゴレ”が目立ちにくいんだよ」

「聞こえてたの！？」

ティアナは思わず声を上げてしまう。まさかこのざわめきの中、それも一番前に立っているダンテの耳に、こんなに小さな呟きが届くはずが無い。仮に叫んだとしても、騒音に飲み込まれてしまうだろう。

ティアナを黙らせたところで、ダンテははやての代わりに前に立つ。

「特に話す事は無いし、別に無理に親しくしてくれなくてもいいぜ。まあ美人は俺にだけ気をつけとけばいい話さ。そんだけだ」

「はは……まあ、皆仲良くしたってな。今日の話はこれまで！」

「な、なんか……大変な事になっちゃったね、ティア」

「ダンテ、ねえ……」

ティアナとスバルが苦笑いを浮かべていると、ダンテが何を思ったのか彼女らの方に歩いてゆく。それに気付いたティアナは慌ててスバルの背中を叩き、ダンテの方に体を向かせる。

「初めまして。二等陸士ティアナ・ランスターです」

「は、初めまして！あの、えっと……スバル・ナカジマです！二等陸士です！」

「おいおい、そんなに固くなるなよ。こちらら臨時みたいなもんだ、気楽に頼むぜ」

「そういうわけにはいきません。今日はこれで失礼します。行くわよスバル！」

「ええ！？あの、えっと……よ、よろしくお願いしますね！」

ティアナに引きずれて行くスバルを見て、ダンテは呆れた様に笑う。なのは・フェイト・はやても同じく。

「どうやらティアラってお嬢ちゃんは、俺の事が気にいらないみたいだな」

「ハハ……すみません。ほんとに優しい子なんですけど……」

「分かるさ。スバルって子は顔に違わず素直だったな。何はともあれ、楽しそうだ」

陽気に笑うダンテ。なのはも小さく笑い、フェイトとはやてはそ

んな二人を訝しげな表情で見つめていた……

…

「デバイス、ねえ……。これの使用は条件の一つだったハズだぜ？」

「そうなんですけど、一応デバイスを持ってもらわないと色々と

……めんどくさいので……」

「言うね、姉ちゃん」

「き、聞かなかったことにして下さいっ！」

最後の方は蚊の泣くような声になっていたフェイトの愚痴を、ダンテは聞き逃さなかった。

今彼らが向かっているのはデバイスルーム。そこで待つデバイスマスターのシャリオ・フィニーノの自己紹介と、ダンテの使用デバイスの作成依頼。もっとも前者は後者のついでだが。

ダンテの持つ質量兵器は、本来は使用厳禁の代物。彼は協力の条件として使用を許可されたが、無闇やたらと振り回していい物ではない。それこそ管理局の信用が失われてしまう。

それらの理由で結局ダンテ専用のデバイスを作成する事になり、今の状況に至る。

「ここです。中で待ってると思いますから、入りましょうか」
「堅苦しい奴じゃなきゃいいんだがな」

ドアが開き、中には一つの人影。
それはこちらに気付くと、すぐに二人に向かって走ってきた。

「ごめんねシャーリー。よろしくね」
「いえいえ！こちらこそ……って、貴方がダンテさんですかあ！？」
「Hey girl. 声が大きいぜ」

ティアナとは打って変わってこのテンション。目を子供の様に輝かせ、ダンテをじっと見つめている。

「初めまして！六課の皆さんのデバイスの作成・修理をやらせてもらってるシャリオ・フィニーノと言います！シャーリーって呼んで下さいね！」

「ツハハ、こりゃ元気なお嬢さんだ。よろしくな」
「二人とも自己紹介が終わったところで。本題に入るよ？」
「す、すみません。つつい……」

フェイトの方に向き直り、苦笑いするシャーリー。ダンテはやれやれと言った表情で肩を竦めている。

「じゃあ、ダンテさん。デバイスのデザインの事ですけど……」

ダンテも最初は気だるそうにしていたが、結局細かい部分まで決めている内にゆうに三十分を超えていた。しかし終わったあとのダンは少し楽しみなのか、口笛を吹きながら廊下を歩いていた。

「デバイスつてのもなかなか面白そうだな。まるで子供の頃に憧れていた魔法使いが使ってる武器みたいになんでもできるしな」

「まあ、私達も魔法使いみたいなものですけどね……ハハ」

「そっぴやそうだな。すっかりわす……」

しかし二人の会話を邪魔するかの様に、けたたましいアラートが鳴り響く。

話の途中に割り込まれたダンテは、アラートの意味がどうのこうのの前に舌打ち。

「人の話の途中で割り込むんざ、空気の読めないヤロウだ」

「これって……!」

『フェイトちゃん!ダンテさん!』

「はやてちゃん!？」

モニター越しに映るはやての姿。ダンテでも分かる、楽しいお知らせではない事だけは。

『また出たで！今度は数も多い！』

「Huh・俺のロツカ入りの初仕事ってワケだ。楽しみだね」

『氣い抜かんとして下さいよ？』

「Don't worry・任せとけよ」

はやてからの指令が下る。

高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラウン、ダンテ。

その場で三人は目を見合わせ、お互いに頷いた。

…

「へりに乗るのは初めてだが、こんなに快適なモンなのかい？」

『そんな事無いぜ旦那！このへりは特別仕様、他のへりとはワケが違うんでね！』

ダンテの質問に答えたのは、へりパイロットを務めるヴァイス・グランセニック。六課内でも珍しい男性だが、これまた分かりやすい男である。典型的でもあり、男の説明としては彼を有効に使用できるだろう。

一方質問した側は、予想外のヘリの揺れの無さに満足している様で、先程から外の景色を眺めている。緊張感などと言った物は皆無。ヘリに乗り、魔導師達と戦うのは初めてだが、内容は変わらない。ただ、目の前の悪魔を討つ事のみ。

それは、この悪魔狩人の生き甲斐でもあった。

「ダンテさんは空中戦はできないんですね？」

「ああ。空を飛ぶなんてのは、生物だったら魔導師か”悪魔”にし
かできねーだろうな。いや、悪魔を生物扱いするのは間違ってるか」

「じゃあ、私となのはで空中から攻撃します。ダンテさんは……」

「俺は俺でやらせてもらうぜ。こだわりなんてのは無いが、人にど
うのこの指図されるのは大嫌いなんでね」

フェイトは口を噤む。一瞬怒鳴ってしまいそうになったが、これ
も彼との約束。ダンテは檻の中で、命令された動きをする動物とは
正反対。自由に野山を駆け回り、決して首輪すら認めない。自由の
中でしか行動しないのだ。

小さな溜め息をつき、肩を竦める。それは妥協したという合図で
もあり、あまり無茶はしないでくれという意味も兼ねているのだろ
うか。

どこまで理解したかは分からないが、ダンテは笑顔で納得。そし
て何か思い出したかの様に、操縦者のヴァイスに呼びかけた。

「ヴォイス！出発する前に言ってたアレ、今するぜ！」

『ヴァイスだぜ！アレって……本当に大丈夫なんだろうな？』

「空飛ぶ魔法使いが二人いるんだ。何とかなるさ」

『ははは……まったく、旦那には参るぜ。頼むから死なないでくれよ！？』

そう言ったあとに、ダンテはヘリのハッチの前に移動する。

何をしたいのか分からないのはとフェイトが、ダンテに尋ねようとした時だった。

「Huh！ 絶景だな！」

「なっ、何してるんですか！？」

「もちろん、パラシュート無しのスカイダイビングってヤツだ。：

…行ってくるぜ！Yee e - h a w ! ! ! !」

「ちよっ——ダンテさぁん！」

そしてなのはの制止を振り切り、コートを風に靡かせながら飛び降りる。なのはの叫び声が聞こえたが、ダンテの頭には入っていなかった。

彼の目に映っていたのは、地上を埋め尽くす悪魔の数。しかし今のダンテにとっては、最早パーティーのための道具としか見えていない。

そのまま急降下し、途中で背中の大剣を抜く。右手にそれを持ち、態勢を整える。

「こんなに多いのは久しぶりだ。今日は派手なパーティーになりそうだ……ハッ！……！」

そして剣を突き刺す形で着地。数十の悪魔が衝撃に飛ばされ、砂埃が舞い、視界が悪くなる。悪魔達は落下地点に一齐に視線を集め、その中心には一人の狩人^{ハンター}が立っていた。

「Let's rock baby!!」

そして悪魔が鎌を振り上げるよりも先に、真紅のコートを纏った狩人は異形の群れへと切りかかっていった……

Mission・4 〈悪魔を狩る男〉（後書き）

口では言い表せない。

なのはとフェイトの目に映るのは、大剣一本と二丁の拳銃で平然と数百の悪魔を屠る男の姿。

返り血は彼のコートに付着し、剣は鮮血の赤を帯びる。

正義でもなく悪でも無い。ならば、彼は一体何なのだろうか？

二千年前の英雄も、その境目をさ迷っていた……。

Mission・5 《混血者》

……さん！……テさん！

「あと、五分だ……」

「ダンテさんっ！」

「うおおっ！！なんだ！？」

「もう皆さん起きてますよ！後はダンテさんだけだって……」

「ハハ、悪いなスバル」

目をこすりながらスバルに謝るダンテ。大きなあくびを一つかましたあとにベッドから立ち上がり、イスにかけてあったコートを乱暴に羽織る。やっと気も確かになってきたのか、机の上に置いてあったジントニツクを一口。スバルは朝から酒を飲むダンテに軽引き気味だった。

スバルに礼を言い、一緒に部屋から出る。少し廊下を歩いたあと、スバルが挨拶代わりに尋ねてきた。

「一昨日、凄かったですよね……。なのはさんもフェイトさんも驚いてましたよ」

「まあな。あんなに多かったのは久々だが、一年前ぐらいにもあれよりひどいのがあったね」

「本当ですか！？あれよりひどいって……五百とかですかね？」

「数えてない。まずあいつらの故郷……まだこの話は早いな」

「え？何ですか？教えて下さいよっ！」

妙なところで言い止めたため、余計に聞きたくなってしまいうスバル。しかしダンテは答える気など毛頭無く、小さな笑みを浮かべながら食堂に向かっていた。

「おつつつそいでダンテさん！」

「悪い悪い、許してくれよ。つい寝坊しちゃった」

「はは……まあ、座って下さい」

時間は既に九時半。朝食には余りにも遅すぎである。はやての叱咤を気にする事無く、ジントニックをもう一口。周りの隊員達は呆れる者もいれば、苦笑いする者もいた。

「で、皆でブレイクファーストなんて何かあったのかい？」

「いや、一昨日の反省とかです。それで、ダンテさんには……」

「あとで呼び出し喰らうだろうな。まったく、人気者は困るぜ」

自分の口から出る前にダンテが言った事で、なのはは口を噤む。皆朝食を食べ始めたが、この会議の”本題”を現場で見ていたなのはとフェイトは、なかなか着に手をつける事ができなかった……。

…

「Break down!!」

なのはとフェイトの目に映るのは、悪魔が切り伏せられていく光景。

ダンテが大剣で悪魔を薙ぎ払い、拳銃の一撃で消し飛ばす。あれ程管理局の魔導師が手こずっていた相手を、彼は易々と撃破している。

悪魔達は断末魔を上げる暇も無く崩れ落ち、死体は塵となって消える。そこには何も残らない。死体や血痕、悪魔の持つ鎌すらも。そこに決まって残るのは、赤い血の結晶の様な物だった。

「数が減ってきたんじゃないか？今日はこんなもんなのかい？」

ダンテが悪魔の群れに手招きしては、掛かってきたそれらを薙ぎ払うの繰り返し。今のところダンテは掠り傷一つ負っていない。悪魔を切り裂いた時の返り血が、彼の銀髪を赤く染めていた。

なのはとフェイトは本来中心となって戦うハズなのだが、今はそ

んな状況では無かった。自分達よりも遥かに彼の方が上回っている。誰が見ても、例えなのは尊敬するスバルやティアナ達が見てもそう思うだろう。そう思わなければおかしい。

人外の異形を、ここまで簡単に殲滅してしまう。

悪魔狩人という肩書きを持つ”人間”が。

「凄い……！」

「危ないなのは！」

ダンテの戦いに見とれ、気を緩めた一瞬をフェイトは庇った。敵は地上だけでは無く、空を浮遊する死神の様な悪魔もいた。その悪魔の持つ鎌が、なのはを狙ったというわけだ。

慌ててシューターを撃ち、すぐに敵を撃墜するのは。

「ご、ごめんねフェイトちゃん！」

「気にしないでいいよ。空も少なくなってきたし……」

「でも、やっぱり凄いよね……ダンテさん」

「（凄いと言うよりも、何か……変な感じがする）」

下で戦っているダンテに視線を向ける二人。

彼はまだ戦闘の最中。四面楚歌の状況で、掛かってくる悪魔を片っ端から切り伏せるだけのシンプルな戦闘方法。それでありながら、まるで草刈をしているかの様に悪魔が薙ぎ払われていく。

彼の実力は異様なものだった。

「ハッハー！」

真後ろから迫る鎌を、見もせずにかわす。そして態勢を崩した悪魔の頭部に銃口を押し付け、反応するよりも早く仕留める。

複数の悪魔の頭部を土台代わりにし、空中で逆立ち状態での拳銃乱射。まるで雨の様に降り注ぐ鉛弾は、真下にいる数体の悪魔を蜂の巣にしてしまう。

当初は100をゆうに超えていた悪魔の数は、今や30以下にまでなっていた。

「Huh．そろそろお終いか？」

「大丈夫ですかダンテさん！！？」

「おっ、ナノハとフェイトか。良くやってんじゃねえか……五分ちよつとであいつら落としちまうなんてな」

ダンテの言った”あいつら”こそが、二人が相手をしていた悪魔。漆黒のフードを身に纏い、見るからに奇妙な仮面をつけた悪魔。管理局や六課では『シニガミ』と呼ばれる悪魔である。

しかし相手は『白い魔王』と『金色の閃光』。量産の雑魚では相手にできるはずも無く、たった五分足らずで全滅した。

「今度から俺と一緒に悪魔狩りした方がいいんじゃないか？」

「お断りしておきますね、はは……」

まだ悪魔は全滅しきっていないこの状況で、ダンテはさも余裕そうに手を振ってみせる。苦笑いと溜め息しか出ない二人は、空でダンテを見つめていた。

「そうだな……そろそろ”お開き”にしねーとな。ってワケだ、クズども」

一度納めた拳銃を、再びホルスターから抜く。カウボーイの様にくるくると指で銃を回す様は、なのはとフェイトの視線を引き寄せる。

そして止めた直後から、銃自体が真紅のオーラの様な物に包まれていく。その禍々しい赤は、彼の腕をも覆っていく。

「ッハ！あばよ糞野郎！」

そして放たれた一撃は余りにも大きく。真紅の魔力弾は残っていた悪魔は愚か、気付けば辺り一面が荒野になっていた。ダンテはその威力に満足している様で、軽快に口笛を吹く。そして余りにも対照的に、なのはとフェイトはその光景を見て開いた口が塞がらない様だった……

…

「（やっぱ、ぶっ放さない方が良かったかもな……）」

「ダンテさん？」

「あ？いや、何でも無い。気にすんなよ」

一昨日の事件の事を思い出し、苦笑いになっていたところをなのはに引き戻される。ウィンクで返し、再び思考をその件に戻す。

大量の悪魔を殲滅したのは良かったが、そのあとが問題だった。悪魔どころか草原までもダンテの一撃で消し炭にしまい、幸い怪我人はいなかったものの違う意味で大惨事になりかねない。

「ダンテさん……ちょっとええかな？」

「なんだハヤテ？悪い事はしてねーぜ」

「（一昨日の件、反省してへんな……）」いや、ちょっと話したい事がある。大事な事です」

「Hum・なるほどね。もちろん、ナノハとフェイトも一緒だろう？」

「よう分かってますね。そういう事で、二人とも？あとで三人で隊長室来てな」

「う、うん……」

何の話か聞かされていないのか、疑問符を浮かべながらも返事する二人。ダンテはある程度の予想はついている様で、やれやれと言った表情でピザを食べきった。

「ごちそうさん。先に一服しとくぜ」

「ま、待って下さい！私ももうちょっとで行きます！」

「じゃあ、先に行ってるね？なのは」

「ま、待ってよフェイトちゃん！」

取り残されそうになるところを、慌てて二人を追って飛び出していくのは。

走ってようやく二人に追いつき、息を切らしながら膝に手をつく。

「ま、待ってって、言った、のに！」

「悪い悪い。先に行くつもりはなかったさ」

悪びれる様子の無いダンテを見て、息を切らしながらも溜め息をつく。反省というものを習っていないのかと思うほどだ。

ゆっくりと息を整え、再び並んで歩き出す。ダンテが真ん中、両サイドにフェイトとなのはがいる。

「話って、何なんだろうね？」

「うーん……あるとしたら……」

「一昨日の件だろうな。もちろん俺だ」

自覚はしている様で、ニヒルな笑みを浮かべながら口笛を吹く。当然怒られるとは誰も思っていないが、嚴重注意は免れないだろうとは誰もが思っているはず。なのは溜め息をつき、フェイトはそれを見て苦笑いになり、ダンテは依然反省する様子は無い。

そんなこんなで隊長室の前に着き、一度息を大きく吸ってからはやてに呼びかける。

「高町なのはです」

「どうぞ。入ってな」

「失礼します」

親しき仲にも礼儀あり。仕事での公私はもちろん区別している、とは言いい切れないが、やはり決めるべきところはキチンと決める。それはどの職場でも同じであろう。

「ようハヤテ。随分と……思いつめた顔だな？」

「ッ——……！」

「もちろん、今回の話と関係あるんだろ？」

まるで挑発するかの様な言い方。しかしはやては依然沈黙を通し、ダンテは彼女から視線を外さない。つい先程までの空気は一変し、

冷たい感覚がなのはとフェイトを襲う。

「とりあえず……座ってな」

静かに言うはやて。なのはとフェイトは顔を見合わせ、疑問の表情を浮かべながら席に着く。一方ダンテは普段と変わらず。ソファに凭れ掛かり、足をドカッと机の上に乗せる。

しかしはやてはダンテを咎めず、一度だけ溜め息をついたあとに、三人に『ある映像』を見せた。

「これ、よう見てくれるか……？」

「これって、あの時の……！」

「……………」

それは先日の子の映像。終盤の方しか映っておらず、ダンテの”一撃”が放たれた部分ではやてが一時停止ボタンを押す。

その状態で映されていたのは。

「どうしても、ダンテさんに聞きたい事があるんや……」

まず、彼の両手を包み込む真紅のオーラ。しかしなのは達が使用する魔法とは違う。視覚できている情報だけでも分かってしまう程、

” 禍々しい ” 魔力を放っている。

そして、二つ目。

一時停止された映像に映っていた彼の ” 腕 ” 。

「そん、な……！」

「……………」

「見たら分かると思う。やろ、ダンテさん？」

沈黙を保つダンテ。しかし映像に映された彼の腕は、人間の形を保ってはいなかった。

真紅の魔力に包まれた腕は変形し、元の面影を残してはいなかった。赤黒く変色し、刺々しい形へと変貌している。それも、魔力に包まれた部分のみだ。

まるで、” 悪魔 ” の様に。

「で、でも！これって単なる見間違い……………」

「そう思った。けど、この魔力は私らの魔力と違った」

「……………どういう、意味？」

「そのまんまや。魔導師が基本使用する ” 魔力 ” と違う。禍々しい、何か」

依然沈黙のダンテ。その映像を見つめたまま。

しかし、はやてが何か喋ろうとした時だった。

「でっ、できますた！やっとなりましたよ部隊長！」

「「シャーリー！！？」」

「ほんつま……空気読めへんなあ……」

「ああっ！す、すみません！」

まるで冷凍庫と某熱血庭球プレイヤー位のテンションの差で部屋に入ってきたのはシャーリー。左手に何かを持っており、興奮の余りノックも何もせずに入ってきてしまった様だ。

しかし何かを思い出した様に、はやてはシャーリーに問いかける。

「シャーリー。それって頼んどったやつ？」

「はい！試作品ですけど、これを発展させれば……！」

「な、何？」

箱の中から彼女が取り出したもの。それはメーターが付いた意味不明の物だった。

「これは……？」

純粹に何か分からないので、苦笑いしながらシャーリーに尋ねるのは。すると待ってましたと言わんばかりに、シャーリーが目を

輝かせながら説明し始める。

「最近できたばかりの特殊魔力感知式レーダー……簡単に言うと、先程部隊長が言ってた通り《魔導師》と《悪魔》の魔力を区別する機械です。区別と言うよりは悪魔の魔力を感知して、その大きさや数を知らせる方に向いてますかね」

「悪魔の魔力の大きさを感知する……？」

「はい。どうかしましたか？ダンテさん」

今まで黙りっぱなしだったダンテが、無意識の様に顔を上げて質問する。そしてシャーリーの返答を聞き、何故自分がここに呼ばれたかという”理由”を知る。

「ハッハハ……なるほどね。随分と察しがいいじゃねえか、ハヤテ？」

「それはこっちのセリフや。まだヒントすら言ってへんのに、もう勘付いたんですか？」

「まあな。自分の体の事は、自分が一番良く知ってる」

はやてとダンテの会話についていけない三人は、互いに顔を見合わせて首を傾げる。ダンテは何か面白いのか笑っており、はやては相槌を打つように小さく苦笑を浮かべている。

そしてダンテが笑いを止めると、はやてはシャーリーに言う。

「シャーリー……、その機械、もう動かせるんやよね？」

「え？は、はい。スイッチを入れれば動かせますけど……」

「じゃあ、一回電源入れてくれへんか？」

「ええっ！？こんなところで入れても何も起こりませんよ！？」

「それは、やってみなきゃわかんねえぜ？お嬢ちゃん」

何故かダンテがシャーリーを諭し、意味が分からずともとりあえず電源装置のボタンを押すシャーリー。

しかし、一度機動したかと思えば、突然メーターが狂ったかの様に限界値を示す。そしてガタガタと振動した後に、何かが弾ける様な音がして電源が落ちた。

余りに突然の出来事に、シャーリーは目を丸くして固まっている。なのはとフェイトも最初はシャーリーと同じ状態だったが、その結果が何を意味するのかを知った瞬間に一気に警戒を強める。

しかしはやては依然ダンテを見つめたまま。そしてダンテは再び笑い出し、机の上に乗せていた足をゆっくりと下ろしてゆく。

「やっぱしな……」

「え？何、何か知ってるのはやてちゃん？」

「その、剣と銃じゃないんですか？今の振りを示した”原因”は？」
「What? こいつらだって言いたいのかい？」

確信した様に問い詰めるはやて。しかしダンテはさっきの表情から一変し、一瞬だけ呆気に取りられた様な顔を見せる。しかしそれは

ただの一瞬で、今度は耐え切れないかの様に笑い始めた。

次に呆気に取りられたのは彼以外の四人。何故笑うのかは検討も付かず、はやてに至っては正論をバカにされたと思い込んで顔を真っ赤にしている。

しかし、ひとしきり笑い終わったダンテの口から放たれた言葉は、再び四人を呆然とさせる。

「あのメーターが振った原因は”俺”だろ」

「……はい？」

「いや、だから。俺の魔力値に反応して振ったって言うてんだ」

ダンテの一言が理解できず、その場でフリーズ。ダンテは『何が不思議なんだ？』とでも言いた気な表情で首を傾げている。

そして沈黙を破ったのははやての一言。

「ダンテさんの魔力だけで振り切れる事ありえへんやろ……悪魔とかロストロギアならまだしも」

「ああ、そう言えば……まだ誰にも言ってなかったな」

「？何ですか？」

「信じるかどうかはお前ら次第だけだな」

益々わけが分からなくなり、シャーリーに至っては混乱してあたふたしている。

そして改めるわけでも無く、ダンテはある事実を平然と言い放つ。

「俺は純粋な人間じゃあない。まあ、平たく言えば……」

《悪魔》と《人間》の混血^{ハーフ}だ」

M i s s i o n ・ 5 〈混血者〉（後書き）

彼本人から語られた事実。

それは彼への信頼を失うには十分な情報であり、また彼の謎が多く解明される有力な情報でもあった。

しかし人々は必然的に前者へと流れる。

討つべき”敵”との混血者。

ならば何故、彼は悪魔を狩るのだろうか？

Mission・6 《運命》

「ハー、フ……？」

「ああ」

彼の言った単語を無意識の内に復唱するはやて。ダンテはそれを感じする事無く、ホルスターに納まっていた拳銃を取り出して暇潰しの代わりに弄っている。

呆然としているのははやてだけではない。その場にいた、ダンテを除く全員が彼女と同じリアクションを取っているのだ。

「でっでも、悪魔とのハーフなんて話は——！」

「聞いた事が無い、だろ？聞いたことあるハズが無い、むしろあったらこつちが驚くさ。なんせ今じゃ恐らく俺だけだろう。もっとも、今はいないがアイツも……」

思い出す暗い過去。しかし戻らぬ思い出に浸るという柄でないのは、本人が一番良く知っている。

「……じゃあ、あのメーターが振りきれた理由も。感じ取った魔力が魔導師と違った理由も。全部、それが原因なんですか？」

「ま、そうなるだろうな。少なくとも、俺は人間と一緒になのは格好

だけさ」

「格好だけで……！でも、信じきれへんで……」

「信じなくてもいいって言っただろ？まあ、証拠ならいくらでも見せられるがな」

「証拠？」

「見たいか？ちよつとグロが入るかもな」

最後の一言に若干引き気味になるが、なのはは小さく頷いてみせる。するとダンテはおもむろに拳銃を自分の側頭部に押し付けた。パニックになるのは頷いたなのは。何をしでかすかは大体想像できるため、慌てて手をブンブンと振る。しかし、ダンテはそれを気に留める事も無く……――

――ガアンッ！！

四人の女性の目の前で、自らの手で引き金を引いて見せた。

弾は脳天を貫通し、そのまま壁に減り込む。止めようとしたなのははその格好のままで固まり、はやてとフェイトは見ないように目を瞑っている。もっとも、シャーリーに至ってはその場で気絶したが。

「おいおい、見せてやるって言うてんのに。まともに見てんのはナノハだけじゃねえか」

「えっ……？嘘やろ……？」

「そんな……信じられない！」

聞こえるハズの無い声の主は、平然と喋っている。しかし確かに撃ち抜かれた部分からは血が垂れ流れ、床を血溜まりにしていた。フェイトとはやては閉じていた目を開き、その光景に啞然とする。なのはは依然、先程のポーズのままで固まっている。

「これが人間とは違うところの一つだ。もっとも、痛いのは人間以上に痛いかな。なんせ死ねないんだからよ」

「（驚異的な、生命力……！頭を撃ち抜かれても死なないなんて……！）」

「（こりや凄いな。人間とは思えへんて前から考えとったけど、まさかほんまに”人間”ちゃんとは思わなんだで）」

「（はっ、はやてちゃん！人間じゃないなんて言っちゃ駄目だよ！）」

「おいおい、俺を差し置いて念話なんて寂しいじゃねーか」

内容はばれていないだろうが、三人とも苦笑。『目の前にいるのは純粹な人間じゃないですよ』なんて言われたら、信じる信じないの前に誰でも笑ってしまうだろう。もっとも、彼女らに限っては”証拠”を見せられているが。

「それで……これから俺はどうなるんだい？まさか悪魔と一緒に殲滅するなんて言わないでくれよ？」

「そっ、そんな事は無いですよ！別に……」

「別に何も変わりませんよっ」

そう言い放ったのはなのは。

「それどころか、余計頼れる存在になったで！ダンテさん！」

次にはやてもそう言い放ち、フェイトも目が泳いでいながらも二人に合わせて何度も頷く。

ダンテは最初は呆気にとられていたが、やがて小さく笑みを溢す。悪魔である自分を素直に受け入れてくれるのは、今は亡き家族だけだった。

「ククク……ハッハハハ！改めてよろしく頼むぜ。」 白い魔王”に
”金色の閃光”、”夜天の王”さんよ？」

「は、はい！」

「何か、新鮮な呼ばれ方だね……悪くないかも」

「私だけジャンルが違うような……ま、ええか！」

三人と握手を交わし、満足気に頷くダンテ。

そこにシャーリーがやつと目を覚まし、思い出したかの様にダンテに伝える。

「そうだ！ダンテさん、デバイス完成しましたよ！」

「Huh・そりゃ楽しみだな」

「完成って言うか、調整はしてもらわなきゃいけないんですけど。それだけであれば、あとは実戦で使えるから大丈夫です！」

元気に語るシャーリーをスルーし、部屋の出口に立つ。

「今度時間があったら、詳しく話すさ。俺の……親父の事もな」

…

「これが原型か？」

「はい。通常時の状態ですね」

「なるほどな……」

ダンテは今、一つの指輪を凝視している。それは銀色に輝き、ダンテの髪色とほぼ同じ。それをゆっくりとした動きで、薬指に嵌めていく。

「で、どうすりゃいいんだ？」

「簡単です。掛け声をかけるなりなんなりしてくれれば、すぐに起動しますよ！」

「了解。じゃあ、さっそく動いてみるよ」

掛け声と言うよりは喋りかけたに近いが、それでもその指輪は眩い光を放つてある物へと変形する。

「Huh! いいデザインだな、注文した通りだ!」

「ありがとうございます! ちょっと難しかったですけど……」

「ハハッ、これ見てると思ひ出すな……あの馬鹿野郎を」

「えっ? 何か言いましたか?」

「いや、何でもないさ」

ダンテが右手に握っているのは一振りの日本刀。従来の刀よりも一寸程長く、磨き上げられた白銀の刀身は部屋の明かりを反射している。

少しの間眺めていると、突然デバイスが喋りだす。

『初めましてマスター。』

「おっ? 喋るのかコレ?」

「はい。インテリジェントデバイスですから」

『マスター。私の名前を決めて下さい。』

「名前、ねえ……。そのまんまでいいか」

少しだけ考え、すぐに決まる。それは元よりその刀をイメージして作った物であり、名前などはどうでも良かった。ただ、見ているだけでも思い出せるだけで。

「お前の名前は闇魔刀だ。忘れんなよ」

『承認しました。マスター、ダンテ。デバイス呼称、闇魔刀。登録完了しました。これからよろしくお願ひします。』

「律儀なAIだな。よろしく頼むぜ」

そして新たな武器――《闇魔刀》を待機状態に戻す。

「汎用性はんぱじゃねえな。しかも専用と来た」

「ダンテさんには、普通のデバイスじゃ駄目だって言われてましたから」

「誰にだ？」

「もちろん！隊長さん三人です！」

「気が利いてるな。おかげで助かった、じゃあな」

一度ひらひらと手を振り、部屋を出て行こうとするダンテ。その背中を何気なく見送っていたシャーリーだったが、大事な事を思い出して慌てて呼び止める。

「ダ、ダンテさん！一つ言い忘れてました！」

「？何だ？」

「そのデバイス、専用と言っても……もしかしたら、全力で魔力を開放するとイカレちゃう可能性があるんです。だから、最初は抑え気味に使って下さいね？」

「OK．分かったよ」

そう言って部屋を出ると、そこには少しだけ見覚えのある人物が直接話した事はないが、今までに何度か見た事があった。

桃色の長髪を後ろで一本に束ね、常に凜とした雰囲気崩さない。ダンテとはこれまた対照的人物であった。

「よう、初めまして。シグナム、とか言っただけ？」

「覚えてくれているとは光栄だな、ダンテ」

「で、何の様な？デートのお誘いなら喜んで受けるぜ」

「まあ、デートと言えばデートだ。だが若干『激しい』デートになるぞ？」

「……いいね。そういうのは嫌いじゃないぜ。それに、コイツの性能も試せるしな」

ライトニングの副隊長シグナムの提案を受け、ダンテは快く承諾する。常に虎に睨まれているかの様なプレッシャーを放っているシグナムだが、ダンテには通用しない。

《騎士》と《狩人》。シグナムが先導する形で、ダンテはある場所へと向かった……

…

「すげえな。一瞬で廃棄街に変わった」

「そういう技術だ。ミッドチルダは最先端技術、小さな先進国みたいな物だからな」

「なるほどね……わざわざ説明ご苦労さん」

廃棄街の大通りに立ち尽くす二人の姿。騎士甲冑を身に纏う守護騎士の一角シグナムと、最強の悪魔狩人の名を冠する悪魔と人の混血者ダンテ。人の姿をしていながら人でない彼らは、静かに互いを見つめあっている。

「行くぞ、レヴァンティン」

『了解しました。』

「ソイツがあんたのデバイスか？」

「ああ。優秀な奴だ。貴様も早くデバイスを起動しろ」

「そう言っただってなあ……行けるか？ 闇魔刀」

『All right. いつでも行けます。』

「ハハッ、いい心構えだ。緒戦、頼むぜ？」

『はい、マスター。』

ダンテの合図と共に、彼のデバイス《闇魔刀》は本来の姿を見せる。柄と対照的な漆黒の鞘から覗く刃は、今にも敵を切らせると言わんばかりに光を反射する。

「ほう……貴様のデバイスも刀状か」

「ああ。ま、シンプルなのは好きじゃねえんだがな」

「いいだろう。剣士と言ふのなら余計に斬り合いたくなる」

闘志を滾らせる瞳。心の底から強者を求める体。シグナムの興味は今、全世界でこの男一人に注がれている。

「我が名はシグナム！夜天の王を守りし守護騎士の一角、《烈火の将》シグナムだ！！」

「いいぜ、気に入った！そういう女は嫌いじゃないぜ！！」

ほぼ同時に駆け出す二人。シグナムの剣は炎を纏い、ダンテの刀は変化した蒼い魔力を纏う。

そして、己のプライドを賭けた”刃”がぶつかり合い、激しい火花を散らす。両者一步も退く事無く、その場で押し切る態勢を取る。

「ハハッ……本当に女なのかい！？」

「自分でも良く分からなくてな……ハッ！」

力負けたのはダンテ。と言うよりも、あえて押し切らせた。至近距離での押し合いになった場合、相手は剣一筋の最強の剣士の名を冠する騎士。まともにやりあって、今の彼には到底勝率は無い。

だからこそ押し切らせ、ほんの一瞬でもバランスを崩した所を狙うつもりだった。

しかしそううまく事は運ばない。振り切った剣を、シグナムは恐ろしい速さで振り戻しダンテの首筋を狙う。

「おおっ——つと！ハハッ、危なかったぜ」

「馬鹿な……アレを避けるとは大した物だ。噂に間違いは無かった様だな！」

「だが。飛び道具つてのはお互い持ってない。そうだろう？」

「迂闊だな……その甘さを教えてやろう！」
「What？」

何を思ったのかシグナムはレヴァンティンを鞘に納め、一度静止する。しかし意図が分からないダンテは、ほんの一瞬だけ油断を生じさせる。

その一瞬を、彼女は見逃さなかった。

「飛竜——閃ッ！——」

「なッ——！！？」

抜刀から放たれた技。それは彼女のレヴァンティンの形状が変化したもう一つの姿《シュランゲフォルム》であり、鞭状の連結刃に彼女自身の魔力を乗せる事でミドルレンジでの一撃必殺を可能とする技。

ダンテは一瞬驚き目を丸くするが、すぐに闇魔刀を真っ直ぐに構える。そして蒼き魔力を刀身全体に帯びさせ、襲い来る敵を迎え撃

っ。

「行くぜ！土壇場一発勝負だ！！」

『OK . " d i m e n s i o n s l a s h " 』

ダンテはシグナム同様、一度抜刀の状態に戻ってから再び闇魔刀を横一文字に振り払う。

その瞬間。刀身を纏っていた蒼の魔力が巨大化し、魔力刃を前方へ飛ばす。そして迫っていたシグナムのレヴァンティンと激突。打ち勝ったのは蒼の魔力刃であり、レヴァンティンの連結刃は弾き返される。

「なッ——！！？」

「ちいっ！やっぱり本物とは程遠いな……！」

『すみませんマスター。』

「仕方が無いさ。あれは”魔具”なんだ」

『何の話ですか？』

「いや、気にするなよ。まだ来るぜ……！」

闇魔刀と喋っていたのも束の間。視線を戻せば、シグナムが剣を振りかぶり目前まで迫っている。

無意識で刀を前に戻し、再び激しい火花を散らせる。だがそれは一瞬で、今度は押し合いには持っていない。

信じられないという表情で、シグナムはダンテに問う。

「私の飛竜一閃を弾くとは……それが悪魔を相手にしてきた力だと言うのか？」

「ハハッ、馬鹿言え。デバイスで本気が出せるかよ」

「貴様……ッ！いいだろう、一撃で仕留めて貴様の恥を晒させてやる！」

「おいおい、怒らせるつもりは無かったんだぜ？」

「黙れ！」

怒りを宿す瞳はダンテを睨みつける。同時に剣は灼熱の炎を帯びて、全てを燃やし尽くせとそれを滾らせる。今のシグナムの目に映るのは、この状況でも余裕そうにこちらを見据えているダンテだけだった。

「その身を持って味わわせてやろう！レヴァンティン、カートリッジロード！」

「ったく……！本気^{マジ}で怒っちまうとはな！」

一瞬で間合いを詰める。再び衝突する蒼と紅。灼熱と蒼炎は互いに譲る事無く、そのまま最後の押し合いへと展開する。

「ハアアアアアッ……！！！」

「おおおおおおっ……！！！」

…

舞い上がり、視界を悪くしていた砂煙が徐々に晴れていく。

その中心には二つの人影。片方は地に倒れ伏し、もう片方は棒状の物を杖代わりにして立っていた。

「ぐ、うッ……私、が……」

「良く頑張った方だと思っぜ？」

「ちっ……貴様は一体……」

「後々色々聞くことになるだろうよ。ホラ」

「っ……フン、いらん」

戦いの果てに勝利を納めたのはダンテ。シグナムはあちこち痛む体をゆっくりと起き上がらせ、差し伸べていたダンテの手を握る事無く立ち上がる。その様子を見て彼は呆れた様に肩を竦ませながらも、どこか楽しそうな表情を浮かべていた。

よろよろとおぼつかない足取りで出口に向かって歩いていくシグナム。その様子を後ろから見ながら、小さく溜め息。そしてすぐに歩き出し、彼女の後ろに来て。

「なッ——何を、する!？」

「さっきの謝罪って事で許してくれよ。やっぱし軽いもんだな」

「ばッ——!は、離せ馬鹿者!」

「おいおい、そんなに暴れるなよ。あちこち痛いんだったら大人しくしてな」

唐突にシグナムの肩と足に手を掛けたかと思えば、そのままお姫様抱っこ状態に。シグナムはみるみる内に顔が赤くなり、必死に降りようと動く。しかしダンテにとってそれは、小さな子供がはしゃいでいるのと同じ様な物。手を離す事無く、そのまま訓練場から出て行った……

…

「フウ……外出なんて久しぶりだね」

「うん。まあ、小休憩みたいなものだけど」

並んで歩く二人に、周囲の視線が集まる。管理局のエースとして名高い高町なのはと、執務官でありながらなのにも劣らぬ実力を持つフェイト・T・ハラオウン。そして二人とも美貌の持ち主であ

るため、男性は立ち止まって魅入る者も少なくない。

しかし前方不注意と言う訳では無かったのだが、二人は見知らぬ人とぶつかってしまふ。

「いたっ！……あつ、す、すみません」

「いや、気にする事は無いよ。こちらの不注意でもあった」

「あれ？貴方は……」

「？私の顔に何かついてるかな？」

「い、いえ！（どこかで、見た事あるハズなんだけど……）」

「もう、よろしいかな？」

「あつ、はい。すみませんでした」

「気にしないでくれ。これもきつと何かの縁さ」

「は、はあ……」

ぶつかった相手はダンテには及ばないが高身長。典型的な紳士という感じの口調で、服装も洋風。眼鏡を掛けており、右手には杖状の”何か”を握っていた。

その男性はすぐに去ってしまったが、二人はそこで数秒間の間立ち止まっていた。

「……って、もう行かなきゃ！どうしたんだろ私達？」

「あの人……どっかで見た事ない？」

「えっ？そうかなあ……私は無いと思うけど」

「じゃあ、考えすぎなのかな」

「そうだよ。悪魔の事で疲れてるんだよ、きつと」

「……うん。そうだよね」

小さく微笑み、先程まで怪訝な表情をしていたフェイトは歩き出す。なのも横に並び、再び六課の方角へと歩いていく。

「『白い悪魔』と『金色の閃光』か……まったく、噂通りだよ」
『そう……で、どうするの?』

「無論。次は”彼”に会いに行く……つもりだったが、時間がもつたない。荒々しくなるが、その方が彼も出てきやすいだろう」
『……余り無茶はしちゃ駄目。彼を殺すなんてもつての他だよ?』

物陰で独り言の様に呟く先程の男の姿。帽子に隠れて顔全体は見えないが、かろうじて見えていた口元は吊り上がっていた。

「分かっているさ。と言うよりも、私では些か彼を殺す事は難しい。何せ『胸を大剣で貫通させても死なない』んだ」
『だったら”ソレ”で斬る、とか言わないでね?』
「ハハ、それは分からないよ。ただ、面白いものだ」

そこで男は一旦会話を止める。
そして狂った様に笑い出し、ひとしきり笑い終えた後に静かに呟いた。

「一度ならず二度までも……そしてこれで三度目だ。彼は……スパ
ーダの息子は、自らの兄の”形見”を見てどう思うのだろうね？」
「……運命、ってヤツだよ。それじゃ、くれぐれも無茶はしないよ
うにね？」ハルバート」
「ああ、分かっているよ……」レイシー」

そこで通信は切れ、男はゆっくりとその場を去る。

そこには無数に切り刻まれた人間の山。
傍には、死体の数程の破壊されたデバイスが散乱していた……

Mission・6 《運命》（後書き）

一週間の時を経て、男は行動を開始する。

闇を切り裂き喰らい尽くす魔剣と、反逆の名を冠する大剣。

その因果は、三度目の邂逅を呼ぶ。

InterMission・〈登場人物紹介〉（前書き）

皆さんこんにちは。こんばんわ。おはようございます。
VerGilです。

約二ヶ月間の未更新もありましたが、何とか25000文字を突破する事ができました。

これも優しく見守って下さった皆さんのおかげです。
ありがとうございます。

今回は作者のネタ切（ry では無く、休憩と言っような感じで『登場人物紹介』にしました。
オリ設定もあり、苦手な方もおられると思いますが、何卒よろしく願います。

Inter Mission・〈登場人物紹介〉

●登場人物紹介●

注意！この紹介は作者のオリジナル設定も大いに含まれています。
『こんなのダンテじゃねー！』とか『チート乙www』な方は回れ
右でお願いします。

【ダンテ】

所属：機動六課

立場：民間協力者

武器：『反逆の名を冠する大剣』と『白と黒の二丁拳銃』

デバイス：インテリジェントデバイス《闇魔刀》

今作主人公。銀髪碧眼、真紅のコートと背負う大剣がシンボルマ
ーク。ミッドチルダの片隅で悪魔退治専門の便利屋《Devil
May Cry》を営んでいたが、機動六課の協力要請により民間
協力者という立場で六課に編入する。

その実力は他の追隨を許さず、Aランク魔導師ですら苦戦を強
いられる悪魔を群れごと殲滅する程の力を持つ。実は彼自身も『悪
魔と人間のハーフ』であり、内包する魔力と人間離れした身体能力
も悪魔の力による物。

ある因縁から悪魔を狩り続けている。

ちなみに本作では【2】か【4】が最年長で最強に近いと言われ

てますが、オリ設定含めムン様倒した後が一番勢い乗ってるかなと思いいシリーズ最強設定になってます。技とかも4とか2から引用し……おっと誰か来た様だ。

【高町なのは】

所属：機動六課

階級：一等空尉

デバイス：インテリジェントデバイス《レイジング・ハート》

ヒロインその1。言わずも知れた管理局のエースオブエース。19歳でありながら『管理局の白い魔王』の名を冠し、空戦S+ランクを誇る。

ダンテまではいかないが、それでも低級悪魔なら圧倒する力を持つ。飲み込みも非常に早いため、既にコツを掴んでいる様。ダンテには『悪魔狩りの方が向いてるんじゃないか？』と言われる程。

はやての指令を第一に動いているが、サブミッションとしてある人物の搜索も行っている。

正直絡み難いです。何ていうか、魔王ってそもそもムン様と被るんですよね。ごめんねなのは。でも（一応）ヒロインですので、今後の展開にご期待下さい。

【フェイト・T・ハラオウン】

所属：機動六課

役職：執務官

デバイス：インテリジェントデバイス《バルディッシュ・アサルト》

ヒロインその2。執務官であり、なのとは同じく空戦S+ランクのエリート魔導師。実力もなのはに負けず劣らずであり、親友兼良きライバルでもある。

近距離・中距離戦を得意とするが、広範囲攻撃も使用可能。これまたなのとは同じく低級悪魔なら簡単に倒すことができるが、やはり少々手間取る事もある。しかしダンテからの評価は高い。

マイペース過ぎるダンテの行動に一番頭を抱えている人物でもある。

恐らくメインヒロインになる可能性高し。ダンテと同じってわけでは無いのですが、『人間の格好をしていながら人間でない』という所が何かこう……やり易い？です。

【八神はやて】

所属：機動六課

階級：二等陸佐

デバイス：アームドデバイス《シュベルトクロイツ》・ストレージデバイス《夜天の書》

ヒロインその3。柔らかな関西弁を喋る少女。なのは・フェイトと同じく19歳だが、階級は三人の中でも一番上の二等陸佐である。また自身も《夜天の王》と呼ばれる特異な存在であり、古代ベルカ式総合魔力SSランク保持者でもある。

機動六課の部隊長を務め、守護騎士と呼ばれる四人の騎士達の主広範囲攻撃系を得意とするが、近距離が苦手。しかしヴォルケンリッターの面々がそれをカバーするため、何時でも全力を発揮できる。

JS事件が落ち着かない内に現れた悪魔に頭を抱えている。

自分的にははやても絡みやすい存在です。某魔王様とは違い、会

話も綺麗に進める事ができるため非常に助かります。ただ、メインヒロインとなると他作品と被る可能性があるのです……。

ダンテ：『最強の悪魔狩人』

なのは：『管理局の白い魔王』

フェイト：『金色の閃光』

はやて：『夜天の王』

「Let's rock baby!!」

InterMission・〈登場人物紹介〉（後書き）

はい。どうでしたか？

今回は主役&p;ヒロイン三人の紹介となりましたが、今後
も時間があれば追加版や他のキャラクター版も載せたいと思っ
ています。知識不足はわきまえています！w

今回は小休憩という感じになりました。

次回からは再び本編を進めます。

皆さん、今後ともよろしく願います！

Vergil

M i s s i o n ・ 7 〈閻魔刀〉（前書き）

動き出す影は男を見つめる。

その狩人は己の持つ大剣と兄の持つて”いた”刀の因果を知らず。

魔具同士は互いに惹かれ合い、運命は彼らを邂逅させる……。

Mission・7 〈閻魔刀〉

「殺された？」

「はい。それも……大分ひどいやり方だったみたいです」
「なるほどな……」

珍しく神妙な表情をするダンテ。フェイトは肩を落とし、はやてはずっと目を瞑ったまま。場の空気は言わずもがな。普段のダンテでもそう易々と入ってこられる状況では無かった。

「殺されたのは管理局の魔導師26人。全身を鋭い刃物で切り裂かれて、所謂『バラバラ』の状態だったらしいです」

「バラバラ、ねえ……随分物騒だな。だが……」

「はい。悪魔とは違う様です。まだ調べている途中ですけど、目撃者もいなくて」

「だろうな。いくら悪魔相手だろうが20人いりゃそれなりに時間ぐらいいは稼げるはずさ。それに……」

「……私達も、現場のすぐ近くにいましたから。出勤要請が出れば一分も掛からない場所にです」

「って事は、だ」

そこではやてが目を開き、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「26人相手に、援護を呼ぶ時間すら与えず殺したって事や。それも一人残らず、綺麗にバラバラにな」

「何とも物騒だ。辻斬りにしちゃ時代遅れにも程があるしな」

「今管理局もやつきになつて捜査しとるけど……未だ手掛かりはゼロ。目撃者すら見つかってないんやから、当然かも知れへんな」

「何はともあれ、気をつけろつて事だ。じゃあな」

「あつ——待つて下さいダンテさん！」

部屋をそそくさと出て行つたダンテを追い、フェイトもばたばたと走っていく。はやてはその光景を見たあとに、書類に視線を落とす。

「ハア……なんでこう、問題ばつが出てくるんやろな……」

大きな溜め息は、部屋の壁に吸い込まれていった……

…

「ダンテさん……一つ、聞きたいことあるんですけど……いいですか？」

「Hey・そんなに改まってどうした？ 聞きにくい事なのかい？」

「あ、はい……その、ダンテさんの……」

「もじもじしてちゃ、恥ずかしいぜ？」

「ふえっ！？ あっ、その！ えっと……」

「思い出話ってヤツか？」

「ッ……はい。まだ、ダンテさんの事なんてあんまり知らないし……」

……」

廊下をゆっくり歩きながら、フェイトは上目遣いでダンテを見る。しかし彼の目はどこか遠くを見つめている様で、悲しさが織り交じった瞳だった。

「……俺が使ってる大剣は知ってるよな？」

「は、はい。確か、”反逆”の名を持つ大剣でしたっけ？」

「ああ。あれは俺の、親父の形見だ」

「形見、ですか……すみません、何か変な事聞いちゃって」

「いいさ。ちなみに親父が悪魔だ」

「ええっ！ そうなんですか……」

フェイトは目を丸くし、ダンテの話に聞き入っている。

ダンテはゆっくりとした動きで背負っていた大剣を抜き、軽く横に振る。巨大な刀身からは大きな風圧が起こり、フェイトの髪を軽く靡かせた。

「こいつの名前は《リベリオン》。その名の通り”反逆”の二つ名を持つ、悪魔を滅する大剣だ」

「でも、見た目は普通の剣ですよ……すごく大きいですけど」

「見た目だけな。見てたら分かるだろ？ 悪魔をあんだけ叩つ切ったり突き刺したりなんて、普通の剣じゃできやしない。ましてや量産物とかなら特にな」

そう言つて、再び大剣を背負リベリオンいなおす。カチンツ という納刀の音は聞こえるのだが、もちろん剣を掛ける物など何も持つてはいない。

「それ……どうやって背負ってるんですか？」

「ああ、これか？ 何て言えばいいんだろうな……」

フェイトに質問されて、返答に困つたのか一度立ち止まる。数秒間の沈黙の後、彼の口から出た言葉は。

「分かんねえ、な」

「……え？」

「いや、何でか分かんねえけど背負えるんだよ。不思議だよな、ハッ」

「そ、そうですか……その拳銃も、お父さんの物だったんですか？」
「これか？ コイツは俺が作ったんだぜ」

得意気に拳銃をくるくると回し、フェイトはそれに魅入る。デバイスで言えばティアナも拳銃型のクロスミラージュを使用しているが、本物の質量兵器をこんなに近くで見えるようになったのはダントに会ってから。興味の対象になるのは仕方の無い事だ。

「おっと……待ってくれてたみたいだな。話の続きは今度でいいかい？」

「はい。わざわざ話して頂いて、ありがとうございました」

「礼なんざいらねーよ。それより……お嬢ちゃん達、待たせたみたいだな」

「いえ、そんな事はありません」

「は、はい！ 全然だ、大丈夫です！」

「スバルさん……噛み過ぎです」

二人の前に立っていたのは四人の子供達。

「自己紹介はこの前したが……覚えてくれてるかい？」

「もちろんです。改めまして、ティアナ・ランスター二等陸士です。よろしく願います」

「あつ、はい！ 同じくスバル・ナカジマです！ スバルって呼んで下さい！」

「エリオ・モンディアルです！ よろしく願います！」

「あ、えつと……キャロ・ル・ルシエ、ですっ！ 未熟ですけど、よろしく願います！」

「ハハッ、元気がいいじゃねえか。改めて……ダンテだ。よろしくな」

「……はいつ……」

若き精鋭四人の自己紹介が済むと、フェイトは小さく微笑みながら話す。

「今度から訓練にも参加してもらおうと思ってるの。皆、色々聞きたい事があったら遠慮無く聞いてね」

「おいおい、それは俺の台詞だぜ」

「いいじゃないですか。どうせ、ダンテさんも同じ事言おうと思ってるんじゃないですか？」

「ったく、女の勘ってのはどうしてこう鋭いモンなのかねえ」

悪戯っぽく笑みを溢すフェイトに、ダンテは肩を竦めて苦笑を浮かべる。しかし、そんな楽しい雰囲気の中で一人浮いた存在があった。

「ダンテさん、一つ聞いてもいいですか？」

「おっ、えっと……ティアラだっけ？」

「ティアナです……！」

「ああ、悪い悪い。で、何だい？」

ティアナは思い切った様にダンテに話し掛け、彼が話を聞いてくれるという事を確認すると、一度大きく深呼吸。その後にくつくりと、その”質問”を投げ掛けた。

「シグナム副隊長に、模擬戦で勝ったというのは本当ですか？」

「ちょ、ティアナ何を聞いて……！」

「そ、そうだよティア！ そんなの噂話だし、直接本人に聞かなくても……！」

「ああ、勝ったよ。ま、勝ったとかどうでもいいんだけどな」

彼の口から何気なく放たれた言葉に、フェイトを含むその場のダンテ以外の人間が固まる。質問したティアナでさえ目を丸くして、開いた口が塞がらない。

しかしすぐに我を取り戻し、何かを決意した様な視線をダンテに向ける。

「だったら……ダンテさんに一つ、お願いがあります」

「何だ？ デートだったら……あと二年後ならいいけどな」

「違います！」

「Huh・そんなに怒らなくてもいいじゃねえか。で、何なんだ」

ティアナは最後にスバルとアイコンタクトを交わし、ダンテにこう言っただけだ。

「今度……私達二人と、模擬戦をして欲しいんです。もちろん、本気で」

「……What？」

「正直私は、まだダンテさんの実力を信用しきれません。私の悪い癖です、けど……やっぱり、自分で試した方が一番納得行くでしょう？」

「……なるほどね。本当に”本気”でいいのかい？」

「本気じゃなくては意味が無いです。私は力だけを信じるワケじゃない、だけど。自分達の力がどこまで通用するかは知りたくてたま

りません。だからこそ……ダンテさんをお願いするんです。なのはさんは優しいです。でも、恐らく本気でやってくれません。お願いします、ダンテさん」

「おっ、お願いします!!」

ティアナはどこか自信に満ちた笑みを浮かべる。スバルもティアナと一緒に頭を下げる。

正直ダンテからすれば困ったものだ。子供相手に本気で戦えと言われても、さすがに躊躇してしまう。悪魔ならばまだしも、将来有望な魔導師二人を相手に本気では戦えない。かと言って、ここまで頭を下げられたら断り辛いのも確かだ。

少しの間悩んでいたダンテだったが、小さく笑みを浮かべて二人にこう言った。

「いいぜ。ただし、本気は本気だが徹底的まではしない。簡単に言えば、本気を出して最速で終わらせる。それならいいだろう?」

「はい。ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

「ちょ、ダンテさん! 何勝手に約束して……!」

「いいじゃねえか。別に殺し合いするってワケじゃないんだしよ?」

「それでも——!」

そのフェイトの言葉を遮る様にして、突然けたたましいアラートが鳴り響く。

「このアラートって……！」

「一級警戒態勢！？」

「どうやら厄介なのが来たらしいな、ハヤテ？」

【鋭いな、ダンテさん。数は全然おらんけど……今回はまずいで既に先に出撃した先遣部隊が全滅しとる】

「ぜ、全滅！？」

【とにかく！ 現場には大至急、スターズとライトニング全員を出動させる！ 分かった！？】

「了解！！！！！！」

その場でモニターに向かって敬礼する五人。ダンテはそんな様子を見ながら、久々の大物の予感に冷たい笑みを浮かべていた……

…

「おい！ 聞いてんのかコラー！！」

「口の悪いお嬢ちゃんだな」

「子供扱いすんじゃないねえ！！ あたしの名前はヴィータだったつたろっが！！」

「あーあー分かった。で、どうすんだ？」

「ちっ、だからだな……」

燃え盛る森の前に、六課の面々はそれぞれ作戦を練っていた。一人自由行動を行うダンテを除いて、だが。無論スターズ副隊長のヴィータの怒声も、彼にとってはノイズでしかない。

「敵は一匹だが……とんでもない奴だ。下手すりゃ死ぬ可能性がある」

「とんでもないって……？」

「悪魔は悪魔でもレベルが違っんだよ、今までとはな。あたしもあんなのは初めてだ」

スターズの見据える先には、異形の怪物がいた。

見た目は蜘蛛。圧倒的な大きさを誇り、全長は10mをゆうに超えている。口からは灼熱の炎を吐き、太いながら鋭く尖った尻尾は大木をも薙ぎ払う。森は小さいながらも恐ろしい勢いで燃えていた。

しかしそんな風景を、一人真剣な目で見つめる男がいる。ダンテはその悪魔を見据え、彼には珍しく納得できない様な表情を浮かべていた。

「ど、どうかしたんですか？」

「あの野郎、何でここに……」

「あの悪魔、知ってるんですか!？」

「知ってるも何も、俺はあいつを一回殺してる。この目で確かに見たぜ」

「ええっ!？　じゃあ何でここに……!」

「それは俺にも分かんねえ。とにかく、だ。あいつはお嬢ちゃんが

言うように今までの奴らとは格が違う。変に動けば……死ぬのは確実だぜ」

ダンテの真剣な言葉に、全員が息を呑む。あそこまで悪魔狩りを楽しんでいる様に見えていたこの男でさえ、ここまで真剣になるのだ。

「だから、お前らは今回は動くな」

「「ええっ!?!」」

「死にたいのか? 言っとくがバリアジャケットなんてもんじゃ防げるレベルじゃないぜ。だからこそ、俺も今回は”コイツ等”を使うんだ」

『マスター。私はお役御免ですか?』

「今回は、な。ま、落ち込むなよ?」

『分かりました。何時でも行ける様スタンバイはしておきます』

「ああ、頼むぜ」

彼のデバイスである闇魔刀も待機状態に戻り、改めてダンテは敵を見据える。なりふり構わず炎をぶちまけている悪魔の勢いは弱まっていない。

「ダ、ダンテさん! 一人じゃさすがに……!」

「そうですよ! 私達も空から援護します!」

隊長である二人が、必死にダンテを説得しようとする。が……

「いや、二人はスバル達の面倒を見とけ。周りにもまだ悪魔はいるんだ」

「けど……！」

「じゃあハッキリ言ってやるよ。今はまだ……『足手まとい』なんだ」

「うっ……」

「悪いな。気持ちだけ、受け取っとくよ……！　じゃあな！」

なのはとフェイトの説得も虚しく、ダンテはその悪魔目掛けて走っていく。なのはとフェイトは空へと上がり、交戦を開始していたスターズとライトニングの援護に回った……

…

そこはまさしく、地獄絵図という言葉にふさわしい光景だった。

魔導師たちは地に倒れ、森は灼熱の炎で燃え盛っている。巨大な悪魔は地を這いまわり、生きている獲物を探している。鉄ですら速攻で溶けてしまう炎を浴び、断末魔を上げながら蒸発していく人間の姿もあった。

「よう。随分と……派手にやってるじゃねえか？」

「誰だ！？」

「おいおい。感動の再会、ってわけじゃねえが……挨拶代わりに口から炎をかまされるとは思わなかったぜ」

「貴様は……！！」

「久しぶりだな……《ファントム》！」

「ダンテエエエエエエエ！！！！」

その悪魔《ファントム》は、ダンテの姿を確認した瞬間に燃え盛る炎を彼目掛けて放出する。ダンテはもちろん意図も簡単によけるが、呆れた様にして肩を竦める。

「相変わらず単細胞で、頭も筋肉でできてるらしいな」

「黙れ虫ケラが！ 今日こそ貴様の体をミンチにしてやるわ！」

「ミンチ、ねえ……100歩譲ってミンチになってやるのを考えたとしても、まず先に聞いておく事がある」

そう言っただンテは勢い良くリベリオンを引き抜き、片手で構えを取った状態でファントムに質問を投げかけた。

「何でデメエがここにいる？ 自分から槍に刺さって死んでったのは俺も見ただが、塵に還ったんじゃないのかい？」

「グハハハハ！ 我が肉体は滅びぬ！ 主がいる限り何度でも蘇る！」

「主……？ 生憎ソイツは封印したハズだ」

「封印されていたとしても、それ程は造作も無い！ 我が主の力は貴様が一番知っているだろう？」

「まあ、な。神と同等の力を持つ悪魔なんて、悪魔じゃねえだろうって話さ」

やれやれといった表情で溜め息をつく。

「それより。ごたくはもういい、さつさと来いよ？」

余裕気に呟くダンテの目前には、既にファントムの鋭利な尾が迫っていた。

しかし次の瞬間、大木の幹程の太さはあるうその尻尾が真つ二つになる。呆然とするファントムの目に映ったのは、剣を振り終わった態勢のダンテ。鋭い碧眼はファントムを睨みつけ、ニヒルな笑みは相手にとって恐怖すら感じさせる。

たった一瞬で、彼は上級悪魔であるファントムの強靱な尻尾を切り裂いたのである。

「バ、バカな……！ たった一撃で……！」

「随分と柔らかいな。見た目とは違うってレベルじゃねーぜ」

当然そんな事はない。悪魔達の跋扈する、人界とはまた別の世界に位置する異形の地《魔界》。その弱肉強食の世界で上級悪魔にま

で成長したファントムの骨格は、生半可な攻撃では掠り傷一つつける事ができない。その証拠に、一年前のダンテでは剣を振るっても弾き返されるばかりだった。

しかし、今の彼は昔とは違う。自らの因縁を断ち、最強の悪魔狩人の称号を冠するダンテにとって、一年前から変わらないファントムの骨格など取るに足りなかった。

「貴様ツ……！ 何故それ程の力を操る事ができるのだ！？ 純粋な悪魔では無いのに、中途半端な存在である貴様が何故！」

「そんなもんは簡単さ。」英雄”を思い出してみる」

「英雄……あの忌まわしき裏切り者スパードの事か！」

「ああ。悪魔にあつて親父に無かった物。それがこの力の差なんだよ」

苦しそくに呻きながらも、ダンテを睨み続けるファントム。しかしダンテは口元は笑っているながらも、真剣さを宿した碧眼を相手に向ける。

英雄にあつて魔帝に無かった物。ダンテにあつて他の悪魔に無かった物。それはまったく同じものであった。

「それが”正義の心”だ。親父がそれに目覚めたから、今の俺がここにいる」

「正義の心、だと！？ 甘い事をほざくな！ 強き者が弱き者の上に立つ、これは必然的な事だ！」

「それだからテメエらは何時まで経ってもクズのままだよ」

「黙れ！ 貴様の様な綺麗事をほざく虫ケラなど消し炭にしてくれる！」

「おう、やってみろよ。その『弱い者いじめ』しかした事のない軟弱な炎でな」

激怒したファントムの口から放たれる球状になったマグマ。それは一直線にダンテに向かっていく。

しかしそれが彼に直撃する事は無く。リベリオンの一閃で熱球は叩き割れ、視界が遮られた一瞬にダンテは空高く跳躍する。

ファントムが目で追うのも追いつかず、最後にその目に映ったのはリベリオンを大きく振りかぶるダンテの姿だった。

「BINGO!!」

「グオオオオオオオオオ——！！！！」

「物理的なほうなら、頭は固くないらしいな」

「き、貴様アツ……！ 裏切り者の、血族めが……ッ——！」

「何と罵ろうが好きにしな。ただ、ここじゃ耳障り（ノイズ）だ」

豪快にファントムの頭部に突き刺したりベリオンを抜き、付着していた血を払い落とす。そして振り返る事無く、静かに言い放った。

「独り言なら地獄でしろよ」

彼と対峙した悪魔はことごとく塵へと還る。それはファントムにとっても例外では無く、最後はもがいてダンテを前足で薙ぎ払おうとするも、その前に塵となって風に吹かれていった。

「主、ねえ……嫌な予感しかしないな」

「ダンテさん！ 大丈夫ですか！？」

「おっ、ナノハ。こっちはもう終わった、そっちはどうなんだ？」

「数はそんなにいなかったたので、もう殆ど大丈夫です。炎も何故か消えちゃって……」

「そうか。じゃあ、俺もそっちに……」

「どこに行くつもりかな？」

くるりと踵を返し、後方に歩き出した時だった。

不意に声を掛けられた。ただそれだけなのだが、ダンテは素早くターンして『リベリオンの柄を握った』。それが何を意味するかをなのはも理解し、すぐさまレイジング・ハートを握り締める。

二人の視線の先にいた人物。それは場所は違うが、なのはもダンテも見た事のある人間だった。

「あなたは……あの時の！」

「やあ、高町なのはは一等空尉。先日は失礼したよ」

「何で、ここに……！？」

「おいおい、最後の最後でお前が出てくるとはな。何だ、このパーティーは随分派手じゃねえか」

「最初に出て行っても良かったんだが、あの大蜘蛛がどこまで君に

通用するか知りたくてね。少し見物させてもらっただよ」

そこにいたのは、なのはとフェイトが街で偶然ぶつかった男だった。服装は変わらないが、何故か異様な雰囲気醸し出している。更に、彼とダンテは少なからず知り合いの様だ。

「久しぶりじゃねえか……ハルバート！」

「こんばんは、かな？……ダンテ！」

ダンテは相手が人間でありながら、リベリオンは抜かずとも自前の拳銃をハルバートと呼ばれる男に向ける。
エボニー・アイボリー

「どうしてここにいる？ わざわざ自分から捕まりに来ましたって

ワケでも無いだろうしな」

「それは当然。君に無性に会いたくなってる。ついつい来てしまっただけだ」

「それは嬉しい限りだね。だが生憎、俺はそっち系の趣味は持ち合わせちゃあいない。とつとと帰れ……ってワケにはもちろんいかねえが、さっさと投降しな」

「それはできない。レイシーとも約束しているしね」

「レイシー……って、あの写真の！」

「知っているのかい？ 高町君」

レイシー。その名前を思い出し、なのはは目を丸くする。その人物はフェイト・ユーノ・はやてと自分を含めた四人で搜索していた

犯罪者だからだ。

実際に人を殺したという事件は無いが、あのジェイル・スカリエツィに手を貸していた人物でもあり、今回の悪魔関連の事件も何らかの理由で絡んでいる可能性が高かった。

そんな危険人物の名を易々と出し、いかにも関係を持っていると言わんばかりのハルバートを見つめるなのは。しかしその視線の質問に答えたのは、ハルバートでは無くダンテだった。

「奴の名は【デューク・ハルバート】。レイシーの手下その1つてところか？ どうなんだ？」

「その肩書きはひどいな。右腕とかならまだしも、だ」

「でもそれって……犯罪者の一味って事じゃないですか！」

「そうさ。俺がずっと探してた男だ……！」

「犯罪者という扱いは無いだろう。確かに”これ”を獲得するのは大分犠牲を払ってしまったが……仕方の無い事だ」

「それは……？」

ハルバートが二人に見せる様にして掲げたのは一振りの日本刀らしき物。しかし従来の日本刀よりは若干刀身が長く、柄が白で鞘が黒という斬新なデザインだった。だがその色合い・デザインは、なのはも見た事のある物でありダンテも記憶に十分残っている。

そのデザインはダンテの持つデバイス《閻魔刀》と瓜二つであった。長さも、色も。鍔と鞘の間から覗かせる刀身の冷たい輝きも。

しかしその刀を見た時、ダンテは今までに見た事の無い、驚愕の表情を見せた。

「この刀かね？ 随分と苦勞したよ、手に入れるために」

「ダンテさんのデバイスとそっくり……！ それはデバイスなんですか！？」

「デバイス？ そんなわけが無い。この刀の名は……」

満足気に刀を嘗め回すように見ながら、ハルバートは呟くようにして言った。

「この刀の名は『閻魔刀』。

ダンテの持つ反逆の大剣と対を成す、英雄スパイダが使っていた魔剣だよ」

静かに鞘から抜き放たれた刀は、その狭い刀身にダンテの怒りを反射していた……

Mission・7 〈閻魔刀〉（後書き）

異質の男【デューク・ハルバート】が持つ魔剣《閻魔刀》。
しかしダンテはその刀の本当の持ち主を知っていた。

何故彼が閻魔刀を持っているのか？

何故彼がここに現れたのか？

分からないが故に、狩人はその怒りを爆発させる……

Mission・8 〈鉄槌の騎士〉

「その悪魔狩人が持つ反逆の大剣《リベリオン》と対を成す魔剣《閻魔刀》だよ」

「閻魔刀……？」

なのはは無意識の内にその言葉を復唱していた。

ハルバートはその魔剣《閻魔刀》を鞘から抜き、軽く横に振り払う。ヒュンツと風を切る音が二人の耳に入る。

「質量兵器……！ それを今すぐそこに置いて下さい！」

「質量兵器？ そんな生温い表現はこの刀に失礼だよ。君には分かるだろう？」

なのはの忠告を無視し、ダンテに視線を移し変えた瞬間。

ダンテが持っていた拳銃^{エボニ}から、弾丸が撃ち放たれる。何の予備動作も無く、構えていた拳銃の引き金をそのまま引いたのだ。

弾はハルバートの側頭部を掠っていた。

「何でデメエがそれを持つてる……？」

引き金を引いたダンテは、味方であるのはをも震え上がらせる程の怒りを露にしていた。当然なのはにはその怒りが何に対する物かは知らず、彼の横で小さく震えている。

彼が睨みつけていたのは、視線の先に立つハルバートの姿だった。

「まあ、色々とあつてね……苦労はしたよ」

「俺は自分よりお喋りな人間は大嫌いなんだよ」

銃を降ろそうとしないダンテに、呆れた様に肩を竦める。更にダンテの表情が険しくなる。

「今はまだ扱い切れないのさ。思った以上に意思が固くてね」

「そりゃ当然だ。親父の形見がテメエみてえな腐れ外道と釣り合うワケがねえ」

「言ってくれるね……。正論と言えばそれまでだが、今回はそろそろおいとまさせてもらおうとするよ」

不適な笑みを浮かべ、ハルバートは閻魔刀を鞘に納める。カチンッ という納刀音が響き渡った。

そしてその一瞬で、彼の姿は無くなっていた。超高速移動などでは無く、本当の『瞬間移動』という物である。

「しまったッ……！」

なのはが悔しげに声を上げる。しかし、ダンテは隣で小さく舌打ちしただけだった。

「チッ……仕方が無いってのは気に入らねえが……今回ばかりはどーにもならねえな」

彼女は知らない。

この時ダンテが、どれほどの感情を内に押し込んでいたのかを……

…

「【デューク・ハルバート】。三ヶ月前のJS事件に関する犯罪者だぜ」

「名前は聞いた事ある……その時はまだ重要関係者としてしか聞いてなかったけどな。まさかそこまでとは思ってへんかったわ」

「大量殺人及び質量兵器の保持、その他もろもろ……」

「逃がしちゃったのは私の責任。ダンテさんは何も悪くないよ」

「何言ってるんだ。俺が本気でやってりゃ今頃はここにいるんだが…

…ともかく、悪いのは俺さ」

そう言っただけでジントニクを一口。何とも納得行かない表情だ。

なのはもダンテと同様だった。

先日、事件で、二人は最重要人物の一人【デューク・ハルバート】を逃がした。目の前に現れ、ダンテとなのはの二人掛りにも関わらずだ。もちろん、相手の腕がダンテにも負けず劣らずという条件もあったが。それでも二対一の場合で、敵を逃がしたのは大きい。

更に相手の持っていた質量兵器《閻魔刀》と呼ばれる魔剣。ダンテはその名を聞いてから、表情が曇っている事が多い。あの時からずっとだ。

「ともかく。次は絶対逃がさねえ、本気でやるさ」

「私も……次は躊躇無く撃つよ。ね、レイジングハート？」

『はい。敵を撃つのに戸惑った私も馬鹿でした。』

「いや、私も迂闊やったわ。もっと気配つとけばよかった」

「私も……あの時援護に回ってれば。気にする事ないよ、なのはにダンテさん」

「そう言ってもらえるとこちらとしてもありがたいね」

ニヒルな笑みを見せるダンテ。普段の彼を見た三人は、少しだけ胸を撫で下ろす。彼が不調では対悪魔戦でもどうなるかわからない。ある意味今の六課の運命は、ダンテに左右されていると言っても過言では無い状態だ。実際に上級悪魔と対等に渡り合える人物がいな

いのだから仕方が無い。

勢い良くソファから立ち上がり、軽く手を振ったあとに部屋を出るダンテ。なのはとフェイトもはやてに一度視線を向け、小さく頷いたあとに部屋を後にする。

「そっついや……約束があつたっけな」

「約束、ですか？」

「ああ。昨日の件でやりそびれちゃったが、大事な約束だ」

「大事な約束……」——「つてあれですか!？」

思い出した瞬間に、思わず大声を出すフェイト。ダンテは指を耳栓代わりにし、フェイトに『うるさい』のジェスチャーを送った。同時に赤面し、フェイトは黙り込む。

「オレンジ髪のお嬢ちゃんと、青髪のお嬢ちゃん……なかなか威勢がいいね」

「それってティアナとスバル……。あの二人が何かしたんですか？」

なのはは少し不安になってきたのか、ダンテに恐る恐る聞く。しかし当の本人はまったくそんな事を気にしておらず、平然と答えた。

「模擬戦、やってくれたとよ。元気がいいのはいい事だな」

「模擬戦って……! あの二人、また勝手な事を……!」

「いいじゃねえか。別に殺し合いするワケじゃねえんだからよ?」

「ですけど！ 明らかに結果は見えてるじゃないですか！」

ここで俯いていたフェイトが口を挟む。なのはも彼女の横でうんうんと頷いていた。

しかしダンテは逆に、呆れた様に苦笑する。何がおかしいのか、その時はなのはとフェイトには検討もつかなかった。

「結果は見えてるって……そんな事あの二人の前で言ってみろ。落ち込む様子が目に見えるぜ？」

「あつ……。で、でも……！」

「大丈夫さ。どれほど実力差があるかって事を身を持って確かめさせてやるよ」

「何が大丈夫なんですか！」

満足気に親指を立てて笑みを浮かべるダンテに、フェイトは素早くつつこむ。しかしそんな彼女とは対照的に、二人の指導官であるなのはは真剣に考えていた。

実力を試したいのは分かる。どれほど自分達が強くなったのか。JS事件を通してどれだけ強くなれたのか。特にティアナの場合はじっとしているのが苦手なタイプなので、今すぐにもダンテと戦いたいとうずうずしているだろう。

だがその二人には悪いが、正直言って結果は見えている。どれほど二人が頑張ろうと、実際の戦場をくぐり抜けてきた、“命”の駆け引きを行ってきたダンテには到底勝ち目が無いのも自分が一番良

く知っている。

だが、それでも。彼女らの自由を奪いすぎる権利は自分に無い。
なのははそう思ったのだ。

「分かりました…… よろしく願います。力の差、見せ付けてや
つて下さいね？」

「ちよっ、なのは！」

「物分りが良くて助かるぜ。まあ、三分もつたらいい方だと思っぜ」

「あ、ああ…… あーもう！ 私知らないよ！？」

「うん、大丈夫。ダンテさんなら任せられるから」

ニコリと微笑むなのはに、フェイトは大きく溜め息をつく。同時
にそれは、彼女が妥協したという合図でもあった。

「んじゃ、行くとするか」

「行くって…… どこにです？」

「決まってるだろ？ お嬢ちゃん達のところにだよ」

「今からですか！？ まだあとからでも……！」

「そうだぜ。あたしが先だ」

そこに知らない声が一つ。いや、知らないというわけではない。
ダンテ以外の二人はよく知っている声なのだが、今の話題には入っ
ていなかった。そして、彼女の今言った言葉が何を意味するのかを
考えた瞬間に二人の顔は引き攣っていたのだ。

視線を声のした方向に向けると、そこにはこじんまりした少女が一人。背はダンテが六課で見てきた面々の中では一番小さく、8歳から9歳前後と言ってもおかしくないくらいだ。

「ハハッ！ こりゃああの時の可愛らしいお嬢ちゃんじゃねえか！」

「子供扱いすんなって言っただろうが！ 叩き潰すぞ！」

「口の悪さは相変わらずだな。えーっと、何て言っただけ？」

「ヴィータだ！ いい加減覚えやがれ！」

その少女の名は【ヴィータ】。ダンテとは初めて会ったというわけではないのだが（対ファントム戦で指揮官役として会話している）、面と向かってこうやって話すのはこれが初めて。

しかし身長差があまりにも激しいため、まともに視線すら合わせられない。ヴィータが苛立っているのはこれが原因の一つでもあった。

しかし話を本題に戻すため、ヴィータは真剣な目つきでダンテを睨む。

「そんなにきつく睨むなよ。可愛い目が台無しだぜ？」

「うるせー！ さっき言っただろ！」

「さっきって……何の事だ？」

人を馬鹿にする様に鼻で笑い、ヴィータを見下ろすダンテ。その瞬間、完全に彼女の正常な思考回路は働かなくなっていた。

「デメエはあたしがぶっ飛ばす！」
「ちょ、ヴィータちゃん！ここはいくらなんでもまずいって！」
「おっ、やんのかい？俺は一向に構わないぜ？」
「ダンテさんも乗らないで！」
「離せなのは！こいつは一発やってやらねえと気がすまねー！」
「だから！ここはまずいって！」

そして某守護騎士と同じく、連れて来られたのは訓練場。ヴィータは既に騎士甲冑を纏い、ダンテは呆れ顔で肩を竦めている。

「覚悟はできてんだろーな！？」
「覚悟、ねえ……。した事がねーよ、一度もな」
「だったら今しておいた方がいいぜ。三秒で後悔させてやる……！」
「なら俺は二秒で終わらせるさ」
「勝手に言ってる！行くぞアイゼン！」
「OK・やりましょう。」
「ったく……悪いな闇魔刀！」
『All right・派手にやってやりましょう。』

鉄槌の騎士ヴィータのデバイス《グラーファイゼン》は巨大なハンマーに姿を変え、使用者のダンテ同様乗り気な彼のデバイス《闇魔刀》は本来の刀状へと変形する。

端から見れば奇妙な光景だ。ハンマーを振りかぶる少女と、身の

丈の半分程の長刀を腰に携える大男。不釣合いにも程があるだろう
といったくなるのは仕方の無い事。

「アイゼン！ カートリッジロード！」

振りかぶったままのアイゼンから魔力のカートリッジの空薬莖が
排出され、その魔力を燃料代わりに噴出させて敵に叩きつける大技。

「ラケーテンハンマアアアッ！！！！！」

迫る巨大なハンマーに、一瞬顔が引き攣るダンテ。しかし次の瞬
間に、それは苦笑へと変わる。

「まじかよおいおい……！」

「おおおおおおっ！！！！！」

そして直撃の瞬間。地面は跡形も無く粉碎され、衝撃波が辺りを
襲う。全力で振り下ろした鉄槌。相手に隙を与えない早さ。全てが
完璧だった。

しかしそれは、今まで彼女が戦ってきたガジェット相手だからこ
そ言えた話だ。

少なくとも、この男には通じない。

「何ッ——!?!」

「行けるかッ!?!」

気付けば視界には、立ち上る砂煙の中から走り出すダンテの姿。腰に携えた閻魔刀の柄に手を掛けたまま、こちらに向かってきていた。

「くっ——! 間に合え!」

「疾走居合!!」

『Rapid Slash』

ダンテが閻魔刀を抜くより先に、ヴィータが防^{バスター}魔法を展開。しかし魔力刃による斬撃は激しい威力を伴い、基本でありながら高い防御力を誇る魔方阵の盾を真つ二つに裂いた。

そのまま攻撃はまずいと考え、ダンテはバックステップで距離を取る。

「てめえっ……!」

「危ない賭けだった。駆け引きつてのがやめられなくてね」

「ふっざけやがって……! まだまだ!」

「いいぜ! そういうのは嫌いじゃあない!」

ヴィータはグラーファイゼンをギガントフォルムに。それは彼女の持つ最大にして最強の一撃を放つための余興。身の丈程もあるグラーファイゼンを振り回し、更に大きさを数十倍にまで巨大化させる。

対しダンテは、静かに刀を鞘に納める。それはヴィータと同じ守護騎士の一角「シグナム」との戦闘の際に使った闇魔刀最強の技であり、全てを切り裂く一閃は烈火の将の剣をも折った。

互いに負けられない。

鉄槌の騎士として。最強の狩人として。己の誇りを賭け合った、最強対最強の勝負。

「轟天爆破！」

「You shall die」.

鉄槌と刀。

騎士と狩人。

「ギガント……シュラアークツ!!!!!!」

Dimension Slash!!!!

振り下ろされた鉄槌と、抜き放たれた刀。

砕けるのか、折られるのか。

M i s s i o n ・ 8 〈鉄槌の騎士〉（後書き）

鉄槌の騎士と悪魔狩人。

ぶつけ合った”最強”。

正義の鉄槌と断罪の一閃。

互いに退かぬ、屈さぬ戦い。

碎けるのはどちらの”誇り”か？

Mission・9 〈伝説の魔剣士〉

衝突し合う『誇り』と『誇り』。
互いに一步も退く事は無い。

徐々に亀裂が入り始める鉄槌。
それと同じく刀にもヒビが入り始める。

そして……。

「うわああっ——！」
「ちいっ——！」

相殺。

どちらの攻撃も通る事無く、反動に弾き飛ばされる。

「ぐっ、はっ……！ そんな、アイゼンが……！」
「効くじゃ、ねえか……」
「ったく。正面からやりあったのが間違いだったぜ」
「てめえ……！」

ヴィータのグラーフアイゼンは粉々に砕け、ダンテの閻魔刀も刀身部分が完全に折れている。最早このまま続ける事は、本人らがで

きてもデバイスが無理な状況。

しかしヴィータは納得行かない。コテンパンに負けたのならまだ諦められるが、相打ちと言うのは彼女からすれば歯痒いものだ。決着は着けないと気が済まないのである。

「まだだ！ 絶対納得できねー！」

「って言ってもよ、デバイス見たらどうか分かるだろ？」

「……ッ！ くっそ……！」

「お預けだ、お預け。なかなか楽しかったぜ、お嬢ちゃん」

「ヴィータだ！」

地べたに座り込みこちらを睨みつけてくるヴィータをよそに、埃だらけの服のまま、ダンテは訓練場をさっさと出て行った……

…

「あっちゃー……。これは派手にやっちゃいましたね……」

「悪いな。ちよつと不慮の事故ってヤツだ」

苦い表情で大破した闇魔刀を見つめるシャーリー。その後ろで、

ダンテは悪びれた素振りすら見せる事無く腰の拳銃を弄っている。

「話は聞きましたよ。ヴィータ副隊長のアイゼン最強の技と正面きつてやり合うなんて信じられません。向こうは威力だけで言ったら六課最強クラスなんですから」

「まあな。些か後悔はしてるよ」

「ならいいんですけど……。取り合えず、直ると思いますよ。ただ、やっぱりダンテさんも大分酷使してるみたいで……。強化しておきましようか？」

「そうしてくれると助かる。物を大事に扱う性格タイプじゃないんでね」

「見てたら分かりますよ、っと。じゃあ、あとは任せてください！」

「ああ。ヨロシク頼むぜ」

元氣一杯なシャーリーの笑みに、ダンテは普段通りニヒルな笑顔で返す。

しかしそのまま部屋を出ようとした時、唐突にシャーリーに呼び止められた。

「あつ、ちよつと待って下さい！」

「What? まだ何かあんのかい？」

「その……。突然なんですけど……」

何か言いにくい事なのだろうか。ダンテは不思議そうに首を傾げているが、シャーリーは一度咳払いをしたあとにこう言ってきた。

「ダンテさんは……《バリアジャケット》っていうのをご存知ですか？」

「バリアジャケット……？ いや、知らねえな」

「あ、だったら……。バリアジャケットっていうのは、簡単に言えばなのはさん達が戦闘になったら着用する、所謂防護服みたいな物です」

「でも、それらしい物は着てないぜ？」

「なのはさんの場合は、あのヒラヒラしたデザインの、白いのがそうです」

「ヒラヒラした白いの……ってあれか！ そうか、あれがバリアジャケットねえ……。で、それがどうかしたのかい？」

するとシャーリーは笑顔で話す。

「いや、六課の皆さんって言うか魔導師の人達は大体これ着けてますよ？　そこで、ダンテさんも要るかなあって思って。どうですか？」

目を輝かせながらダンテに問うシャーリー。彼が欲しいと言った時のために、ジャケットのデザインやシステムなどを既にいくつか考えている。彼女ならそういう事はお任せあれだ。

しかし、ダンテは少し考えただけで彼女に短く返事をした。

「いや、いらないよ」

「へ……？」

「いらないって。俺はこのままで大丈夫さ」

「で、でも！　一応着けておいた方が安全ですよ？」

「大丈夫さ。俺を誰だと思ってんだ？」

そして再び出口に向かって歩き出し、最後に一度だけ止まっ
てこ
う
言
っ
た。

「自他共に認める『最強の悪魔狩人』。そう言ったのは管理局だか
らな」

そう言ってデバイスルームを出る。シャーリーはポカンとした表
情で出口を見つめたままだった……

「暇だな……まったく持って暇だ」

デバイスルームを出て数分。ダンテは外のベンチに座りながら溜
め息を漏らしていた。予想外に暇なのだ。廊下を歩いていれば誰か
とすれ違うと思っていれば、知り合いどころか人とすら会わなかつ
た。単に偶然なのだろうが、彼にとってはちっとも面白くない。

昨日の件でデバイスは壊れるし、服は汚れるし（代わりを使っ
て
い
る。デザインは一緒）、人とは会わないし。どうしようも無く、

彼は空を眺めていた。

そんな時だ。

「あれ？ ダンテさん？」

「……おっ、ハヤテか。仕事はどうしたんだ？」

丁度そこに通りがかったのははやて。六課の制服姿だが、書類などは持ち合わせていない。どこか会議などに行くという雰囲気でも無かった。

「今から久しぶりに、外にお昼ご飯食べに行こうと思ってな。外食もたまにはええやろ？」

「なるほどね。そういやもう昼飯だな……」

「あからさまに暇そうやな、ダンテさん？」

「見たら分かるだろ？ 空や森を眺めるなんて趣味は無いがな」

ダンテがだるそうに呟くのを見て、はやては小さく笑う。

そして何か思いついたのか、ニコリと笑いながらダンテにこう言った。

「ダンテさん、今暇なんやよね？」

「ああ。さつきも言っただろ？」

「やったら……一緒に、ご飯食べに行かへんか？」

その言葉にピタリと動きを止め、ゆっくりと視線をはやてに向ける。

満面の笑みを浮かべていたはやてに、ダンテも小さな笑顔で返した……

…

「なかなか……いいデザインだな」

「やろ？　ここは私のお気に入りやで。地上本部からも近いしな」

「要するに打ち上げとかで来るんって事だろ？」

「まあ、そんな感じやな」

二人が今いるのは、地上本部の後ろに位置する居酒屋だった。

はやての昼食に付き添うという形でダンテも同行し、この店に来了。外見はなかなかお洒落なレストラン風だったのだが、中に入ると一転。ダンテも何度か行った事のある、地球上の一国《日本》の居酒屋とまったく同じであった。

しかしダンテは思いのほか乗り気。普段はバーやスナックだが、たまにはこう言う雰囲気も悪くないという事だろう。

カウンター席に座り、二人は出された水に口をつける。

「水か……金の無い時期はこれをよく飲んだよ」

「酒の飲みすぎは体に悪いで？」

「いいんだよ。俺は悪魔だしな……体の構造が普通とは違うんだよ」
「顔はすごい男前やけどな」

「まったく。モテる男ってのは忙しいね。こうやってお嬢さんの相手をしなくちゃいけない運命だしな」

隣に座っていたはやてに視線を落とし、ニヒルな笑みを見せる。
はやてもその笑みに、悪戯っぽく笑って返す。

「何でも頼んでや？ 今日私の奢りやさかい」

「助かるぜ。万年金欠の俺には、あんまり豪華なもん頼む癖は無いがな」

「の割には、ええもんばっか食つとるかしてでっかい図体しとるやん？」

「親の愛情を貰ってりゃ、子供ってのはすくすく育つもんさ。特にいい男はな」

普段かわす事の無い皮肉な会話に、二人は思わず笑ってしまう。
ダンテもここまで言い合いができる知り合いなど数える程しかないし、はやてはなのは達と会話する時はこんな言葉は使わない。この二人だからこそできる、独特の雰囲気での会話である。

ちなみに二人が注文したのはこれ。

ダンテ：

芋焼酎 鶏手羽先焼き 鶏唐揚 白飯大盛り

はやて：

鶏唐揚 刺身盛り合わせ 味噌汁 白飯並み

「日本の居酒屋つてのは面白いな。雰囲気独特だ」

「やろ？ 宴会の時とかは特に面白いで。フェイトちゃんは人が変わるし、なのはちゃん魔王……もとい、怖いママになるからな」

「なのは……子持ちなのか？」

「あれ？ 言つて無かつたつけ？ あ、もちろん産んだんとはちゃうで？」

「なるほどね。あの若さで子供つてのは驚いたぜ」

一瞬彼が普段見せる事の無いリアクションを見れた事が嬉しいのか、はやては何故か笑っている。

しかし無駄な話は無く。

その後は三分程、二人の間には沈黙が続く。

それを唐突に破ったのはダンテだった。

「話、聞いたかつたんだろ？」

「えっ……？」

「顔に出てんだよ。『どうやって切り出そうか』ってな。第一二人で来るって時点でどうかと思ってたが……ストライクみたいだな」

「……なんや、ばれてたんか」

最初は彼の言葉に、目を丸くして黙り込んでいたはやて。しかし悪戯っぽく微笑み、申し訳無さそうに頭を掻く。ダンテはその横で『やっぱりな』と言った表情をしている。

次に喋りだしたのははやて。

「迷惑、やった？」

「全然。奢ってくれるならドンと来いだ」

「何か納得できへん理由やな……。ま、ええわ」

すると一度目を瞑り、急に黙り込む。

ダンテは不思議そうに首を傾げ、彼女の言葉を待っている。

数秒間の沈黙の後、はやてはゆっくりと切り出した。

「前に言ってた……ダンテさんのお父さんの話」

「……なるほどね」

「伝説の魔剣士【スパード】……それが、ダンテさんのお父さんなんやよね？」

ダンテは口に出さず、小さな笑みで答える。

「二千年前、悪魔の侵略から人間界を救った英雄……。同胞に己の剣を向けた、正義の悪魔。ちゃんと調べたんやで？」

「まあな。親父の昔話なんてあんまり知らねえが……。譲る事の無い『最強』だったって事は知ってるよ」

その言葉を皮切りに、彼の父【スパード】に関する会話が始まった。

「お前らが調べた文献に載ってた無かったか？」

「載ってなかったか……。って何を？」

「されど魔に魅入られし人は絶えず」

その文章を聞いた時、はやての表情が驚愕に変わった。

されど魔に魅入られし人は絶えず。

彼らは魔を崇め魔の力を得んと欲し、大いなる塔を建立す。

その塔、魔の物の国と人の国とを結び、魔に魅入られし者は魔に昇らんと塔を登れり。

そはまさに悪業なり。

時同じくして、万夫不当の魔剣士スパード、善なる心に目覚め同胞に仇なし、遂には魔の物を統べる魔帝をも討ち負かせり。

しかる後、スパード、忌まわしき己が力を大いに怖れ、魔の物を封じるにあたり、己が力と剣をも封じんと欲す。

封印の鍵となりしは、かの大いなる塔の力なり。

スパード、大いなる塔の深き所に立ち、己が血と純潔なる処女の血を注ぎてこれを印とし、魔の物と己が力を封ぜり。

大いなる塔は地の底へ沈み、魔の物とその国は流るる時を止められたり。

「……聞いた事アリアリ、って顔だな」

「……その文章は、私らがスパードを調べる時に使った《魔剣文書》って呼ばれる文献の一番最初に書かれてた言葉や」

——伝説の魔剣士【スパード】。前にも言ったが、俺の実際の親父だ。

——お父さん……か。どんな人やったん？

——聞いた話さ。

親父の故郷《魔界》で、最強の悪魔と数えられる事もあった。そのあとに、魔界の帝王【ムンドウス】の右腕として、魔界統一を成し遂げた。影響力は半端無かったらしく、親父抜きじゃ統一はできなかったって言う話もあったみてえだ。

——じゃあ、何でそんな悪魔が人間の味方に？

——唐突だったんだろうよ。

魔帝の次の獲物は『人間界』だった。そのために先に親父を人間界に送り込んだのさ。だが、それが間違いだった。何があったかは俺も分からねえが、親父は『正義の心』に目覚めたらしい。ベタな話だが、本当らしいぜ。

——それで、そのまま……？

——ああ。

たった一人ってワケじゃなかったみてえだが、それでも圧倒的な数に変わりはない。数え切れない程の悪魔の軍勢を相手に、親父は戦い続けた。人間からすりゃ、理解できないだろうな。同胞を、敵のために斬り続けるなんてよ。だが、それでも戦い続けた。己の信念のために、己の大切な者を守るために。それが文献にも書いてあった『二千年前の戦争』だ。

そして遂に、親父は悪魔を率いていた頂点【ムンドウス】を封印する事に成功した。それが英雄たる所以だな。文献にはスパイダの事ばかり書かれてるが、仲間もちゃんとしたんだ。一人じゃさすがに成し遂げられなかっただろうしな。

——その後は？ どうなったん？

——そのまま人間界に居座り続けた。

大体親父が魔界に帰れるワケねえだろ？ 悪魔全員を敵に回して、易々と帰してもらえる程甘い世界じゃないぜ。まあ、本人からすりゃ人間を見守るって意味もあつたと思うがな。

——それで、ダンテさんが産まれたと？

——まあ、な。

この馬鹿げた力は親父の血だ。『伝説の魔剣士スパードの息子』なんて肩書きを勝手に作られて、今までどれ程苦労したか……。道歩いてりや悪魔に襲われ、バーでストロベリーサンデー頼んだら悪魔に襲われ、金髪のべっぴんに付いてったら悪魔の巣窟で、魔帝と戦って……散々だ。

あと一人、俺の双子がいたんだがな。イカレてるクソ野郎さ。親父の血を継いでる事もあって馬鹿げてるぐらい強かったが……昔の話さ。

そこで一旦会話は切れた。

頼んでいた品が来たからである。

もっとも、ダンテにとってはそろそろ終わりというところだったが。

「悪いな。また今度でもいいかい？」

「全然OK。参考になる話、聞かせてもらたわ」

「そついや、その文献つてのは誰が探したんだ？ お前は部隊長だからそんな時間は無いだろう？」

「本局の友人にな。そういう仕事してる人やから、丁度良かったん。【ユーノ・スクライア】、聞いた事無い？」

「名前は聞いた事あるな。でっけえ図書館の管理人だっけ？」

「大体は合つとるけど……。まあ、ええか。とりあえず食べよか」「だな。腹が減ってはなんとやら、だ」

机に並べられた料理に、二人は笑顔を見せる。もともと食事をするためにここへ来たのだ。話は六課でも十分出来る。

今は純粹に、二人は食事を楽しんだ……

Mission・9 《伝説の魔剣士》（後書き）

打ち明けられた真実は、伝説の魔剣士の存在を肯定する物。

同時にそれは悪魔を生み出す元凶【魔帝】の存在も肯定する物であつた。

【魔剣士】と【魔帝】。その因縁は、キッチリと息子にも受け継がれている。

一度は断ち切った因縁。しかしそれは、再び蘇らんと動き出す。

Mission・10 〈求めた力〉

「ふう……」

一人溜め息をつくティアナ。

スバルはいない。

今まで一人で自主訓練をしていたのだ。

もつとも『苦い思い出』があるため、やり過ぎなどはしないが。

しかし、今の彼女には少なくとも気に掛かる物があつたのだ。

「……やりすぎちゃ駄目なのは分かつてる。それに……」

脳裏に過ぎるのは、ダンテが悪魔を狩る光景。

彼女は一度、ダンテに堂々と勝負を申し込んでいる。もつともまだやってはいないが、その時は少なくとも『勝つ自信』はあつた。しかし、今のティアナの自信は揺らぎきっていた。

あれ程スマートに、自分達が数人掛りでやっと倒せるかどうかの悪魔を狩っていた。身の丈程もある大剣は、まったく我流の使い方でありながら一振りで数体の悪魔を葬る。更にダンテは、銃を使用するという面で自分と重なる所がある。その点でも、連射性・命中

率とともに確実にティアナの上を行っている。

『何とかダンテより役に立ちたい』『役立たずと思われたくない』。

それが、今のティアナを不安にさせている原因だった。

「でも……勝てつこないよ……」

「何してるんだい？」

「……！　なんで、ここにいのよ……？」

「たまたま通りかかっただけさ。たまたまな」

そして噂をすれば何とやら。

いつの間にか、ティアナの座っていたベンチの隣にはダンテがいた。彼女が考え込んでいたという事もあるが、それでも気付かれずに座るとするのは彼にしかできない事であろう。

まさか本人が横に来ると思っていなかったティアナ。弱弱しくも鋭い視線をダンテに向ける。

しかし本人は何ら気にする事無く、どうどうと足を組んでベンチに凭れ掛かった。

そしてしばらくの沈黙。

ティアナは俯いたまま、ダンテは口笛を吹きながら暗くなった夜空を眺めていた。

「……約束、覚えてる？」

「約束？」

先に口を開いたのはティアナ。
重々しくも、はつきりとした口調でダンテに問う。

その『約束』が、彼女を無理に縛っていた。もっとも、ティアナの自業自得と言ってしまえばそれまでだが。

「その、約束……なんだけど、さ……」

「そんなのあったか？」

「……え？」

「そんな約束、した覚えはないぜ？」

俯いたまま喋っていたティアナは、驚いた様に顔を上げる。
そこには、こちらに向けてニヒルに微笑むダンテがいた。

『確信犯』というヤツである。

それを見て、最初は目を丸くしていたティアナも罰が悪そうに苦笑する。

「そっか、覚えてないのね」

「ああ、まったく。大事な約束だったかい？」

「いや、気にしないで。忘れていいわよ」

「そう言われると、気になっちまうな」

「……からかつてるの？」

「いいや、全然？ ハハッ」

スバル達の前ではリーダーシップを取る。

それは、自身最年長であり司令塔の役目を果たすため。冷静に、確実な判断を下すため。

なのは達の前では、部下としての笑顔で振舞う。なのはやフェイト、はやては隊長とは思えない程フレンドリーだ。しかし、部隊である以上は上下関係はキチリと守る。

そんな普段のティアナからは見られない、歳相応の笑みがこぼれた。相手は年上でありながら、どこか親近感を感じられる。それも、ダンテの性格のためであろう。

「やっと笑ったな」

「は？ どういう事？」

「お嬢ちゃん、俺の前じゃあピリッピリしてるだろう？ ああいう

空気は苦手だね」

「ふーん……。別に、変な意味は無いわよ」

「分かってるよ」

まるで兄弟の様な会話。

置いてけぼりの妹を、馬鹿にしながらも手を差し伸べる兄。その手を取らず、意地を張って自分で兄に追いつこうとする妹。

何故かどこか、そういう感じがしたのだった。

「……力は、力は求めすぎちゃいけないのは分かってる。ううん、きつと一番私が良く知ってるかもしれない」

「……だったら何で、無意識に求めようとする？」

「ッ……！ それは……」

「『自分の心を信じられないから』さ」

「自分の、心……？」

苦しそうにティアナがこぼした言葉。

ダンテはその言葉を拾い、今のティアナに足りない何かを教えた。

ティアナはいまいち意味が分からないのか、頭の上に疑問符を浮かべている。

そんな彼女に、ダンテは静かに言った。

「過ちを犯して、そこから脱出できたのはお前が成長したからだ。

『仲間』を信頼できる様になったから、自分の『力』を信じる事ができる様になったからさ」

「だったら……！」

「だがまだ足りない。いや、お前がそれを『必要とする所』まで来たんだよ」

「必要とする所……」

何時に無く、冷静にティアナに語るダンテ。

もちろん彼は、昔のティアナの様な失態は犯していない。もともと彼は力を求める性格などでは無かったし、そういう物には根本的に興味が無かったのだ。

「俺がこんな事を言えるのは、実際に見たからさ。力を求め過ぎると、その先にあるのは『力という名の呪縛』。それが再び過ちを呼ぶ。お前は、今その道に進みかけてるんだよ」

「でも、だったら！ どうすれば、どうすれば……！」

「それが、さっき言った事だ」

目に涙を浮かべ、ダンテの方に向き直る。

同時に彼も、ティアナに視線を向けた。

「今のお前が必要としている物。それは、自分自身の『心』を信じる事。迷うなどは言わない。迷ってもいい。変な考えに思考を流されるな。ただ一つ、自分の『目標』だけを見据えて進め」

そう言つて、すぐベンチを立つ。

『話す事はもう無い』。そういう意思表示にも感じられる行動だった。

ティアナは何か言いたそうに口を開けるが、声を出す事は無かった。

ダンテに頼れば彼は助言をしてくれるだろう。だがそれは、ティアナの目標へと進むための道とは違う方向へと進んでしまうかも知れない。経験者という理由で、自分は彼の言葉を鵜呑みにしてしまうかもしれない。

「……ありがとう、ダンテ」

ただ最後に、彼女は長らく口にしていなかった『感謝の言葉』を漏らした。無論、声はダンテに届く事は無かった……

…

一人廊下を歩く。

自分の足音だけが、響き渡っていた。

時間は午前1時30分。良い子どころか、大人ですら普通に就寝している時間であった。もっとも、六課の隊員達もほとんどは眠りにについている。ダンテは眠たくないのか、一人散歩気分で歩いていたのだ。

「力、ね……やっぱりティアナは、あの馬鹿野郎と似てるところがある……」

そう言っ先程の事を思い出す。

深夜まで一人で訓練を行っていたティアナ。力の代償は自身の心。彼女は道を誤ろうとしていた。

ダンテの脳裏を過ぎるのは、魔の塔で斬り合った実兄の言葉。

『力無くしては何も守れない。……己の命さえな』

忘れはしない。

幾度と無く剣をぶつけ合った。

力を求め暴走するあまり、禁忌さえ犯そうとしていた我が兄を。

彼は二度斬った。

まだ、自身の兄として。そして、魔帝の僕へと成り下がった兄として。

「なあ……バージル。面白いもんだよな」

【バージル】。

ダンテは無意識にそう呟いた。

己の兄の名を。亡き母の形見に刻まれた名を。

そして自身のデバイスを、唐突に起動。

『どうかしましたか？』

「いや……少しだけ、このままでいいか？」

『私は構いません。が……マスター、やはり何かお悩み事でも？』

「そんな事は無いさ。ただ……思い出に浸りたいって時もある」

『……分かりました。では、この状態のままで。』

起動させ、日本刀の形になった閻魔刀をまじまじと見つめる。
このデバイスの原案、本当の閻魔刀と瓜二つである閻魔刀を。

黒い鞘は蛍光灯の光に反射して、黒光りしていた。

少し立ち止まったあと、すぐに歩き始める。先程より少し遅いペースで。

『どこに行くんですか？』

「自販機だよ。コーヒーでも勝って寝るさ」

『そうですね。寝不足は部隊長に怒られますよ。』

「悪魔つてのは睡眠時間がいらんだよ。……嘘だな」

一人で笑っている事を皮肉に感じ、余計に笑ってしまう。

デバイスである閻魔刀も、表情は見せずとも笑っていたのでは無
いだろうか。

そして言った通り、無糖のコーヒーを飲んだ後に彼は就寝した……

…

「あつ、ティア！ おはよー！」

「朝からうつさいスバル！」

「ご、ごめん！ って、何してたの？ まさかまた自主錬！？」

「違うわよ馬鹿！ 普通に座ってただけじゃないの！」

「あ、そうだね……はは」

朝一番からハイテンションの相方に、思わず溜め息を漏らすティアナ。

しかしどこか普段より落ち着いており、スバルもティアナの隣に座った。

「どうかしたの？ ティア、いつもと違う様な……」

「えっ！？」

あからさまに反応する。肩が勢い良く上がり、スバルでもティアナの異変には気付いた。

「もしかして昨日、何かあったの！？ 怪我とかそういうんじゃない……」

……！

「何も無いわよ！ 大丈夫だから！」

「本当に本当！？」

「しつこい！」

今度は勢い良くゲンコツを喰らうスバル。ティアナは青筋を作り、呆れた様に肩を竦める。しかし、溜め息はつかなかった。

「別に……自分で考えあつてこうしてるだけよ」

「えっ……？」

「たまには休みもいいかな、って思ったの」

「……うん！ そうだよ！」

「もっとも、なのはさんの訓練があるんだけどね」

やはり昨日までとは違う。

忘れていた、自分の心を取り戻せた。

ティアナはそういう風に感じていたのだ。

そして、もう一つ気付いた事がある。

それは、自分が笑えばスバルも笑ってくれる。

馬鹿で天然な相方だが、伊達にコンビを組んできたわけではない。なのはに共にどやされる事もあれば、共に褒められる事もあった。腐れ縁というのは間違っていない。

そんな相方が、普段より自然に笑ってくれる。

それが、今のティアナには素直に嬉しかった。

「あれっ？ 二人とも早いね」

「あっ……おはようございます！」

「おはようございます！」

「うん、おはよう。ティアナ、スバル」

そこに現れたのは、教導官制服姿のなのは。朝から彼女の自慢の優しい笑みがこぼれ、ティアナとスバルも笑顔で挨拶する。

しかしなのはは一瞬疑問の様な表情を浮かべてから、先程より更に満面の笑みになった。

「ティアナ……良かったね」

「えっ……？ な、何の事ですか？」

「分かってる。その顔……私も初めて会った時はそんな感じだったよ」

そして右手を肩に置き、視線をティアナと合わせた。

「もしかすると……私より、分かりやすい教え方だった？」

「……そ、そんな事ありません！」

「そっか、良かった。……なーんてね、うそうそ。じゃあ、またあとでね！」

「は、はい……」

最後に悪戯っぽく微笑み、その場を去ったなのは。

同時に、ティアナは安心した様に肩を降ろす。スバルはどういう意味か当然分らず、隣ですつとクエスチョンマークを浮かべていた。

まるで見られていた。

そう感じる程、心を見透かされていたのだ。もしくは、ティアナの顔にあからさまに出ていたか。

どちらにせよ恥ずかしい事に変わりはない。
ティアナはその場で赤面する。

「どうかしたの、ティア？ あつ、顔が赤いよ！？ 熱があるんじゃない……！」

「うっさい馬鹿スバル！ 何にも無いわよ！」
「うっ、ごめん〜！」

そして笑いながら逃げ回るスバルと、赤面しながら彼女を追いかけるティアナ。

直接的な関係は無かった。

しかし、ダンテの言葉が二人の信頼を向上させたのは確かだった。

『自分の心を信じる事』

それは生涯、ダンテと別れてからも。

ティアナの記憶から忘れられる事は無かった……

M i s s i o n ・ 1 0 〈求めた力〉（後書き）

力を求め、さ迷い続けたもう一人の魔剣士。

赤の狩人と同じ銀髪碧眼。しかし羽織るコートは冷たい蒼。

赤の狩人と蒼の剣士。

二人は相容れる事は無く、全てを賭けて斬り合った。

己が魂と、誇りをも賭けて。

InterMission・2 〈休日の過ごし方〉（前書き）

今日は久々の六課OFF。

上からのサプライズではやても休暇に。
もちろんダンテでもある。

揃って町に繰り出すが、果たしてどうなる事やら……。

Inter Mission・2 〈休日の過ごし方〉

「OFF? 私も?」

『ああ。最近働き詰めだっただろう。今日はゆっくり羽を伸ばせ』
「何か裏がありそうやな……」

『そんな事は無い、これは本当だ。それとも無しにするか?』

「冗談やって。ゆっくり休ませてもらいますわ」

『ああ。では、失礼する』

画面越しに映る黒髪の上司との通信が終わり、満面の笑みを浮かべるはやて。彼女の小さなデバイス【リインフォース?】も同様に、無邪気にそこらを飛び回っている。

「確かに忙しかったもんな……。やろうと思えばすぐにも出勤できるし、ええ休みやな」

「そうですね! 皆で遊びに行きましょうです!」

「そやな……。ま、もっとも先に休んでるのは分かってるけど」

苦笑を浮かべるはやてを、リインは不思議そうに見つめる。

はやては『何でも無いよ』と言った表情で、一旦隊長室を出た。

…

「ふわあ……。気持ちいいね、新鮮♪」

「こうしてOFFで外に出るのは久しぶりだもんね」

「あら？　そう言えばフォワード組はどこ行ったん？」

「違う所に行くって。念話もできるし大丈夫でしょ」

「ならええんやけど……　しっかし遅いなあ。もう十分も待ってるで」

頬を膨らませながら、辺りを見回すはやて。なのはとフェイトは二人で、他愛も無い話をしている。

なお、三人とも私服。そういう意味でも新鮮だ。

今三人は、噴水の前で人を待っている。

この三人を待たせるといふのは些か驚くが、もちろんそんな事ができるのは一人しかない。

「あつ！　来た来た！　遅いでダンテさーん！」

案の定だ。

服装は普段と変わらないが、物騒だと思ったのかりベリオンは背負っていない。無論、腰には拳銃を携えているが。もっとも、ばれれば六課の隊長三人はたたでは済まない。

「悪いな。堅い女を口説こうとしてたら遅れちゃった」

「何やってるんですか！ まったく……」

「もしかして妬いてくれてんのかい？ そりゃ嬉しいこった」

「なッ——！ そ、そんなのじゃないですよ！」

ダンテが何気なく発した言葉に、フェイトは赤面しながら両手をブンブンと振る。無論、余計怪しまれるだけではやてとなのはは苦笑していた。

そして歩き出す四人。

端から見れば、異様な光景だ。

左端を歩くのは、機動六課部隊長であり『夜天の王』の異名を持つ八神はやて。普段の制服姿とは違い、歳相応の私服姿は誰もエース級魔導師とは思わないだろう。

対照右端を歩いているのは、誰もが知る『管理局のエースオブエース』高町なのは。こちらもはやて同様、普段六課でいる姿とは一転し新鮮な雰囲気である。もっとも、魔王たる所以の笑顔は健在だ。

そして真ん中。と言うよりなのは側を歩くのが、金髪を後ろで束ねた『金色の閃光』フェイト・T・ハラオウン。彼女ははやてなどと対照的に、大人っぽい雰囲気を出していた。もっとも、三人の中では一番冷静かも知れないが。

その隣、一人だけ頭二つ分程抜けている『最強の悪魔狩人』ダンテ。簡潔に言えば、本当に浮いている。美女三人の中に大男が一人しかもそこらのモデルでは話にならない程のイケメンである。

その四人とすれ違うものは皆、その場で一瞬立ち止まってしまっていた。

「にやはは……変装とか、した方が良かったかな？」

「人気者つてのは辛いね。特に美女に囲まれてる状態で美女に見られてるとなるとな」

周りを見て苦笑するなのはと、参った様に肩を竦めながら溜め息をつくダンテ。他二人も同様のリアクションである。

芸能人や俳優などが街を歩けば人に群がられる様に、今の彼らもそうだった。今やミッドチルダでは文句無しの有名人である事は間違いないのだ。

一度四人は歩道のベンチの前で立ち止まる。

フェイトとなのは、それにはやてまでもが寄りたい所があると言うのだ。

「おいおい……これは新しいイジメの一つかい？」

「そんな事ないで。ちよつとここで待ってとつてや」

「そ、そうですよ！ 入ってこないで下さいね！」

「誰も入りやしねえよ……ったく。何で下着売り場なんだか……」

そこはど派手な外見の女性用下着売り場。

はやてら三人とは対照的に、ダンテの顔は引き攣っている。

もちろん、彼らが話していた様にダンテは入らない。

それこそいくらイケメンであったとしても、ダンテのプライドが許さない。

「それじゃ……」

「ああ。早く戻って来いよ?」

「分かってますよ、フフツ……」

何故か最後になのはが笑みを浮かべる。

もちろん意図が分からず、首を傾げるダンテ。

そんな彼に構う事無く、三人は店内に入ってしまった。

…

「……Huh・もう十分も待ったぜ」

『もう』という言葉の使い方がおかしい気がする。

相変わらず店から少し離れたベンチで座って待つダンテ。普通ならすぐにでもどこかに行ってしまうそうだが、そんな事をすればあと厄介な事になるのは見えている。大きな溜め息を一つつき、

足を組んで座っていた。

すると、何故か店とは反対側の路地からフェイトが出てきた。
いや、フェイト”だけ”では無かった。

「遅いぜ……って、誰だい？ その可愛いお嬢ちゃんは？」

見れば、横にはフェイトと同じ金髪に赤と緑のオッドアイの少女。
ダンテを怖がっているのか恥ずかしいのか、すぐにフェイトの後ろ
に隠れてしまった。

帰ってきたかと思えば小さな女の子を連れている。

ダンテが首を傾げるのも当然だ。

「ダンテさん！」

「うおっ！ いきなりなんだい？」

それまで黙っていたフェイトが、いきなり声を上げる。

しかし次に彼女の口から放たれた言葉は、ダンテの思考回路を一
瞬にして停止させた。

「この子……ダンテさんの子、ですよ」
「……What？」

そのままの表情でフリーズ。
フェイトも言い切った様で、肩の力が抜けている。

しかしそれ以上に、ダンテは大変な事になっていた。

「おいおいおいおい……嘘だろ？」

「本当です。ね、ヴィヴィオ？」

「……うん。この人、パパ」

「ちよつと待てお嬢ちゃん！」

【ヴィヴィオ】と呼ばれた少女は、恥ずかしそうにしながらもダンテを『パパ』と呼んだ。

それが余計に、彼の思考回路を狂わせる。

途端に、付近の公衆電話に入ってどこかに電話し始めた。

「あのー……どこに電話してるんですか？」

ダンテは答えない。

答えられないに近いのだろう。

彼の電話先は数々の女性。

そう、焦り過ぎてその中の誰かの子供だと思ったのだ。

しかしそんなはずは無く、十分後にはベンチでヴィヴィオ・フェ

イトと共に座っていた。

もちろん、ガツクリとうなだれている。

「おいおいまじかよ……勘弁してくれよ……」

「あ、あのー……ダンテさん？」

「『こつから先はR指定』はしてないぜ……それどころか、女運が悪^{わる}い俺にそんな……」

「ちょ、ちよつと……？」

「まさか……！」

フェイトの呼びかけに答えないダンテ。

しかし何か思いついたのか、急に顔を上げフェイトの方を見る。

視線がぴつたりと合い、フェイトは目を離せない。

「先に言つとくぜ……」

「な、何ですか？」

「俺はお前とやましい事なんか何もしてない。だよな？」

「なッ……！ あ、当たり前じゃないですか！」

ダンテが心配そうに放った言葉に、赤面どころか大量の蒸気が出るほど顔を赤らめて反論するフェイト。どうみても確信犯にしか見えないが、本当に彼女はダンテとそんな事はしていない。できるはずもない。

その言葉に、素直にダンテは安心する。

身に覚えの無い妊娠などは良く聞く話だからだ。

「じゃあ……どこのどいつが……？」

そう言って溜め息をついた時だった。

不意に後ろから肩を叩かれる。

唐突なので驚いたのか、恐ろしい反射神経で後ろを振り返った。

そこに立っていたのは、苦笑するなのはと腹を抱えて笑うはやて。何がおかしいのか、その時のダンテには理解できなかった。

「ごめんなさい、ダンテさん」

「……What? 何で謝るんだ？」

「あっ！ ママ！」

「にはは、ごめんねヴィヴィオ」

「……ママ？」

それまで縮こまっていたヴィヴィオが、なのはに抱きつく。なの
はも慣れた様子で、ヴィヴィオを抱きしめていた。

そしてまたもや思考停止。

最早普段の落ち着いた様子は欠片も無い。もつとも、この状況で
落ち着いていられるならば大した物だが。

「あはは、すみませんダンテさん。これは一種の……」

「ちよつと待てよ。俺はナノハともそんな事はしてないぜ。大体そのお嬢ちゃんの歳を考えると到底……」

「違いますよ！ 話を最後まで聞いて下さい！」

余計に疑問である。

しかしその疑問の答えは、はやてが簡潔に説明した。

「一種のサプライズやで。ドッキリ、の方が正しいかもな？」

「……おいおい、まじかよ……」

「あはは、案外簡単に引つかかったね……」

「そりゃ反則だぜ。身に覚えが無さ過ぎるが、それでもな……」

そう言つて、ヴィヴィオの方を見る。

今はもう、先程とは違ってフェイトの後ろに隠れていた。

安堵の溜め息を漏らし、ベンチにもたれかかる。

そして自嘲気味に笑ったあと、更に大きく笑う。

フェイトとはやて、なのはにヴィヴィオまでもつられて大笑いした。

…

「まったく……気休めすらできなかったぜ」

「そう言うたらあかんで？ 面白かったやろ？」

「悪魔の強靱な心臓が止まりそうになるくらいにな」

「あはは、すみません……」

自販機でコーヒーを買いながら、愚痴をこぼすダンテ。
もちろん隊長三人も一緒だ。

ここでフェイトが関係無い事だが、ある事に気が付く。

「あれ？ そう言えばダンテさん……最近、お酒飲みませんよね？」

「ああ？ ……って、酒か。そういや最近飲んでないな」

「てつきりやめたのかと……」

「体に悪いしな。おまけに酒臭いで？」

「悪かったな。今度から香水でもつけとくよ」

皮肉気に言いながら、自分の体臭を確かめるダンテ。

しかし唐突に、何か思い出したのかはやての方に向きなあった。

「そうだ、ハヤテに言っとく事があったのを忘れてた」

「え、何？ 大事な用？」

「ああ。頼み事、だな」

「頼み事……？ 何？」

そこで少し間を空けて、ダンテはニヤリと笑いながら言った。

「この食堂にピザのメニューと、自販機に酒を追加してくれ」

「……ええっ！？ それって……！」

「ああ、あとストロベリーサンデーもな」

「全部ダンテさんの好物じゃないですか！」

三人に同じ事を言われて、ダンテは参った様に頭を掻いていた……

END

InterMission・2 《休日の過ごし方》（後書き）

こんにちは。こんばんわ。おはようございます。

VerGilです。

今回の小話はどうでしたか？

これからは五話毎に入れていくと思っています。

では、また。

ここは、どこだ……？

”感覚”を頼りに歩いてきたせいで、周りがどこかすら分からない。

そもそも、俺は何故ここにいるんだ……？

何故、親父の『刀』が無いんだ……！？

「おい、兄ちゃん。見かけねえ顔だな？」

「どっか行くのかい？ 俺ら金欠でさ、お金貸してくんない？」

「そーそー！ ボロボロのフードなんか被ってねえでよっ！」

”屑共”が俺に突っかかってきた。

以前の俺ならば、近づいてきた瞬間にバラバラにしていただろう。

だが今は……。

「なんだあ？ この蒼いコート？」

「自分はお前達みたいな奴らとは違います、ってか!？」

「あははは！ ふざけてんじゃねえよっ！」

一人の男の蹴りが飛んできた。

恐らく何かやっていたのだろう。妙にいい蹴りだった。

俺は無意識に、もとの反射神経でそれを受け止めていた。

「ああ！？俺の蹴りを止めやがった！？」

「こいつっ——！」

続いて違う男のストレートが飛んでくる。

それもまた反射的にかわし、一旦男達と距離を取った。

「てめえ……いらついてきたぜえ……？」

「ボッコボコにしてやるよ、おい！？」

俺は……何をしているんだ？

そうだ。俺は何がしたいんだ？

親父の跡を継ぐのは俺のハズだ。

それなのに、『刀』が無いだけでこんな屑共相手に手間取ってど

うつする？

俺は、俺は……。

「げえっ！？」

「ぐおお！ てっ、てめ……！」

「黙れ……。失せる屑共が」

「おおっ！」

真の後継者は俺だ。

”奴”では無い。

「スパイダの後継者は、俺だ……ダンテ」

路地裏から表に出ると、人の匂いが無性に鼻を刺激した……

…

「ふわああ……。まったく、寝てる時間が一番幸せなのはよく言っ

「たもんだな」

「でも、寝すぎると逆にえらいですよね？」

「まあな。俺は大丈夫なんだよ」

「だったら普通に起きた時も大丈夫でしょ……」

呆れた様に溜め息をつくティアナ。

ここ数日で、ダンテとティアナの仲は大分良くなった。単に普通の同僚だが、今までが陰悪過ぎたという事もある。もっとも、それはティアナが勝手に境界線を張っていただけなのだが。

時間は午前8時30分。

ダンテにしては早い起床だが、それにはもちろん理由があった。

「あつ、ダンテさーん！」

「お、来たか……。んじゃ、行つて来るぜ」

「くれぐれも変な事はしないでよね？」

「分かってるよ。まるで母親みたいな言い方だな？」

「手に負えないのは赤ん坊と似てるわね」

ダンテは心底面白いと思った。

あれ程当初は固かったティアナも、慣れてしまえばはやて以上に皮肉である。

しかし彼にはそちらの方が彼女と接しやすく、彼女も照れ隠しと
いうのもあるのだろう。

ダンテが食堂から出る間際にも、皮肉の言葉が掛けられた。

「じゃあな」

そう言つて食堂から出たダンテ。
そこには見慣れた人物が二人。

「もういいですか？ 朝ご飯とか……」

「大丈夫やつてフェイトちゃん。ダンテさんもダラダラしたくないやろ？」

「どうなんだろうな……ケースバイケースつてヤツだ」

「それじゃ行こか。タイムイズマネーやからな」

六課の制服姿のはやとフェイト。

いつもよりどこか張り詰めた雰囲気、ダンテは逆に溜め息を漏らす。彼はこんな空気は好きではない。

しかし今から行く場所は、そうしなければいけない所だ。

「本局、ねえ……。お偉いさんばつかつてヤツか？」

「まあ、そうと言えばそうですね。今回会う人も私達の上司です」

「ちなみにフェイトちゃんのお兄ちゃんやで」

「そりゃ楽しみだな。天然系のボケ男か、それとも妹過保護の兄貴か……」

「違いますよ！ そんな事……あつても過保護と言えば過保護かな……」

全力で否定しようとしたフェイトだが、あながち間違っていないかもと思う。

これから彼らが向かう場所は、時空管理局の本局。

唐突に何故そんな所に行くのか？ という疑問もあるだろうが、その理由は全然唐突な物では無かった。寧ろ前々から問題なっていたのだが、はやてが誤魔化していただけであった。

それはダンテの所持する『質量兵器』の件についてである。

元々ミッドチルダでは質量兵器の使用は厳禁、持つ事すら許されていない。

今回ダンテが行かなければならなかったのは、今までは『民間協力者』であれど重要人物兼中心戦力である彼の武器を取り上げてしまうのはどうだろうか』とはやてが必死に誤魔化していただけ。しかしさすがに見逃してはくれない。

すぐに取り上げというわけでは無かったが、部隊長はやてとダンテはもちろん、フェイトもついて来る事になった。

「言つとくが、悪魔相手じゃあデバイスじゃさすがに限界があるぜ」
「それは分かつとる。私も何とか交渉するし、相手も話しやすい人やからまだマシや」

「フェイトの兄貴ねえ……」

「あはは、何考えてるんですか……？」

宙を見ながら妙な笑みを浮かべるダンテに、思わず不安になって声を掛けるフェイト。

はやてはそんな二人を見て、くすくすと小さく笑っていた。

そうやって話しながら、気付けばヘリポートに。
ヘリの傍には陸曹長のヴァイスが待っていた。

「旦那！ 今日も絶好調かい？」

「ああ、ストサンとピザも食べたしな」

「メニュー追加したんだっけ？ 部隊長もさすが！」

「まあ、半ば強引やけどな…… って、無駄話しとる時間ちゃう。行くで」

「あいよ！」

朝っぱらからテンション高めのヴァイスに、ダンテでさえ苦笑する。

『んじゃ行きますぜ！』

「おう」

「安全運転でな、ヴァイス君？」

『分かってますよ、部隊長！』

笑顔で挨拶を交わし、三人を乗せたヘリは本局に飛び去って行った……

…

静かな空間に、溶け込むかの様に一人の女性が座っていた。

喫茶店にしては人影が少なく、店内にいるのは彼女と他二人だけ。静かにコーヒーカップに口をつけ、少しだけ飲む。

しばらくの沈黙の後、客が一人入ってきた。

女性はその客に一度目を向け、再び視線を元の位置に戻す。

「相席、いいかな？」

「……ええ。どうぞ」

「ありがとう」

その脚の男は唐突に彼女の向かい側の席に座り、自分はアイスコーヒーを注文した。

注文を確認したウェイトレスは早足で奥に入っていた。

向かい合った男。

女性は静かに、その男の名を呼んだ。

「前は失敗つてどこかしら……ハルバート？」

「ああ、すまないね。私には些か重い仕事だった様だ」

そう。

男の名は【デューク・ハルバート】。
先日の事件の黒幕とも言える存在だ。

そしてその名を知る女性。

今度はハルバートが、彼女の名を口に出した。

「で、どうするんだい？ 次の手は考えてあるんだろう、レイシー？」

「……ええ」

【レイシー】は静かに答えた。

その返事に、満足そうに頷くハルバート。

「あなたにはこっちの方に回ってもらっわ」

「“こつち”とは？」

「少なからず因縁があるハズよ……」

そう言っただけで彼女が取り出した一枚の写真。少し見たあと、すぐにハルバートに手渡す。

しかし彼は、その写真を見た時に驚愕の表情を浮かべた。

「これは……！」

「分かるでしょう？ 『探している』のよ」
「……はは、なるほどね。これは些か苦勞するな……」

写真に写っていたモノ。

それは、何ら変わりない人混みだった。
しかし、その中に一つ浮いた人間がいる。

ぼろぼろのフードを身に纏い、その隙間から見えるのは薄汚れた
蒼のコート。

そして写真から迸る殺気。人混みの中からこちらを睨みつけるそ
の瞳は、冷徹な碧眼だった。

「とりあえず……次は私が行く」

「……！？ 待て、彼は危険だ。それに君が直接行く必要は……！」
「話を着けるわ。彼なら分かってくれる」

「……そうか。なら私は反対しない。が、無茶はしないでくれよ
？」

「分かってる、殺し合いをするつもりじゃないから」

そう言っただけで彼女はすっと立ち上がり、足早と店を後にした。

店を出た合図、扉を開けた拍子にカランカランと音が鳴り響く。

そして再び沈黙。

しかし彼は一人、狂気の笑みを浮かべていた。

「フフフ……君はまったく、素晴らしい人だよ」

それはまるで、全てを見通している様な笑顔だった。
顔は笑っていても本心は笑っていない。いや、笑っていたとしても冷徹な笑みだろう。

紳士の裏に隠れた、彼の本性。

最後にアイスコーヒーを飲み干し、彼も店から出て行った……

…

「あー……。やっぱ、この空気は慣れたもんじゃねえな。ってか、キツいんだがこれより大きいのが無かったのか？」

「我慢してや。これでも一番大きいのなんやから」

「裾も足りねえ、子供の服を着てるみたいだな」

「似合つとるよ」

「それは褒め言葉かい？」

柄に合わない上にサイズも合わない機動六課の制服に、大きく溜め息をつく。

無論似合わないという事はない。寧ろ似合っているに近いが、普段の彼とのギャップが激しい。

その服装のまま、三人はある部屋の前に立っていた。
通路には誰もいない。

「こちら機動六課部隊長八神はやてです。民間協力者のダンテさんと保護役としてフェイト・T・ハラウンを同行させました」

はやては関西弁を出さず、固い言い方で呼びかけた。

すると五秒ほどの沈黙の後、扉が開かれた。

その先に座っていたのは、一人の青年。

フェイトの金髪とは対照的な黒髪に、いかにも真面目そうな雰囲気。

無表情と言えいいのか、静かな視線でこちらを見ていた。

そしてダンテは思う。

『絶対性に合わない奴だ』と。

「わざわざすまない。入ってくれ」

「分かりました、失礼します」

「ほ、ほらダンテさん！入って下さい！」

「ん？ ああ、悪い……」

ぼーっとしていたのか、入り口で立ったままだったダンテに催促するフェイト。

本人も彼女に呼ばれて我に返り、頭を掻きながら部屋に入った。

「とりあえず座ってくれ。お茶を入れようか？」

「いや、大丈夫だよ。そんな固くならんでええのに」

「仕事中だからな。それに、今回は笑い話では進められそうに無い」

「……まあ、な。私も分かってるよ」

「ならいいんだ。変な話をしてすまない」

その男の名は「クロノ・ハラウン」。

フェイトの義兄であり、本局の提督という重要な位置につく魔導師。

自身もエリートの一である。

はやての断りで、お茶を入れずに席に着くクロノ。

わざとか偶然か、ダンテの正面に座り彼と視線を合わせる。

「（最強の悪魔狩人、か……）」

「何か顔についてるかい？」

「いや、何でもない」

ダンテの威圧に一步も退かないクロノ。

そこはやはり提督として、譲れないところがあるだろう。

その点に関しては、わざとプレッシャーをかけたダンテ自身も意外そうにしていた。

ダンテから視線を外し、今度ははやてを見る。

「本題に入ろうか」

「ん、ああ……そつやな。で、どうする気なん？」

自信満々の表情でクロノを見つめるはやて。

彼女はもし『ダンテの質量兵器を没収する』と言われても、言い逃れる自信があった。

管理局は現状では、彼以外にともに悪魔と対峙できる魔導師はいない。高町なのはやフェイト・T・ハラオウン、更には八神はやてを中心とする守護騎士達でも確実に勝てるという保証は無い。

ヴォルケンリッター

そこでもしダンテの質量兵器を取り上げる事になれば、当然彼本人が黙ってはいない。普通に考えれば即刻協力を辞退し、自身での悪魔狩りに戻るだろう。

それを踏まえても、クロノなら言うて来る。

そしてそれをも考え、はやては言い分をありつたけ集めてきたのだ。

しかし、本局が下した判断は意外な物だった。

「質量兵器の件についてだが……特例措置として、ダンテの質量兵器の保持及び使用を許可する」

「……ええっ！？　ほんまなん!？」

「ああ、今回は特例中の特例だ。ただ、交換条件が三つ。いや、今後多少は増える可能性はあるが……」

「だろうな。そこまででつけえ組織がただで許してくれるワケがねえしな」

はやてが驚いている横で、ダンテはニヒルな笑みをクロノに向けている。

「……まず一つ。君には『民間協力者』としてでは無く、一定期間内だが正式に機動六課に編入してもらう。無論、階級等はこちらで取り決めさせてもらうつもりだ。そして二つ目、その大剣を持って《聖王協会》に行き【カリム・グラシア】に視てもらってくれ」
「一つ目は全然OK。二つ目も聖王協会なんてのは知らねーが、下手な真似しないんだったら普通にこれもOKだ。んで、あと一つは？」

思ったより楽な条件で、ダンテは少し安心する。
そして最後の条件を聞くが、何故か返答が返ってこない。
見れば、クロノが真面目な表情のままでフリーズしている。
いや、厳密に言えば口ぱくのような事をしていた。

そして口ぱくの状態だったのが、次第に声が聞こえだす。

「……を、……しく……だぞ」

「ああ？ もう一回頼む」

「ぐっ……！ だからフェイ——！」

『大変です提督！』

「こんな時に何だ！？」

クロノが何故か赤面しながら言おうとした時、緊急通信が入る。多少苛立っていたが、クロノはその通信を聞いた途端に仕事モードに切り替わる。

『古代遺物管理部機動六課隊舎が襲撃されています！ 多数の悪魔の魔力も感知されています！ このままでは危険です！』

「了解した。……すまない、聞こえていただろう？」

「どうやら厄介な事になってるらしいな？」

「みたいやな……もうええよな？ クロノ君」

「ああ、頼んだぞ。無茶するなよ、フェイト？」

「分かってる、お兄ちゃん」

緊急事態だが、フェイトに『お兄ちゃん』と呼ばれた瞬間に再び表情がフリーズする。

しかし先程の様に長くは無く、すぐに小さく微笑んだ。

三人は部屋を出て、すぐさまへりに向かう。

「って事や、スッキリしたな！」

「まあな。だが、厄介な事になりそうだぜ……！」

「………どういう事ですか!？」

走りながら、ダンテに問うフェイト。

彼から返って来た言葉は、この先の暗雲を指していた。

「避けて通れない壁ってヤツだ……！！　今回はかりは、全員腹括らなきゃヤバイって事だけ言っとくぜ！」

彼の脳裏に過ぎっていたのは、あの時なのはとフェイトに渡した一枚の写真に写っていた女性の姿だった……

M i s s i o n ・ 1 1 〈血統〉（後書き）

合間見える【レイシー】と【ダンテ】。

彼女の放つ”電撃”に倒れる白の魔導師。

そして必死に狩人を説得しようとする瞳。

二人の前に現れる、堕ちた『蒼の剣士』。

因縁が蘇り、碧き瞳はもう一人の”半魔”を映す。

Mission・12 《レイシー》

機動六課の上空をホバリングするヘリ。

そこから見える光景は、まさしく『地獄絵図』だった。

辺りからは炎が立ち上り、数十の悪魔が地上を跋扈している。そして中破した隊舎を庇いながら抗戦を続ける魔導師達。

しかしその中に、エースオブエースの姿は無かった。

「そんな…嘘やろ……！？」

「な、なのはッ……！」

最前線部には、一人の女性の傍に倒れているなのはの姿。バリアジャケットはボロボロで、上空からでも見えるほど血が滲んでいた。

二人には信じられなかった。

いや、二人だけではない。抗戦を続けているフォワード陣にも信じられないだろう。

管理局のエースオブエースと謳われ、数々の敵を打ち負かしてきた彼女が負ける事など。

それも、一人の女に。

「ヴァイス君！　すぐに着陸や！」

『分かってる！　何とかヘリポートは無事みてえだけど、こりゃやばいぜ！』

「完全に押されてる……！　フォワード陣、聞こえる！？」

「駄目や！　念話が繋がらへん！　何かに妨害されてるんや！」

そう言った会話を繰り返しながら、ヘリは着陸。

同時にフェイトとはやては自身のデバイスを起動させ、バリアジヤケットを身に纏う。

しかしそれより早く行動している人物が一人。

気付けば二人の横を駆け抜け、柵を乗り越えて飛び降りていた。
無論、ダンテが。

「なッ——ダンテさんッ！？」

「大丈夫だ！　先に行ってるぜ！」

「大丈夫って……ええいもう！　私らも行くで！」

「うん！！」

そう言って駆け出す二人。

しかしやはり、脳裏を支配していたのはなのはの事。

彼女が何故。

今はそれしか考えられなかったのだ……

…

（一時間前）

なのはは一人六課に残された事を不満に思いながらも、外で気分転換を行っていた。

新鮮な空気を吸い込む。体が軽くなる様な感じになり、リフレッシュする事ができた。

そうして隊舎に戻ろうとした時だ。

視界の端に映ったのは、一人の女性の姿。
どうやらこちらを見ている様だ。

「あの……どうかしましたか？」

「あ、実は……人を探してて」

「人、ですか？」

「ええ。ここにいると思うんだけど……」

そう言ってこちらと視線が合う。

すらりとしたスタイル、フェイトより鈍く輝く金髪。

恐らく自分より年上だろう。雰囲気と喋り方もあいまって、そうとしか考えられない。

その女性はニコリと微笑んだ。

しかしその瞬間、先程までとはどこか違う雰囲気になる。どこも変わらない。しかし、なのはは背筋が凍る様な感覚に襲われた。

細めていた目が開かれる。

そこに先程までの『優しさ』は無かった。

「あなた……高町なのは、ね？」

「……何か用ですか？」

「やっぱり。用があるのはあなたじゃないわ……」

そう、彼女が言った時だ。

彼女の後ろ、何も無かった空間から音も無く『死神』が現れる。そう、死神。なのはとフェイトが対峙した悪魔の一種だ。

危ない。

そう言おうとした時。

『Auto protection.』

「——ッ!? いきなり何を……!?!」

「あら凄いじゃない。今のをかわすなんてね」

何の予備動作も無く、彼女のハイキックが繰り出された。
もちろんなのは反応できず、気付けばレイジングハートが自動
防衛していたのだ。

しかしなのはが驚いたのは、彼女の蹴りがただの蹴りでは無く『
電撃を伴った攻撃』だった事。
魔法を使ったわけでも無さそうだ。しかしただの人間がこんな事
をできるはずも無い。

なのはは本能的に距離を取った。
相手の正体が分かったわけでも無い。それでも、速攻でデバイ
スを起動しバリアジャケットを着用。
無論、それは後方の悪魔を迎え撃つためでもある。

気付けば彼女の後ろには、数多の悪魔が集まっていた。
それはもちろんなのはが見た事の無い悪魔ばかり。思考が一瞬で
恐怖に包まれる。

「あなたは一体……！？
「さあ、誰でしょうね？ それより、私は人を探してるの。いや、
人と言ったら間違いかしら」
「……それって、まさか……！？」
「……そう。ダンテに伝えて、『レイシーが会いたいと言っている』
ってね」
「レイシー……！　じゃあ、あなたは……！」

そう。

そう言われてなのはは思い出した。
自身が搜索していた人物の名を。顔を。姿を。そして驚愕する。

今、自分の目の前にいる女性がそうだと知って。

「会わせるわけにはいかない……！」

「あらそう。じゃあ、自分から会いに行くわ……！」

なのはは強く杖を握る。

恐らく相手は自分よりも上。それでも退くわけには行かないのだ。六課を守るためにも、自分がここで負けるわけにはいかない。

覚悟を決め、なのははレイシーとの戦闘に入った……

…

「ぐ、うつ……！」

「どうしたのかしら！？ この程度！？」

「ぐっ……！ デイバインシューター……！」

まるで歯が立たない。

なのははその言葉を受け入れられずにいた。

レイシーはやはり、自分よりも上の実力者だった。

しかし、上、という言葉だけでは足りなかった。

圧倒的实力差。相手が近接戦を主にしている所もあるが、それ以前に早さが違う。

そして、彼女は今一對一で戦っている。

レイシーの後ろについていた悪魔は、散らばって攻撃を始めたのだ。

始めはそうでも無かったが、今は完全に押されている。自分も、防衛ラインも。

「何て強さ……やっぱり、悪魔なの……？」

「なかなか勘がいいわね。人の姿した悪魔もいるのよ」

「でもっ……！ 私は負けるワケには行かない！」

直射型の砲撃は完璧に避けられた。

ディバインシューターも読まれた。

それでも、まだ彼女は折れるわけにはいかなかったのだ。

「全力、全開……！」

最後の気力と魔力を振り絞り、桃色の魔力を収束させる。彼女が持つ砲撃魔法の中で、最大最強を誇る技。

「……！？ これはっ……！」

「無駄です、バインドをかけました……！」

「……伊達にエースは名乗ってないらしいわね」

即座に回避行動を取ろうとしたレイシーは、自分の両手両足が拘束されている事に気付く。

桃色の輪。それは物質で作られる手錠などとは比べ物にならない強度を誇るバインドだった。

自嘲気味に笑い、拘束された状態でなのはを見る。
彼女の前には既に、巨大な球体が出来ていた。

「スターライト……！」

放つ一撃。

それは非殺傷設定であれど、計り知れぬ破壊力。
レイシーどころか、後方の悪魔をも飲み込む。

はずだった。

「へり……はやてちゃんにフェイトちゃん！」

視界の端に見えたのは、六課のへり。

彼女はほんの一瞬、まだ遠くに離れているへりに意識が移った。
前を向いてなかったのは、ほんの一秒足らずだ。

しかし次に前を向いた時、そこには『足』があった。

「……惜しかったわね。あと少し、って所だったけど……」

「そん、な……！ どうやつ、て、バインドを……？」

「あなたのバインドはせいぜい魔導師か怪力のロボットを縛るだけ。悪魔に常識は通じない、覚えておいた方がいいわよ」

そこでなのは意識を失った。

気を失う間際に見えたのは、着陸しようとしていた六課のヘリ。

甘かったのだ。悪魔を相手にして、普通の魔法が通じるなどとそれも、ただの低級悪魔ではない相手に。

レイシーは目ぼしい傷を負ってはいない。

倒れているのはをしばらく見つめ、そのあとに彼女を無視して前に歩き出した。

「来たわね……」

彼女が見たのは、六課の屋上から飛び降りる一人の男の姿。探していた人物。

派手に着地し、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

その碧眼をこちらに向けて。

「来たわね……」

静かにレイシーの前に立つダンテ。

頭一個分程の身長差があり、髪色も金と銀で対照になっている。しかし今のダンテは、どこか普段と違っていた。

「……会いたかった」

そう言葉を漏らし、ダンテの頬に手を伸ばしたレイシー。

しかしその手は彼の頬に触れる事は無かった。

——パシィンツ……

「……」

「おいおい、今はそんな気分じゃないってのは分かってんだろ？」

「……ええ」

乾いた音が鳴り響いた。

それは、彼女の手を払いのけるためにダンテが平手で弾いたのだ。普段女性には手を上げない彼が。

悲しそうにダンテを見つめる瞳。

ダンテはそれを直視しようとはしなかった。

「……こういうのを、感動の再会っていうらしいぜ」

「そう、なのかもね」

「久しぶりじゃねえか……レイシー。いや……【トリッシュ】」

【トリッシュ】。

ダンテはレイシーの事をそう呼んだ。

そしてその名を聞き、辛そうに俯くレイシー。いや、トリッシュ
と言う名の方が正しいのだろうか。

ダンテの脳裏を過ぎっていたのは、目の前にいる女性と瓜二つの
姿をした自分の母。

そしてトリッシュと出会ったあの日。

雷が鳴り響くあの夜の事を、ダンテは思い出していた。

今いる自分は、彼女と出会った事で存在していられるのだから。

M i s s i o n ・ 1 2 〈レイシー〉（後書き）

全ての始まり、というわけでは無い。

だが、全ての元凶を倒したのはあの日が始まりだった。

彼女と出会い、運命の場所へ。

魔界への入り口となる孤島へ。

『父の名に誓って奴に死を。』

『悪魔は泣かない。その涙は、人間の宝物だ。』

Mission・13 〈トリック〉

体が痛む。

少し開いた瞼から、まぶしい光が入ってきた。

「…ここは…？」

「よう、目が覚めたみたいだな。」

「…ダンテさん…？ 私…。」

白いベッドに寝ている自分。その隣に座っていたのはダンテだった。

いまいち状況が把握できず、一度思考を整理するために目を瞑る。

自分は何をやっていたのか。

そして先日のを思い出した瞬間、頭を激しい痛みが襲った。記憶の傷とかそういう表現ではなく、物理的な意味でだ。

「思い出したか？」

「わ、私…！あの時に…。」

「…悪かった。」

「…え？」

少し微笑んだあとに、何故かダンテが頭を下げる。

当然理解できない。ダンテが頭を下げる必要などもつぱら無い。

自分がこうやってベッドに横たわっているのは、自分の弱さが原因。

自分の甘さ、隙を作ってしまった集中力の無さが原因だった。

「まあ、あのあとの事だ。とりあえず本当に大丈夫かい？」

「は、はい。頭はまだ痛いですけど…。」

頭を掻きながら苦笑するなのを見て、ダンテもつられて笑う。
しかし今の彼はどこか、普段より力無く見えた。

「…あの女は、お前も誰か分かっただろ？」

「…はい。」

「俺も探してた奴だ。ずっと、お前らと会うずっと前からな。」

そう言ったのを始まりに、彼は話し始めた。

なのはが気を失ってからの事を。

そして、なのはが敗北を喫した相手【トリッシュ】と自分の関係を。

…

「お前の目的は、何だ？」

彼は戸惑う事無く、仮にも女性相手に銃口を向けた。

向けられた相手は無論レイシー……いや、【トリッシュ】。その銃を、いや、ダンテの複雑な感情が織り交じった瞳を見つめた。

ダンテはその視線から意識を逸らすかの様に、銃を握っている右手に力を込める。

「私は……」

「答える！」

「……分かったわ。」

逃げる事を諦めたのか、静かに俯くトリッシュ。

ダンテは依然、彼女に銃を向けたままだ。

当然逃がすつもりも、許すつもりも無かった。

ゆっくりとトリッシュが顔を上げ、辛そうに口を開きかけた時だった。

「情けねーなー、失敗しちゃったのかよ？」

「……何だ坊ちゃん？ 大事な話の途中だぜ？」

突然彼女の後ろから現れた少年。

身長から考えると、歳は10歳辺りだろうか。にしては、生意気な口調だ。

そして、今の言葉はトリツシュに喋りかけていた。
という事は、彼女を知っているのだらう。

大事な話を邪魔されたせいで、ダンテは子供相手でも多少のイラつきを見せている。

しかしその少年はダンテを見て、見下す様に鼻で笑った。

「おい狩人！」

「ああ？ 随分生意気な口だな？」

「うるせーよ。悪魔とのハーフだからってめーこそ調子乗ってんじゃねーぞ？」

「…いいね、降りてこいよ。その生意気な口から蜂の巣にしてやる。」

「あはは！ 降りてってもいいんだけどさー。てめーの相手は俺じゃないのよ。」

「レン！ あなたいい加減に…！」

「いーじゃん、”今”話さなくてもよ？」

【レン】。

そう呼ばれた少年は、呆れた様にトリツシュを見る。

しかしそれに納得行かないのはもちろんダンテだ。

勝手に子供が割って入ってきた上に、どーたらこーたら言い出すなど彼が我慢できるはずが無い。

「おい坊主！ いい加減にしろよ！？」

「うるせー！ いちいち話しかけてくんじゃねーよ！」

相変わらず生意気な口で、ダンテに一歩も退かない。
そして溜め息をつき、くるりとダンテの方に向き直った。

「おい… 《召喚司》って知ってるか？」

「…聞いた事無いね。」

「そうだろうな、まあ聞かずに死ぬんだけどな！」

そう言い放ったと同時に、彼の前に漆黒の魔方陣が現れる。
そしてぶつぶつと何かを呟き出す。小声も小声なので、当然ダンテには聞こえない。

意味が分からず、ダンテが眉をひそめた時だった。

何も無かった魔法陣の上に、突然”何か”が出現した。
遠目で見ていたダンテは、そこからでも分かるその正体に驚愕の表情を見せる。

それは彼が幾度と無く戦った敵と、まったく同じ姿をしていたからだ。

「ははっ！ 見た事あるよな！？」

「…ああ、随分とな。腐れ縁ってヤツか？」

「知らねーけどさ！」

漆黒の鎧に身を包み、巨大な角らしき装飾とその下に垣間見える真紅に光る眼。

藍色のコートが風に靡かされ、腰に携えた剛剣が異様な雰囲気を漂わせる。

その姿に、ダンテは同様に隠しきれなかった。

「魔界騎士【ネロ・アンジェロ】！ 狩人と剣士、四度目の対峙だろ！？」

「何でコイツが…！？」

「これが『召喚』さ！ もっとも、俺は悪魔専門だけだな！」

そしてレンが合図すると同時に、ネロ・アンジェロは剛剣を振り上げダンテに一瞬で接近。瞬間移動と同等の技に、ダンテは一瞬反応が遅れる。

リベリオンを抜くよりも早く闇魔刀を起動させていたダンテは、反応が遅れた上でも闇魔刀を横に振り、威力を相殺させる。

「ちいっ…！」

『ハアッ！』

「ぐっ、おおっ——！」

しかし体格差でもダンテに勝つアンジェロは、力任せの押し切りで闇魔刀を弾き上げる。

ダンテの両手は刀の柄。当然腰の銃を抜く時間など与えてくれるはずも無かった。

蹴りがダンテの懐に直撃し、態勢がよろけたところを追撃。アンジェロはダンテを相手に、力だけで押していた。

「ぐああっ！」

「ダ、ダンテさんっ！」

駆けつけたフェイトの叫びも虚しく、ダンテは遂に握っていた闇魔刀を弾き飛ばされる。

そして武器を失った状態のダンテが見たのは、居合いの構えを取るアンジェロの姿。幾度と無く苦しめられたこの居合いを、今の彼が避ける方法は無かった。

「終わったな……。」

「ダンテさんっ……！」

「You shall die。」

「っ……？」

その声が聞こえたと同時に。

ダンテの横を蒼い軌跡が通り抜け、迫るアンジェロの剛剣を真っ二つに裂いた。

…

真紅のコートを着た男が、漆黒の鎧を纏う悪魔に押されている。そして男の持っていた刀が弾き飛ばされ、それは宙を舞った。

同時に勝手に見ているだけだった体が動いた。

”アレ”とまったく同じ姿をするその刀を見て、動かすにはいられなかった。

最高点に達したと同時にその刀を掴み、呟きかける。

「今の状況、分かるな？ …その姿で、できんとは言わせんぞ。」
『…OK』

彼の視界が捉えたのは、居合いの態勢を取る鎧の悪魔。

「忌々しい姿だ…一閃で散れ。」
『Dimension Slash』
「You shall die」

そして閻魔刀から放たれた一閃は、ダンテの以前使用した魔力刃とは比べ物にならない大きさだった。

色も深い蒼で、速さも桁違い。いや、速さは分からなかった。

何故ならダンテと違い、魔力刃が『見えなかった』から。

それは本体を見せずにただ蒼い軌跡を残し、瞬時に鎧の悪魔アンジェロの剛剣を真つ二つに裂く。

先程までは弾かれてばかりだった閻魔刀の攻撃が、たった一撃にして魔界騎士の剣を切り裂いたのだ。

そしてそれだけでは終わらず。

閻魔刀を握る男は、アンジェロが反応する前に次の攻撃を行っていた。

それはアンジェロを囲む様にして展開された八つの蒼い魔力刃。遠距離型の、半自動攻撃。

「穿て幻影。」

『Sword Storm.』

アンジェロの周りに設置された幻影の剣は、その声を合図に一斉に襲い掛かる。

『ガアッ、アア…!』

そして全ての剣が黒き鎧を貫いた。
その数瞬後にはガラスが割れる様に剣は崩れ落ちたが、アンジェロは苦しそうにもがく。

やがて崩れるようにして、アンジェロは消え去った。

「なっ——！　だ、誰だ！？」

悔しそうに周りを見渡すレン。
しかし辺りに目ぼしい者はいない。

さっきの男は風のように消えており、そこには闇魔刀だけが残されていた。

「レン…もういいわ。行きましょう。」
「でも！　こんなの納得…「待てよ。」…ああ！？」

地団駄を踏んでトリッシュに反抗しようとしたレンの会話に、強引に割り込んだのはダンテ。
機嫌を悪くしたのか、子供とは思えない目つきでこちらを睨むレン。

そこには既に、先程までボロボロにされていたダンテが立っていた。
こちらに銃と、その碧眼を向けている。

「納得いかねえのはこっちだ。話してもらっぜ。」

「一回しか言わないわ。良く聞いてね。」

「…。」

そして今度こそ口を開き、彼女は言った。

「私達の目的は、魔界の帝王【ムンドウス】を復活させる事。」

「…What? 世界征服とか考えてんのか?」

「征服…とは違う。けれど、似たようなものなのかもね。」

「…どういう事だ?」

その質問に、一度目を閉じて思案するトリツシュ。

そして数秒後には、はつきりとした口調でこう言った。

「魔帝を…ムンドウスを倒して、魔界を支配する。そして、悪魔を滅ぼす。徹底的に、例え私自身も滅ぼされたとしても。」

「…その考え方は間違ってる！ 力づくで支配するのは、人のやるべき事じゃない！」

「間違ってたとしても…これ以上、人を死なせないためにも。」

その言葉を最後に、トリツシュとレンは一瞬にして姿を消した。

その場に残されたのは、無残な死に方を遂げた魔導師や破壊され

た建物。

トリッシュが消えたと同時に悪魔の群れも消えており、スバル達
フォワード陣は訳が分からず混乱していた。

張り詰めていた緊張の糸が切れ、大きく溜め息を漏らすダンテ。
そして小さく小さく、他人には到底聞こえない声で呟いた。

「何で、ああなっちゃうのかね…なあ、バージル？」

振り向いた先にあつたのは、地面に放られていた闇魔刀。

ダンテは自嘲気味に笑みを浮かべ、その落ちている方に向かって
歩いていった。

…

「ダンテさん？」

「ん？ ああ…悪い。考え事しちゃってた。」

ふと現実意識が戻り、苦笑するダンテ。
フェイトはそんな彼を不思議そうに見ている。

「六課も悲惨だな…あの襲撃のせいで隊舎もボロボロだ。」

「ですね…。辛うじて中心施設は破壊されてませんが、被害は大きいです。」

「守りきれなかった…ハハツ、情けねえよな。最強の悪魔狩人が魔界騎士に負けちゃうなんてな。」

「でも…あの時はダンテさんが戸惑ってただけです！ 落ち着いて対処できてれば…！」

「それも実力の内だ。そんな甘い考えじゃ明日にや死ぬぜ？」

「…はい。すみません…。」

そう。

確かに戸惑っていたとは言え、ダンテは事実上敗北した。

何者かの介入でアンジェロは消滅したが、それでも続けていればどうなっていたか分からない。

今のダンテには、その事しか頭に無かった。

『守りきれなかった』という現実が、彼を支配していた。

そして、再び敵として対峙する事となった相棒トリッシュ。

現れた召喚士レン。彼に召喚された魔界騎士ネロ・アンジェロ。極め付けは、自分しか扱えないはずの闇魔刀を操った男。

謎は深まるばかりであり、ダンテには当然理解できそうもない。

「何て言うんだろうな…。」

「？ 何がですか？」

「…心つてのは、悪魔も人間も変わらないんだと思つてよ。」
「…確かに。そうかも知れませんが、でも…。」

そこでフェイトは一旦言葉を区切り、ダンテの方に向き直る。

その瞳で、一心に彼の目を見続ける。

「人には人にしか分からない、人にしか共有できないモノもあります。」

けれど、例え悪魔であつたとしても。きっと、何か繋がるハズなんです。

今はあの人が敵だつたとしても…いつか、いつかきっと。

もう一度、二人きりで話せるハズですから。そして、その時に分かるハズです。

何が違つたのか、何が一緒だつたのか。

護るべきモノのために戦つたという事が、共通するなら。」

そう言つて微笑んだ彼女が、一瞬あの二人と重なる。

だがダンテは怖かつた。

その笑顔を見せてくれた者達は、ダンテの前から去っていく。

母も、トリッシュも。前者は自らと兄を庇つて命を落とし、後者は自分達の目的を果たすために彼の前から姿を消した。

「ダンテさん…?」

「フェイト…。」

そして次の瞬間。

ダンテは半ば強引に、彼女の体を抱き寄せた。
強く強く。もう、この笑顔を無くさせないためにも。

一瞬強張ったフェイトだったが、静かに瞳を閉じて力を抜く。
そして今度は自身の両手を、彼の背中に回す。

「どうしたんですか…？」

「もう、失くさせないさ。」

「え…？」

「その笑顔を見るのは三回目だ。」

もう、傷つけさせない。泣かせない。

その笑顔だけは、守り抜いてみせる。

誓ってやつてもいいぜ。」

「…あはは。じゃあ、誓ってもらおうかな…？」

もう、彼女を苦しませない。

彼女だけではない。トリッシュにしてもそうだ。

きっと、連れ戻してみせる。彼はそう誓った。

それが、フェイトへの依存という事を知らずに。

M i s s i o n ・ 1 3 〈トリック〉（後書き）

増えた謎。消えない過去。

それは時に人を苦しめ、時に人を救う。

解放される事の無い魂の呪縛は、世界をも巻き込む。

運命に身を任せるべきか。否か。

Mission・14 〈近寄る悪夢〉

昼間なのに辺りは暗い。

崩れかかった家や折れた電柱などが散乱し、まともに歩けるスペースすらも無い。

そんな殺風景の中に、一際目立つ物が一つ。

斜めになったネオンの看板は、Dの文字が点滅している。

一つだけ形を保っている、《Devil May Cry》という看板が掲げられた店。

それを、男は見ていた。

「ここか…。」

扉の前に立ち、思い切り蹴る。

当然なのか異常なのか、男の蹴り一発で扉は吹き飛んだ。

中は埃だらけ、所々に蜘蛛の巣がある。

一ヶ月近く使っていないのか、物が散乱したままだった。壁には数々の不気味な何かが飾られてある。

そして男の視線の先には、一振りの大剣。

ダンテのリベリオンと比べれば若干短いが、それでも大剣という

部類には十分入る。

その剣は、無造作に床に突き刺さっていた。

「…アミュレットは無いか。だが、仕方ない…。」

周りを見渡し、そう呟く。

そのまま大剣を荒々しく抜き、右手だけで持つ。

「親父の力への布石…『フォースエッジ』。あとは…アミュレットだけだ。」

そして軽く横薙ぎ。

その動作の流れるままに背中に納める。当然、鞘など無い。素で背負っているのだ。

「あの時の『姿』…あれが、親父の真の力らしいな。」

最後にそう呟き、店を出る。

既にボロボロのフードは纏っておらず、蒼いコートが周りの風景から彼を浮かせていた。

ダンテと同じ銀髪を後ろに撫で付け、その碧眼は汚れる事無く。背負った大剣フォースエッジは、蒼い魔力を帯びている。

その男の名は【バージル】。

かつてダンテと剣を交え、魔界に堕ちて行った『半魔』。

そして、ダンテの実兄に当たる男だった。

…

『Spiral Swords』

「あつ、しまつ——！」

「BINGO． だな。」

「うっ…はあ〜！」

ウイングロードを蹴り出そうとしたスバルの周囲には、既に展開された8枚の魔力刃。

スバルはがつくりとうなだれ、ダンテは遠くから苦笑する。

一対一のガチンコ勝負。

もっとも、スバルが本気であってもダンテはどうか知らないが。

「駄目だな。まだ動作が遅い、だから展開されるんだぜ。」

「は、はい…。でも、やっぱり凄いですよね…。」

「？ 何がだ？」

「ダンテさんと、そのデバイスですよ。そんな技を出すのに2秒もかからないなんて…。」

『お褒めにあずかり光栄です。』

「あはは…しかも丁寧ですし。」

マツハキヤリバーも閻魔刀を称え、ダンテは満足そうに頷く。

いくらスバルと言えど、一対一では勝ち目は無い。

確かにダンテは魔法に関しては初心者に近いが、内包する魔力ははやてをも凌ぐ量。

はやての顔が引き攣っていたのは、今でも鮮明に覚えている。

『マスター、今日は確か…。』

「ああ、分かってるよ。悪いなスバル、ちょいと野暮用だ。」

「え？ あ、はい。今日は付き合っていたいてありがとうございました！」

「そんなかしこまんなよ。今度はティアナも誘ってとけ。」

「はい！」

「じゃあな。」

ヒラヒラと手を振り、訓練場をあとにする。

「…やっぱり、甘いな。甘すぎるもんだ。」

やれやれといった表情でそう呟き、小さく溜め息を漏らす。

「甘いつて…誰がですか？」

「うおっ！ 何だ、フェイトか。」

「あはは、驚かせちゃいましたか？」

顔を覗きこんできたのはフェイト。

前触れも無かったので、一瞬驚くダンテ。そんな彼を不思議そうに見ている。

頭の後ろで手を組み、うーんと唸りながら歩く。
ますます不思議である。

「どうかしたんですか？ 何か悩み事でも…。」

「いや、何でも無いさ。それに、話したからどうってワケじゃねー
しな。」

「そう、ですか。協力できる事があれば、いつでも言って下さいね
？」

「ああ、分かってるよ。」

そう。

彼女に言っ解決するはずが無い。

ダンテが『甘い』と言っている事は、フェイトにも当てはまるの
だから。

その『甘さ』は、本気の殺し合いをした事が無いという事。

例え相手は殺すつもりで来たとしても、彼女らは実力者なのは違

いない。

だがその力を知らず知らずの内に過信しすぎてしまい、今回でも『非殺傷設定』で貫き通そうとしている。

確かに人を殺す、傷付ける事はいけないのは知っている。
だがそれを重んじすぎる故に、自らを滅ぼす事になってしまう事もあるのだ。

ダンテは皮肉に笑う。

あの兄が言った言葉とほぼ同じ意味の事を、自分も彼女らに感じているのだから。

「あのクソバカの言ってた事も、あながち間違いじゃないかもな…。」

「？ 何の事ですか？」

「いいんだよ、ただの独り言だ。」

そう言って笑う。

もちろん、いい意味では無い。寧ろ、自分を責めるかの様な自嘲気味の笑い方。

「あつ、そう言えば今日は…。」

「おったおった！ おーい、二人ともー！」

フェイトが思い出した様に呟いたのと同時に、遠くからはやての
声が聞こえる。

二人が振り返ると、後方から走ってくるはやての姿があった。

「もう、どこ行つとつたん？」

「別に？ スバルの相手をしてただけだ。」

「私はエリオとキャラの会話に混じってただけだよ？」

「今日は予定があるやる！」

「…ああ、そっぴやそっぴやだつたな。」

思い出した様に苦笑する。

「聖王教会、だっけか？」

「はい。持ち物は大丈夫ですか？」

「ああ…コイツ、だろ？」

フェイトに尋ねられ、勢い良く背中の大剣リベリオンを引き抜く。

何故か傷一つ無い刀身は、鏡の様に六課内の明かりを反射していた。

その明るさとは対照的な髑髏の装飾に、はやてとフェイトは思わず身震いする。

「魔剣リベリオン…人間界で作られた剣とは一線を画する魔剣。ほんま、髑髏の装飾以外は外見普通の大剣なんやけどなあ。」

「外見だけ、だろ？ お前らぐらいになつたら分かるハズだぜ、こ

れが発してる魔力の量。」

「…まあ、そうですね。正直言って、レリックとは違う意味で危ないと思いますよ。」

そう。

彼の使用する大剣リベリオンは、人界で作られた剣とは違う。

伝説の魔剣士スパイダの使用した剣の一つであり、ダンテから見れば父親の形見。

魔界で作られただけでなく、スパイダが使用していたこの魔剣は常軌を逸する魔力を放っていた。

無論、使用していない状態でもだ。

その事に関係あるのだろう。

ダンテは一人そう予想していた。

「ほな、そろそろ行こか。」

「うん。なのははどうするの？」

「先に行ってもらっとるんよ。今回は、カリムも大事な話やって言っとったし。」

「そうなんだ…。」

「ま、そういう話はヘリの中でだ。早く行こうぜ？」

「ダンテさんがそれを言うか…まったく。」

相変わらず自己中心のダンテに、はやては呆れた溜め息をつく。
フェイトも相変わらず苦笑。ダンテは反省する様子すら見せていない。

しかし結局、最後はダンテの一声で会話は終了。
一行は《聖王教会》へと向かう事になった。

…

「Hey Hey Hey Hey！　こりゃあ予想以上だ！」
「そ、そうですか…。」

「すみません、騎士カリム。…ダンテさんっ！」
「おっと失礼。つい、な。許してくれよシスター？」

自分の前に座るブロンドの女性に、ダンテは久々にテンションが上がったのか口笛を吹いている。

そのブロンドの女性とはフェイトでは無く。
彼女よりも大人びた雰囲気、小さく苦笑する姿が余計にダンテの好みにはまった。

何故か彼の隣で、フェイトはつまらなさそうだが。

その女性こそが【カリム・グラシア】。

今彼らがいる《聖王教会》の長でもあり、協会が持つ独自の戦力
《教会騎士団》に属する騎士の一人でもある。

それに加え六課最大の後ろ盾ということもあって、大分深い交流がある様だ。

しかしダンテが唯一気に入らない物が一つ。
それ、と言うよりその”人物”は、平然とカリムの横に座っていた。

女性の様に長い緑髪。

それがダンテの第一印象であり、第二印象の『軽さ(?)』から
一気に彼が嫌いになった人物だ。

「僕は、嫌われているのかな？」

「どうだろうな。」

「はは、凄い威圧だね。」

【ヴェロッサ・アコース】。

それがその男の名である。

局内凄腕の査察官であり、カリムの義弟。

雰囲気はやりわりそのものだが、どことなくダンテは嫌いらしい。
ただ先程の会話でも分かる様に、ダンテの発する威圧に動じない
所ははやても驚いていた。

「では、そろそろ本題に入りましょうか。」

「そやな。…ダンテさん、出してもらえる？」

「ん？ ああ、そうだったな…ほら、よつと。」

珍しくボーッとしていたのか、はやてに名を呼ばれて我に返る。

来る前の様にリベリオンを片手で引き抜き、机の上に載せた。

しかし相当重いのだろう、机が軽く軋んでいる。

はやてはその重さよりも、それを片手で軽く振り回すダンテを改めて凄いと思った。

その大剣を直視し、カリムは驚いた様に目を丸くする。

「これは…！」

「？ 何かあったんか？」

「…やはり、予想通りです。この大剣が発する魔力は、悪魔のモノと酷似しています。」

「だろうな。なんたつて悪魔が使つてた剣なんだからよ。」

「そう言えば、そうですね…。」

「それと、だ。」

一度その会話を打ち切り、ダンテが静かに視線をヴェロッサに向ける。

「動物くせーんだよ。ネコ科の奴らにいいのはいないぜ。」

「…何の事かな？」

「ハハッ！ 言つとくが狼何匹連れて来ようが、俺は全員可愛がれるだけの愛情を持つてるんでな。」

「…やっぱり、ばれてたか。」

その会話を当初は理解できず、首を傾げるはやて・フェイト・なのは。

しかし『狼』という単語を聞き、なるほどといった表情で何度か頷く。

カリムはヴェロッサに白い目を向ける。

「…すまない、続けてくれ。」

「以後、気をつけるように。いいですね？」

「…ああ、分かってる。」

参ったという様に両手を挙げ、降参のポーズ。
そんな彼を満足そうに見ているダンテに、カリムは心の中で驚いていた。

今ヴェロッサが使っていた古代ベルカのレアスキル『無限の獵犬』ウンエントリヤークト
は、目視どころか魔力探査にすら掛かり辛いステルス性能を持つ。
しかもたった今までそれらが配置されていたのは『部屋の外』。

ダンテはそれが発する微量の魔力を肌で感じ取り、それだけで正体を見破ったのだ。

「しっかし…馬鹿みてえな数だったな。途中から数えるのをやめちまったぜ。」

「すみません、失礼な事を…。」

「気にすんなよ。さ、話を続けてくれ。」

ダンテの女性（だけ）に対する配慮に、カリムは優しく微笑む。

そして再び口を開きかけた時だ。

ダンテが急に立ち上がり、机に置いてあったリベリオンを握る。

「ダンテさん…？」

「来るぜ、厄介なのがよ…！」

「…え？」

彼がそう言った数秒後だ。

その場のダンテ以外の人物が、同時に背筋が凍る様な感覚に襲われる。

禍々しい魔力。

先日の魔界騎士ネロ・アンジェロとは違った、何もかもを飲み込む様な。

そして躊躇する事無く、ダンテはその部屋の窓に向かって走り出す。

「ダッ、ダンテさん！？」

なのはの静止も虚しく、そのまま窓を蹴破って外へ。

先程まで明るかった空も、ドス黒い暗雲が辺りを覆っていた。それが余計に、彼女らの焦りを増大させる。

そしてそれは現れた。

何も無かった地面から、溢れ出る様に。

異様な姿の悪魔が。

M i s s i o n ・ 1 4 〈近寄る悪夢〉（後書き）

泥に混ざって見えるのは、幾多もの白骨。

全てを飲み込むその悪魔は、教会という聖なる場所に現れる。

そして解き放たれる『悪魔への昇華』。

半人半魔である彼の、もう一つの姿。

己の血のままに従う、”魔”の姿を。

Mission・15 〈預言〉

その異質な存在は、その場のダンテを除く全員を恐怖で支配していた。

スライム状に広がる液体に入り混じっているのは数多の人間の白骨。

真ん中には固い装甲に覆われた本体。

魔界の上級悪魔【ナイトメア】。

「何があつたんですか!？」

声を張り上げてカリムを庇う一人の女性。

【シャツハ・ヌエラ】、彼女も教会騎士団の一人である。

そのシャツハの手をどけ、前に出るカリム。

「この悪魔は……。」

「ああ、上級悪魔、だ。それも、あの火蜘蛛より厄介な奴だな。」

「火蜘蛛って、あの……!」

「そついう事だ。下がってるよ。」

右手に持ったりベリオンを軽く横薙ぎし、目の前に構える。
彼が一人で戦うのは当然の事だ。雑魚相手ならまだしも、こんな
敵を相手になのは達を戦わせるわけにはいかない。

しかし今日の彼女達は違った。

「何馬鹿な事言ってるの、ダンテさん。」

「ああ？」

「そうですよ！ いつもいつも一人だけで…今日は私達も戦います
！」

「いや、だからいいって…。」

「空からなら、大丈夫でしょう？」

「…おいおい、何言ってるんだよ。」

振り返ると既に、隊長陣三人はバリアジャケットを身に纏っている。
る。

当然、手には各々のデバイス。

そんな彼女らを見て、ダンテは深く溜め息をつく。

「あのなあ、そんな甘い事じゃないんだよ。悪魔狩りってのは。」

「でも…！ それでも退きません！」

「言っとくが、そういうプライドってのは何の意味も成さない。百
害あって一利なし、特に悪魔相手ならな。」

そう言って駆け出す。

「さあ、お前もあの馬鹿と同じ類か!？」

目の前に迫ったのは、ナイトメアの体から放たれた無数のミサイル。

何故悪魔がミサイルを？　とても言いたくなるだろうが、今はそんな状況ではない。

寸前でそれらを全てかわし、同時に高く跳躍。

そのまま真下に向かって兜割り。

しかしその装甲はファントムの骨格と並ぶ程強固で、リベリオン渾身の一撃でも弾き返される。

その反発力に逆らわず、その力を利用して再び高く飛ぶ。
だが隙間はどこにも無い。再び迫るは無数のミサイルだ。

一瞬リベリオンを軽く浮かし、コンマ数秒で腰のホルスターから

エボニー・アイボリー
拳銃を抜く。

そして引き金を引く。銃口から放たれた弾丸は一寸狂わず全てミサイルに命中、これまた寸前で攻撃をかわしきる。

そして浮いたままだったりリベリオンを握り、そのまま着地。

この一連の動作時間、約三秒であった。

「固いのは相変わらずか…。さて、どうしたもんかねえ…。」

ダンテは近付いてくる小さな悪魔を切り払いながら呟く。

今彼が言った通り、ナイトメアの装甲の固さは前に戦った時とほぼ同じ。いや、寧ろ上がっているかも知れない。ファントムの弱点の一つである尻尾を真つ二つに斬ったりベリオンが弾き返されるのだから。

当然リベリオンが弾かれるのなら、エボニー・アイボリーも持つての他。従来の銃を遥かに凌駕する性能と言えど、それは対人の場合のみ。

正直言つて、完璧な策は無かった。

「ダンテさん！ 思いつきり飛んで下さい！！」

「ああ？ ……つて、おま——！！」

不意にかけられた声に振り向くと、視線の先にはなのはの姿。

「デivainバスター・エクステンション！！」

二発のカートリッジをロードした、彼女の持ち味の砲撃魔法。従来のデivainバスターをも凌駕し、貫通性能にも優れた大技だ。

顔を引き攣らせながらもそれを寸前で避け、冷や汗を拭うダンテ。しかし『決まった』と笑顔を見せるのに対して、彼の表情が晴れる事は無い。

立ち上る砂煙が晴れた時、なのはの表情は更に引き攣った。

同時にそれを見ていたはやとフェイトも同様の反応を取る。

「そん、な…！」

「だろ…うな…いい威力だった、が。あいつの”本体”に直接当たって無いのさ。」

そこには先程と変わらずナイトメアが存在していた。

それも装甲は欠ける事無く、液体もすぐに元通りになっている。

「なのはどいてッ！」

「フェイトちゃんっ!？」

「馬鹿！ 下手に近付くな!!！」

呆然としていたなのはの横をすり抜け、接近戦に入るフェイト。

持っていたバルディッシュはリベリオンにも劣らぬ大剣型に変化しており、それを高く振り上げる。

「撃ち抜け雷神！」

その掛け声と共に、魔力刃が伸びる。

「ジェットザンバアアアッ!!！」

閃光の魔力刃は的確にナイトメアの本体に。

しかし、当然その装甲を断つ事はできなかった。

「ぐっ、うっっ——！」

激しく火花を散らした後に、バルディッシュの刀身は碎け散った。同時にフェイトも反動で飛ばされ、液体の上に投げ出される。何とか姿勢を制御したが、それでも着地は免れなかった。

バチャリとやはり泥に浸かった様な音。

フェイトはその感覚に眉を顰める。

そしてすぐにでも跳躍しようとした時だ。

自身の周囲の泥から何かが自分を囲う様にして泥が盛り上がる。ほんの一瞬の出来事だった。

「なッ——！？」
「フェイトッ！！」

最後に彼女が聞いたのは、自分の名を呼ぶダンテの声。

そして抗う事もできず、成すがままに『悪夢の世界』へと引きず

り込まれていった。

…

悪夢。

とても嫌な、思い出したくない過去。

「何で、ここに…！？」

バルディツシュを握っていた右手の力が抜け、愕然とするフェイト。

目の前に立っているのは、ここにいるはずの無い男【ジェイル・スカリエツィ】と、その配下の戦闘機人【トーレ】と【セツテ】。

間違いない。

これは、彼女が体験した「ゆりかご」起動後の決戦である。

「そんな、嘘だ…！」

『嘘では無いよ。この世界こそ“悪夢”だろう？』

「違うッ！ これは、夢……！」
『だから言っているだろう？ ”悪夢”だと。』

スカリエッティが話す。

しかしその内容は、実際体験した時と違う。
まるで別の自我を持っているかの様な。

そして、人では無い姿へと変わっていく。

トーレも、セツテも。

いつの間にか周囲にいた、本人とは思えないなのは達も。

皮を剥いで出てきたのは、本来魔界にしか存在しない悪魔【ノーバディ】。

全ての人間がそれへと変化し、フェイトは逃げ道を失う。

「うつつ……！」

『さあ、怖くないよフェイトちゃん。』

怖くないよ怖くないよ怖くないよ怖くないよ

怖くないよ怖くないよ怖くないよ怖くないよ

怖くないよ怖くないよ怖くないよ怖くないよ

コワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨ

コワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨ

コワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨ

コワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨ

コワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨ

コワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨコワクナイヨ。』

「嫌だああああーっ！！！！！」

そうして一斉にノーバディ達がフェイトに飛び掛った時だ。

「ああ、怖くないね。寧ろ大歓迎だ！」

その声と共に、飛び上がっていたノーバディ達が一斉に撃ち落とされる。

マシンガン並みの速さの連射は一寸違わずノーバディの脳天に直撃。文字通り一撃で沈めていく。

「ハッハアツ！！」

攻撃は斬撃では無く打撃。

腕には業炎を纏った籠手を詰め、反撃する隙を与えず顔面を打ち砕く。

「これで最後、だ！」

止めは高く振り上げられた足を思い切り振り下ろす踵落とし。妙な奇声を発したと同時に頭部が潰れ、塵と消えていく。

僅か三分足らず。

肉弾戦で圧倒的多勢を殴り伏せた男は、静かにフェイトを担ぐ。もちろん、業炎の籠手《イフリート》をはずしてだ。

「まったく…無茶しやがって。」

「…？ ダン、テ、さん…？」

「今は喋らなくていい。さあ、寝てろ。」

「…うつ…！」

辛うじてフェイトが目を開き、その名前を呟く。

悪夢の空間の中で、その存在だけは輝いて見えた。

「それじゃあ、行け。…つつても、聞こえねえか。」

気を失ったフェイトを見て、一人そう苦笑する。

左脇にはフェイトを抱え、右手には反逆の魔剣を持ち。

「目を覚ますぜ、悪夢なんてまっぴらごめんなんでな！」

そう言って地を蹴り、高く跳躍。

魔剣を上に向けたまま、吸い込まれるようにして悪夢の空間から消えていった。

…

「アクセルシューターッ!!」

「シュワルベフリーゲンッ!!」

二色の球体が同時に放たれ、同時に着弾。

しかしその攻撃は通る事無く、ナイトメア本体から反撃を許す。

今この場は、応援に駆けつけたヴィータ・シグナムとなのはがナイトメアと交戦。

はやてとシャッハはカリムの護衛に当たっていた。

「クッソ! どうなってるんだよ、すげえ固いじゃねえか!」

「私とヴィータちゃんでも駄目か…。」

打つ手が無いとはこういう事だろう。

この上級悪魔相手に、実質三人は歯が立たなかった。今の所目立った外傷は無いが、それでも消耗戦だ。長く戦い続ければ勝ち目は無いのは彼女らが一番良く知っていた。

そして『ダンテがいない』という事が、更に不安を増大させる。唯一悪魔と対等以上に渡り合えた味方が、今この場にはいない。それだけでも、既に精神面で負けていた。

だがこれも運命か。
絶望が支配した時、希望は現れる。

「待った！ あれって…！」
「光って、る…？」

なのはが齒軋りした時だ。

急にナイトメアが激しく動き出し、液体の一部が輝き出す。
輝く、という表現は間違っているかも知れないが、確実にそこだけ
は変化していた。

そして何かが液体を突き破って空に飛び上がる。
その姿を見て、絶望は希望へと一瞬で姿を変えた。

「ダンテさん！！」
「テストロッサも一緒だ！」

歓声を上げるのはとシグナム。
救世主が現れたといっても過言では無かった。特に、今の状況で
はだ。

綺麗に弧を描き、なのは達の傍に着地する。
担いでいたフェイトをゆっくりと降ろし、小さく笑う。

「よ、良かったっ…！ もう、駄目かと…！」

「馬鹿言っなよ。って、ギャラリーが増えたみたいだな。」

軽く首を鳴らし、シグナムとヴィータの方を見るダンテ。

二人は目が合うと、呆れた様に苦笑する。

「ちえっ、生きてたのかよ。」

「まったくだ。だが、うるさいのがいなくなったら静か過ぎて平和ボケするかもな。」

「おいおい、ひどい事言わないでくれよ？ ヒーローってのは遅れて登場するもんだろ？」

「自分でヒーロー言っな！」

「同感だな。」

「ハハッ、ジョークだジョーク。」

ヴィータは低い位置からダンテを睨みつけ、シグナムは目を瞑って頷く。

そんな二人に、いつもの笑顔。守護騎士の二人も、それを見て苦笑する。

状況は振り出し、いや、少しこちらが有利になった。

しかしダンテは不適に笑い、リベリオンを強く握る。

「ダンテさん？」

「一つ、いい事が分かった。」

「いい事…?」

「ああ。コイツの倒し方、だ。」

ダンテのその言葉に、なのは達は過敏に反応する。

打つ手無しのこの状況で、ダンテがその策を見出したのなら。その方法の可能性は高い。

ヴィータとシグナムまでもが、ダンテに視線を向けていた。

そんな彼に、カリムが語りかける。

「悪夢を終わらせる方法を、見つけたのですね?」

「ああ…簡単な事だ。矛盾してたのを気付かない俺もバカだったが。」

「矛盾…ですか?」

「そう、矛盾だ。」

その言葉を復唱するなのは、笑みを浮かべながら話す。

「本来コイツを倒すには専用の結界が必要なんだ。」

「でも、ここに結界なんて…!」

「ああ、無い。こいつは結界の中でしか活動できず、結界が発動した時に弱点を見せる。それが全部、無いだろう?」

「…だからどうだと言うのだ? その話を聞いていれば、結界が無ければやはり倒せないだろう。」

「そこだ。じゃあ逆に、何でコイツは結界が無いのに活動してる?」

その質問に、シグナムは口を閉ざす。
返答のしようが無いからだ。

「見てりやコイツは、段々と大人しくなってきた。つまり、無理矢理誰かが呼んだのさ。前のガキみてえにな。」

先日の件で、ダンテと魔界騎士ネロ・アンジェロを戦わせた敵「レン」。

彼は自身の事を《召喚司》と言い、実際にアンジェロを召喚してみせた。

ならば今回、この場に普通ならばナイトメアが現れる事は不可能だ。

「だからそれをできるのは……って言いたいんだろ？」

「ああ、良く分かってんじゃないか。」

「やけど、それやったら何も解決してへんで！」

「いいや、解決する。あと少しでな。」

そう言って、一人前に歩き出す。

呼び止める事もできず、それをただ黙って見守るはやて達。

「あー…あのな。こっから先はR指定だ。」

「R指定って、こんな時に何を…！」

「本当の事さ。少しばかりインパクトが強いんでな。」

そう言つて、リベリオンを空高く掲げる。

掲げた時だ。

突然彼の身体を、真紅の魔力が覆い始める。

紅く紅く、全てを飲み込む悪夢にも取り込まれない様な威圧。

そして、ダンテの身体全体を魔力が覆った瞬間。

彼と同じ真紅の魔力を纏った雷が、ダンテ目掛けて落ちる。

同時に激しい風圧。身構えなければ飛ばされてしまう程の風。

フェイトを庇いながら何とか堪えるのは達。

やがて風圧が止み、辺り一面を覆っていた砂煙も晴れる。

しかし次に彼女らが目を開けた時、そこにダンテの姿は無かった。

「何…あれ…？」

「悪、魔…なのか…？」

そこにいたのは一体の悪魔。そうとしか見えなかった。
少なくとも、彼女達には。

鎧の様に厳格な雰囲気を漂わせる骨格、刺々しい手足は辛うじて
人と似た形を留めているだけ。

頭部は僅かに銀の髪、胸には大きくひび割れた様な痕。

最早真紅のコートは身体と一体化し、右肩には自身と同じ真紅のオーラを帯びた魔剣リベリオンを担ぎ。

押しつぶされそうな威圧感と、何か分からないという謎から来る恐怖。

今まで見てきた悪魔とは一線を画する存在。

その悪魔はくるりとなのは達の方に振り向き、両手を小さく上げてみせる。

人とは思えない顔で、あのニヒルな笑みを浮かべて。

『よう、全く予想通りのリアクションだな。』

そのエコーのかかった声は、間違い無くダンテ自身だった。

「ダンテさん、なんですか!？」

『ああ、俺だ。つっても、信じられねえだろうがな。』

「ダンテって言ったって、その姿は丸つきり悪魔じゃねーか!」
「ヴィータ!」

ヴィータがもつともな意見を言い、シグナムはストレート過ぎる彼女を戒める。

しかし当のダンテ本人は、慣れた様子で言った。

『ああ、悪魔そのものだ。言っただろう？ 俺は『半魔』だって。』
「…なるほどな。その姿は、悪魔サイドの方って事やる？」
『物分りが良くて助かるね。その通りだ。』

はやてが冷静に言った意見に、ダンテは満足そうに頷く。
もっとも、笑っているのか分からない程強面だが。

『さて、これを長い間やるのは中々しんどいんでね。早めに終わらせるぜ…。』

『終わらせるって…どうするんですか！？』

「そうだぞ。魔力うんぬんでどうにかできる相手でない事は我らより貴様が一番知っているだろう。」

『知ってるよ。もちろんゴリ押してワケじゃあ無い…つつても、力任せな所はあるがな。』

ダンテは最後にそう言い、彼女達から視線を戻す。

再びその視線は、前方のナイトメアへ。

一方カリムはダンテの姿を見て、自身の持つ預言の書に書かれていた内容と酷似している事に気付いていた。

その事をはやてに知らせ、すぐにはやてはカリムの下に走ってくる。

カリム・グラシアの持つ古代ベルカ式の希少能力『プロフェーティンシユリフテン預言者の著書』

。それはその名の通り、簡単に言えばこれから先の未来の出来事を

予知する能力。

もつとも、完璧に当たるというわけでは無い。しかし、現六課もこの預言の内の一つが起こりうる可能性があるとして組織されたのだ。

その書に書かれた内容。

それは一度、かの有名な『JS事件』にも関係する預言の前に書かれていた事。

内容はその時の時空管理局は愚か、カリム自身でさえ信じる事のできない記述だった。

それ故に、今までそれ程までに危惧してはいなかったのだ。

たった一ヶ月程前、悪魔、そしてダンテが現れるまでは。

「預言つてのは、こんなにポンポン当たってええんかね…。」

「分からないけれど…今、実際私達は目の前にしているわ。この預言の”序章”を。」

そのページに書かれていた文章を読むカリム。

はやてはナイトメアと対峙するダンテを見据えながら、その内容を聞いていた。

魔の住人は具現す。

人の肉体を喰らい魂を貪り、地獄へ引きずり込まんとせん。
成す術無く人は喰らわれ、仔は泣き親は震え皆伏して祈るのみ。

英雄の血を引く真紅の魂は同胞に仇なし、人の為己が剣を振るう。
対を成す蒼炎の魂は再び力を求め、魔に昇らんとする。

そして漆黒の翼は復活の三眼の魔を統べし帝に再び反旗を翻し、
その因縁を断つべく己が名の魔剣を振るう。

「これが、預言…。」

「そして、今私達は見ている。『真紅の魂』を…！」

二人は前を見据える。

ナイトメア
悪夢の前に立つ悪魔を。

『さあ、そろそろ時間だ…！』

軽く膝を折り、リベリオンを地と水平に構える。

その切先を、ナイトメアの本体に向けて。

その足で地を蹴る。

余りにも力強いそれは、たった一蹴りで間合いを詰め切る。
リベリオンの切先を向けたまま。

『Break Down!!』

突きの一撃《ステインガー》は、一切力を弱める事無くナイトメアの装甲に直撃。

真紅の魔力を帯びた魔剣は、その硬さを増していた。

切先と装甲がぶつかり、激しい火花が散る。

しかしその装甲はいかなる刃も通さない。たとえそれが魔剣であったとしても。

だがそれは、通常の魔剣だからこそ通じる硬さだった。

「砕けたっ…!?!」

『高速で敵を突き刺す剣撃』、それがステインガーの特徴。

ダンテの超人的な脚力と俊敏さを活かしたリベリオンでこそできる突きであり、一点に集中する力は破壊的な威力を持つ。

その技を彼は、魔人の状態で行ったのだ。

無論、リベリオンも持ち主の魔力に比例したまま。

ナイトメアの装甲は一気に砕け散り、中にあった発光する球状のコアが露出する。

ダンテは弾き返された反動に逆らわず、その力を利用して空中で

態勢を整える。

腰のホルスターから二丁の拳銃を抜き、銃口をナイトメアに向け。

その両手を真紅の魔力が覆う。

以前見た時よりも遥かに凄まじい、空間が歪むかの様な。

『幕引きだ!!』

地に足が着いたと同時に銃口から放たれたのは、弾丸では無く魔力弾。

それも、魔導師が使う様な物では無い。

純粹に彼自身の魔力を圧縮し、弾状にした物。

だが余りにも魔力は大きく、最早弾の原型は留めていなかった。そう、まるでなのは達の放つ『砲撃魔法』の様な。

…

「凄い…!」

「だが、これは…!」

なのは達は目前の光景を見て啞然とする。

着弾寸前に危険を察知した彼女らは飛び、巻き添えは免れていた。もちろん爆風の影響は十分あり、堪える事しかできなかったが。

しかし今彼女らが見ているのは、先程とはまったく違った景色だった。

一つの大きな射線軸。

それは遙か前方まで続き、地が簡単に抉られている。

そう、山まで吹き飛ばし。

辺りの木々は燃え盛り、余計にその姿を異質に見せていた。

業炎の中に佇む、一体の悪魔を。

「預言は…預言は、間違っていなかった。」

「…やよな。ただ、下手すれば…スカリエッティの時より、大変な事になるかも知れん。」

「そう。それこそ、管理局が壊滅する程度のモノじゃない。」

カリムは『真紅の魂』を見つめ、こう言った。

「世界が滅びかねない…この預言は。」

預言は間違いでは無い。

それは、世界を破滅へと誘う歯車が動き出した時だった。

M i s s i o n ・ 1 5 〈預言〉（後書き）

始まりは終わりへの幕開け。

それは、決められた法則である。

悪魔。半魔。そして人間。

三つ巴の戦いは、終わりへの歯車を加速させる。

その古ぼけたギアを、壊してしまう程に。

C H A P T E R 【 ? 】 『 Devil Hunter 』 E N D ・

SECOND・P L O L O G U E 〈新たな参加者〉（前書き）

誇り高き真紅の魂を持つ、英雄の血を継ぎし悪魔狩人【ダンテ】。
決して折れない心、己の大切な者のために杖を握る魔導師【フェ
イト・T・ハラオウン】。

全てを包み込み、平和だけを望む優しき魔法使い【高町なのは】。
自身の罪・運命を知り、それでも屈せず前を見据える最後の王【
八神はやて】。

ただ守りたい。そのために愛する者と決別した悪魔【トリツシュ
。

闇を斬り裂き喰らい尽くす刀を持ち、それを狂気のために振るう
右腕【デューク・ハルバート】。

消えたはずの過去を召喚し、無邪気に破壊を楽しむ子供【レン】。

運命の渦に巻き込まれた者達。

破滅への時計は更に加速し、歯車もまた激しく回り出す。

新たな『参加者』を連れて。

SECOND・PLOGUE へ新たな参加者へ

「ぐっ、がああっ——…！」

「フン、貴様に扱えるワケが無いだろう。」

「うぐっ…やはり、駄目か…！」

「大人しくその刀を渡せ。これ以上、この剣を貴様の様な下衆の血で汚すのは気に食わん。」

吐血しながら血を吐くハルバートに、容赦無い言葉をかける男。
ハルバートは苦しそうに、視線を上に向ける。

まるで見られただけで鳥肌が立つような殺気を放つ碧眼。
後ろに撫で付けられた髪は月明かりを反射し、鈍く光っている。
右手は大剣フォースエッジを握り、左手はこちらに向かって手招き。

それは今ハルバートが持っている、閻魔刀を渡せという事だ。

「まだだ…まだ私は…！」

「そうか…なら、死ぬがいい。」

「待つてバージル！」

「…？ 俺の名を知るのは、お前しかいまい。」

不意にかけられた声に、フォースエッジの切先を下ろして振り返るバージル。

彼の視線の先には、トリッシュが立っていた。

両手にはダンテのエボニー・アイボリーと似たデザインの拳銃を握って。

「俺に何の用だ。邪魔するのなら…お前もここで斬る。」

「邪魔ってワケじゃないけど…彼は私たちの大事な戦力なの。簡単に死なせるワケにはいかないのよ。」

「俺には関係無い。」

「関係あるのよ。」

その言葉に、バージルはぴくりと反応する。

その反応を見たトリッシュは、予想通りという様に笑っていた。

「ここは一つ…交渉よ。」

「断る。俺は俺のやり方がある。」

「断れないわ。言っておくけど、フォースエッジじゃあなたの力は出し切れない。」

「その程度で俺が負けるとでも？」

「ええ。こっちは”同志”がいるのよ。」

「…なるほどな。言ってみろ。」

バージルは察したのか、静かにトリッシュに言う。

無論、切先は彼女に向けたままだ。

しかし何ら臆する事無く、不適に彼女は笑って見せた…

「ミッドチルダ首都『クラナガン』」

「痛つてえ…くそつ。俺はどうなつたつて言うんだ…？」

その少年は頭を抑え、睨みつける様な視線で周囲を見渡す。

ダンテよりほんの少し濃い目の銀髪。

若者らしく鋭い瞳も、ダンテと同じ碧眼である。

黒を基調としたコートを肘の部分で折っており、異様なのはその
”右腕”。

何が異様かと言えば、肘から下を一切肌が見えない様に包帯を巻
いていた。

そう、一切見えない。大怪我でもしたかの様に。

更に背中には片刃の大剣、腰にはダンテの拳銃にも劣らぬ大きさ
のリボルバー！。

一見しただけでも、明らかに異様な雰囲気。

彼の横を通る人間は皆、気味悪がって彼を避けていた。

「ここはどこなんだ…？ 見た事も無い場所だ。」

するとあるチラシが少年の目に留まる。
歩くのを止め、それを怪訝な目で見る。

手書きで書かれた筆跡。

随分と荒々しいが、辛うじて字は読める。

そしてその内容こそが、彼を凝視させている原因だった。

「『魔の皇帝を討つための同志が必要である。』

魔の力持つ贄を捧げ、蘇らせよ。

そして討て。悪魔を統べたる暴虐無知の帝を』…？」

その文章の下には、連絡番号と思われる数字の羅列。

だが今少年が見ているのは、『悪魔』という単語である。
それを見た時から、明らかに目つきが変わっていた。

「ははっ、なるほどな…。腐れ縁、ってヤツなのか？」

そう言っ て空を見る瞳には、ある一人の男の姿が映っていた…。

「廃棄街某区域」

「……つたく、本当に勝手なんだから。」

白いシャツに腰には大量の予備マガジン。

肩に背丈と同じ程もあるロケットランチャーを背負ったその女は、小さく呟き大きな溜め息を一つ。

小さな身体とは不釣り合いな大型のバイクから降り、辺りを見渡す。

正直言つて、見渡しても何も無い。

ただ崩れかかった建物や、遠くに居場所を失った浮浪者がいるだけ。

その浮浪者達も、今彼女がいる場所には近づいてこない。

目に入っただのは《Devil May Cry》というネオンの看板。

随分と斜めになっており、今にも落ちてきそうだ。Dの文字も点滅している。

「借金取立てに来たのに……いないんじゃ意味が無いじゃない。」

扉に貼り付けられたボロボロの紙を見て、呆れた様に言う。

『An indefinite holiday .』

The guy with the business takes a shit, and wait.」

《無期限休暇。

用がある奴は糞して待つてな。》

何とも汚い言葉に、思わず呆れ返る。

「ダンテの奴、見つけたら借金上乘せするかな…ねえ、あなた達もそう思うでしょ？」

歳不相応な笑みを浮かべ、素早く拳銃を抜いて振り返る。

そこには鎌を持った亡者の様な悪魔《7・Heils》達が、うようよと徘徊していた。

しかしそれを見て、怖れる事無く引き金を引く。

弾丸は一寸変わらずヘルズの脳天を撃ち抜き、その存在を塵へと還す。

「悪魔つてのはどこにでも現れるモノなのかしら？」

そう言いながら、もう片方の手も拳銃を握る。

両手を交差させて銃を構える。

一斉に襲い来る悪魔を相手に、その女は変わり無く笑っていた…。

～第9無人世界《グリユーエン》軌道拘置所～

「…ははは。どういう考えだい？」

【何度話せば、気が済むのかしら？】

「悪いね…。あまりに素晴らし過ぎて、私ですら信じきれない…！」

暗い独房の中で、鎖に繋がれた男。

外から見れば単にブツブツと独り言をいつているだけだが、彼からすれば違った。

「私を外に出して、いいのかい？」

【あなたの力が必要な。その狂気の知能が。】

「ふふふ…ははははは！ 君もおかしい人…いや、おかしい悪魔だ。」

【おかしくて結構。おかしくなきゃ、こんな事はできないわ。】

脳に語りかけてくる女の声。

透き通った、声だけでも美人と分かるモノだ。

しかしその内容はあまりにも不釣り合いで、あまりにも変な物だった。

だがその女は知っている。

この男を満足させるのには、それが一番役立つと。

【もうすぐ、迎えに行くわ…。じっと待ってなさい。】

「ああ、本当に感謝させてもらうよ。」

…再び、混沌を齎せるチャンスくれた事を。」

それを境に通信は切れ、男は目を瞑る。

会話をするまで死んだ様な雰囲気になっていた、金色の瞳を。

そして小さく身体を震えさせ、後におかしいぐらいに笑う。

ボサボサになった紫の髪が揺れ、その瞳の焦点がずれる程に。

「そつだ…私は科学者。まだまだ名を残さなければならない…！」

その狂いきつた目が。

まるで、獲物を求めるかの様に。

「【ジェイル・スカリエッティ】の名を、世界の隅々まで行き渡らせるまで…！」

SECOND・PLOGUE 〈新たな参加者〉（後書き）

お久し振りです。VerGilです。

まず初めに、皆様のおかげで140000PV達成&第二章を始める事ができました。

日々支えてくださった読者の皆様に、深く感謝いたします。

さて、第二章PLOGUEで登場した人物達。

正直言つと、二章は賛否両論が非常に多くなると思います。

銀髪碧眼の男が”三人”。知っている人は知っているという事です。

この章からは見ての通り、オリ設定が激しくなっています。

原作イメージが崩壊する可能性はもちろん、性格の改変などもあるかも知れません。

それでもこのまま見て頂ける読者の皆様は、どうぞ暖かい目で見守ってやって下さい。

また、感想は書いていただければ凄く励みになります。今後とも、よろしく願います。

VerGil

M i s s i o n ・ 1 6 〈魂の交錯〉（前書き）

動き出す歯車。

狂い出す運命。

それをも決めた宿命。

同じ”血”に惹かれ合い、魂は交錯する。

「…で。これは面接試験か？」

「当たり前。」

「…機械相手か？」

「そうだよ。」

目の前で機械音を発するロボット（？）に、銀髪の若人は怪訝な表情になる。

こんな事は聞いていない、とでも言いたげに。

「ガジェットドローン？が三機、？が五機。」

「ロボット相手、か…。また刃こぼれするかな…。」

「…試させてもらうよ、君の実力。」

その後ろで座っていた少年が指を鳴らしたと同時に。

大型のガジェットが一気に襲い掛かる。

呆れた様に髪を掻きながら、溜め息でも吐かんばかりの表情の若人目掛けて。

しかし、その瞳は違った。

「手先は不器用なんでね…解体しかできないぜ！」

勢い良く背中の大剣を抜き、柄を捻る。

すると剣がバイクのエンジン音を鳴らし、激しく唸り出す。
まるで今にも敵を斬らせろといわんばかりに。

ガジェット？がそれを認識した時には遅かった。

そのカメラが捉えたのは、寸前まで迫る高熱を帯びた刀身だった。

「Clach!!」

薙ぎ払うように振られた大剣は、一振りにして鋼鉄のボディを切
断。

火花が散るよりも早く機体は爆散、煙が立ち込める。

若人は煙を何ら気にする事無く次のガジェット？に接近。
その戦い方は最早、常人のそれでは無かった。

ガジェット？が反応するよりも早く、左手に握っていた大口径リ
ボルバーの銃口を押し付ける。

よそ見しながら、にやりと笑みを浮かべて。

「Blast!!」

見た目騙しというわけでも無く、二つの銃口に改造されたりボルバーの弾丸はいとも簡単に敵を射抜く。

爆発する寸前にガジェット？を蹴り飛ばし、うまくガジェット？を誘爆。

リボルバーを持ったまま、手招きをする。

「こんなもんか？　なら、期待ハズレにも程があるな！」

大剣を地面に突き刺し、依然座り続けたままの少年に言い放つ。

しかしその少年は、立ち上がるうとはしなかった。

「さつきから吼えてんじゃねーぞ！」

「…？　何だお前は？」

「へっ、知らなくて当然だろー！！」

子供っぽい大声と共に姿を現したのは、自身を召喚司と称した少年【レン】。

その姿に、座っていた少年は眉を顰める。

まるで、厄介者扱いする様に。

「何で来たのさ、レン？」

「お前が押されっぱなしだからだろーが！　【ロイ】！」

「…まだ始まったばかりかなんだけどな。」

【ロイ】と呼ばれた少年が、ゆっくりと立ち上がる。

背丈はレンと同じくらい。しかし言動は彼とは大違い、対照的である。

そんな二人のやり取りを見て、若人は髪を掻きながらため息を吐く。

「お取り込み中悪いけどな。俺はガキ同士のお遊びを見に来たんじやあない。」

「分かってる…。」

「だから俺が来たんだろーが！ 機械相手じゃー、お前も面白くねーだろ！？」

「随分と、生意気な口利いてくれるな…！？」

「ハッ！ これが本番だ！」

今度は代わりにレンが前に立ち、挑発的な言葉で若人を刺激する。そこはやはりダンテと違う所。その言葉に釣られ、怒りを抑えずに直情的になる若人。

しかしレンによって召喚された悪魔を見ても、地に刺した大剣を抜こうとはしなかった。

悪魔を睨みつけながら、ゆっくりと右腕に手を伸ばす。右腕全体を覆う、汚れかかった包帯に。

一瞬で、包帯を引きちぎる様にしてそれを取り払った。

その腕を見て、啞然とする少年二人を見ながら…

「機動六課隊舎」

「うーん…ま、ええかな。」

「了解。じゃあ、私達もそろそろ行くね。」

「あつ、ちよつと待った！」

にこりと微笑み部屋をあとにしようとしたのはとフェイトは、
後ろからかけられた声に立ち止まる。

くるりと振り向くと、そこには誰もいない。

声の主は既に、二人の横にいたから。

「？ どうしたのはやてちゃん？」

「いやー…今から休憩やし、久々にお茶でもどうや？」

「…いいね。」

「もちろん、三人ででしょ？」

「あつたりまえやろ！」

二人よりも少し身長の低いはやては、その純粋な笑顔を振りまく。なのはとフェイトが自然に笑顔になれる、そんな感じだ。

今日はFW陣含めなのはらも休暇。

隊長なので隊舎にはいたが、正直仕事をするのも休暇がもつたない。

そこで、はやてがお茶会を切り出したわけだ。

三人は顔を見合わせ、傍にいたはずの男がいない事に少し俯いた。

ダンテが悪魔へと姿を変化させる力《Devil Trigger》を使ったあの日から一週間。

彼はあれからどこことなく、本当に気付かないぐらいに少しだけなのは達を『避ける』様になった。

会話も始まれば笑顔で話すし、訓練だって参加はしている。

だがどれも、以前よりは遥かに少なくなっていた。

「何か…あんまり気休めにもならへんな、はは…。」

「…うん。ダンテさんは…。」

「今は、そつとしておこう。」

今日は一度も彼女らの前に姿を見せていない。

フェイトが朝にダンテの部屋を訪ねた時には、既にもぬけの殻だった。

リベリオンもエボニー&アイボリーの姿も無く、前に入った時と同じ。

ただ、部屋の主がいない事だけを除いて。

彼が決して敵に寝返ったわけでは無い。ただ、今はいいだけ。
それなのに、六課の隊長陣ともあろう自分達は不安に駆られている。

それでやっと、自覚したのだ。

自分達がどれ程、ダンテに依存していたのかを。

どれ程、無意識の内に彼に重荷を乗せていたのかを。

「……。」

「…なんやなんや！　せつかくの気分転換なんやから、もっとこう、
なあ？」

「そ、そうだね…。休暇なんだし、ね？　フェイトちゃん。」

「え？　あ、うん…ごめんごめん。」

無理矢理に笑顔を作らなければやってられない。

そんな自分を戒める事しかできず、余計に嫌になる。

悪循環の連鎖は、確実に彼女らの心を蝕んでいた。

しかしそんな空気に追い討ちをかける様に、舎内にアラートが鳴り響く。

「レッドアラート…！！」

【こちらロングアーチ！　多数の悪魔の魔力を感知しました！】
「場所は！？」

【ミッドチルダ北部の臨海第8空港付近です！】

「何でまたそんな所に…！ F W陣を即時召集、その後に指示を出す！ 現場には高町一等空尉とテストロツサ執務官に向かってもらう！ あと、ダンテさんも召集しといてや！」

【了解しました！】

「…そーいう事や。頼むで、二人とも？」

「うん。…何とかダンテさんが来るまで…！」

ロングアーチからの通信を聞いて、はやては気持ちを切り替える。なのはとフェイトもダンテがいないという状況に不安になるが、黙って見過ごすわけにはいかない。

自分達が守らなければいけないのだ。たとえ、彼が来なかったとしても。

「それじゃ、行ってくるね！」

「了解！ 頑張つてや！」

その場でバリアジャケットを纏い、デバイスを手に握る。

その瞳は曇り一つ無く。

「スターズ01、高町なのは…行きます！」

「ライトニング01、フェイト・T・ハラOWN…行きます！」

星光と閃光は、共に青空へと飛び立った…

ミッドチルダ首都 クラナガン

「あー…おかわり。」

「か、かしこまりました…。」

ウェイトレスの女性は、机の上に重ねられたサンデーの空容器を見て啞然としたあと、奥の方へ戻っていく。

一見しただけではギャップが激しすぎる光景だ。

銀髪碧眼、イケメンの大男が子供向けのストロベリーサンデーを食いつけている。

それも2、3杯で済む様なものではない。

5杯はとうに越している。

「食後のデザート、のつもりだったんだが…食いすぎたな。」

机に乗ったサンデーの空容器を見て、溜め息混じりにそう呟く。

そんな自虐を掻き消すかの様に、隣の席に置いていた通信機らし

き物が震え出す。

通信がかかった合図だ。

しかしそれを取ろうとはせず、彼は見つめたままだった。

自動的に通信が始まる。

簡単に言えば留守番電話の様な物だろうか。

【ダンテさん！ 聞こえとるんか！？ ダンテさん！？】

その声の主ははやて。

通信機越しに、必死にその名を呼ぶ。

しかし当の本人はまだ、通信機に手を伸ばそうとはしなかった。

【悪魔が出たんや！ 今はなのはちゃんとフェイトちゃんが向かってる！ けど、どうなるかは分からへん！】

会話を諦めたのか、はやては一方的にメッセージを伝える。

そこに、聞こえる範囲内にダンテがいる事を信じて。

【場所は臨海第8空港付近、大きな反応も感知されとる！
…待ってるから！】

その言葉を最後に、通信は切られた。

しばらくの沈黙。

目を瞑り、静かに笑う。

机に乗せていた足を軽く上げ、振り下ろす。

ぶつかった反動で机に乗っていた拳銃が跳ね上がり、綺麗に弧を描いて彼の手に納まった。

まるで、引き寄せたかの様に正確に。

そして立ち上がる。

ソファーに立て掛けてあった、大剣を背負って。

「つたく…人気者つてのは困るね。」

「あ、あの…代金を…」

「ああ、金か…つけといてくれ。八神はやて、つてな。」

「はい、八神…つて、あの——あれ？」

促されるままに領収書を手に取り、はやての名が出てきてやっと気がつく。

しかし顔を上げると、そこには既にその男の姿は無かった。

残っていたのは、机の上に乗ったままのストロベリーサンデーのおかわりだけ。

「さて…それじゃ、行くとするか。」

…派手なパーティーになりそうだ！ Y e e e - H a w ! ! ! ! !」

外に置いていた漆黒のバイクを駆り、その男はその場を去った…

く 臨海第8空港 く

「おい…どうする気だ？」

「慌てないで。あの二人も相当鍛えたみたいね…戦い方が違うわ。」

瓦礫の後ろに隠れ、状況を見守るトリッシュと一人の若人。

あの銀髪碧眼の青年である。

ちぎったはずの包帯はもとに戻っており、大剣とリボルバーもち
ゃんと所持している。

「…俺の《レッドクイーン》と《ブルーローズ》…大丈夫なんだろうな？」

「心配しなくていいわ。下手な鍛冶屋よりもよっぽど腕がいいわよ、
彼。」

「だったらいいんだけど…。これが無きゃ、右腕を使わなくちゃ
いけない事になっちまうからな。」

「使えばいいじゃない。」

「使っわけないだろ。」

若人は自身の大剣《レッドクイーン》と、腰に携えるリボルバー《ブルーローズ》を見て問う。

よく見れば少しだけ改造が施されており、それを心配したのだろう。

トリッシュは何ら気にする事無く、軽く微笑みながら流す。

彼らの視線の先では、星光と閃光が悪魔と戦いを繰り広げていた。しかし以前の戦闘とは話が違い、トリッシュも言っていた通り、遥かに二人の動きが良くなっている。

これも訓練の賜物なのだろうか。

しかしその表情は、どこか不安気に見えた。

「もう一度だけ聞いておくけど…あなたは、それでいいのね？」

「あ？ 何がだ？」

「…私達は犠牲を必要とするわ。それも、人を。あなたはそれを、受け入れられるのね？」

「…受け入れられないさ。ただ、伝説は犠牲の上に成り立ってるんだ。あの…スパードも。」

若人は静かに右手の拳を握り締める。

その瞳が見据えるのは、悪魔では無く魔導師の二人だった。

「時空管理局…個人的恨みなんか無いが、邪魔なんだろう？」

「…そうね。計画は確実に阻止しに来ると思うわ。」
「だったら！…俺は討つさ。少数の犠牲で、世界を救えるんならな。」

そう言っレドクイーンを抜き、左手で握る。
右手は使わない様だ。

ただその目には、なのは達同様曇りは無かった。

「分かったわ…それじゃ、行きましょうか。【ネロ】？」
「ああ…！」
「…頼りにするわよ？」
「分かってるさ！」

【ネロ】。

ダンテと同じ銀髪と碧眼。
そして彼も、その身に悪魔を宿す者。

その右腕に、大切な者を守る力を。

Mission・16 〈魂の交錯〉（後書き）

その右腕に宿す力は、何のために使うのか？

銀髪の若き狩人「ネロ」は、星光と閃光に刃を向ける。
真紅の女王と蒼い薔薇を。

そして邂逅する血の宿命。

避ける事も出来ず、ただ向かい合うのみ。

NEXT STAGE

Mission・17 『魔を宿す右腕』・・・

M i s s i o n ・ 1 7 〈魔を宿す右腕〉（前書き）

星光と閃光。

真紅と深蒼。

漆黒と相対する純白は無く。

その手に握っていたのは、孤独の黒^{ネロ}だった。

Mission・17 〈魔を宿す右腕〉

飛び交う血の蝙蝠《ブラッドゴイル》達を、的確に撃ち落としていく”光”があった。

一つは桃色の光。

同色の球体を幾つも浮遊させ、入り乱れる悪魔を迎え撃つ。

もう一つは黄色の光。

その手に握る杖は斧へ剣へと変化し、脳天からその異形を断つ。

「いい、感じかな!？」

「そうっ…だと思うよ!」

『桃色の星光』高町なのはと『金色の閃光』フェイト・T・ハラオウン。

たった二人にも関わらず、彼女らは悪魔の軍勢を押していた。なのはは射撃で撃ち落とし、フェイトは斬撃で切り伏せる。

先日までとは動きがまったく違い、その戦い様は『エース』の名に相応しかった。

空と陸ともに、悪魔の数は確実に減っている。
それを確認し笑顔を見せる二人。

しかし、そこまで事が簡単に運ぶはずも無かった。

「なッ——！？」

『Protection.』

声を出した瞬間には、レイジングハートがプロテクションを自動で展開していた。

なのはの視界に映っていたのは、迫った二つの弾丸。
それも、恐らく実弾である。

間一髪のところを防ぎきり、二人はその方向へ視線を向ける。

そこに立っていたのは、銀髪の青年と金髪の女性。
青年と言ってもまだ若く、ダンテよりも年下だろう。
そして女性の方はトリッシュ。

サングラスをかけ、手には大きな拳銃を握っていた。

「あなたは……！！」

「あら……久しぶりね。あの怪我でもう動けるってところは、流石は
エースオブエースという事ね。」

「トリッシュ……！！」

「……ああ？ この二人、あんたの事知ってるらしいな？」

「まあ…色々あつてね。」

余裕気に呟きながら、こちらに歩いてくる。

青年の方も見れば、右腕は包帯を巻いていながらも左手一本で片刃の大剣を握っている。

そしてその銀髪と澄み切った碧眼に、二人は動揺を隠せなかった。顔も違う。ただ髪と瞳の色が一緒なだけ。それでもどこか、通じるところがあるような気がして。

「君、は…？」

「ん？ 俺か？」

だから聞く。

その、澄み切った碧い瞳に。

青年は考える仕草をした後に、こう答えた。

「俺の名前は【ネロ】だ。魔剣教団所属の騎士…っていうのが一応の肩書きだが、今は違う。」

「『今は』っていうのは…？」

青年ネロは、二人に大剣レッドクイーンの切先を向ける。

「そのままの意味だ。今は……同志”、の一人だ。」

「もちろん、私達のね。」

「そんな……！ あなたは違う！ 間違ってる！」

ネロがいった事实に、フェイトは全力で否定する。
その先を知らず、自分達の”闇”も知らずに。

ネロはフェイトの言葉を聞き、眉間に皺を寄せる。
澄み切っていた瞳には、怒りの片鱗が見えていた。

「お前達は何も知らない……！」

自分達が正義だと信じて！ その正義を使って反抗する奴らを
じ伏せて！

後ろ盾がどれほど愚かか知らず！ その建前だけの考えに踊ら
れて！

そんな奴らに……分かるハズが無い……！」

ネロの言葉に、なのはとフェイトは口を噤んでしまう。
瞳に宿っていたのは、純粹な怒り。

それこそ、管理局をどうしようとかいう物では無く。

彼女達は何も言い返せなかった。

彼が、ネロが言った事は事実だったから。

幾度と無く人を傷つけ、その度に正義を皮に着て。

『管理局の正義』を掲げ、それを逃げ道にして。

「そんなのっ…！」

「もういい。最初から、話し合いに来たんじゃ無いしな。」

葛藤するなのはを見ながら、ネロはレッドクイーンを軽く横薙ぎする。

「恨みなんかもちろん無いが…ご愁傷様だ！」

「来るよ、なのは！」

「う、うんっ！」

そしてネロが駆け出すと同時に、二人もデバイスを強く握り締める。

対照に、ネロは上を見ながら軽く笑う。まるで嘲笑しているかの様に。

まだなのはとフェイトは知らなかった。

この青年の…ネロの、実力を。

「ロングアーチ」

「現場はどうなんや!？」

「悪魔の数は減ってますが…! 特定の人物と交戦している模様です!！」

「交戦やて…? 相手は!？」

「映像取得中…! 取れました!」

ロングアーチの司令室では、全員が慌しい雰囲気だった。

はやてはアルトの見せる映像を、訝しげな目で見つめる。

「これ、誰や…!？」

「分かりません! ただ、付近にはトリッシュの魔力反応が感知されています!」

「やっぱ、敵か…! ダンテさんは!？」

「まだです! 魔力反応もうまく感知できません!」

「…くっそ! どうなってるんや!」

そこに映っていたのは、ネロと交戦を繰り広げるのはとフェイトの姿。

共にバリアジャケットを纏い、表情は真剣そのもの。

そしてはやての不安を増させるのは、その相手の強さ。

左手だけでダンテのリベリオンほどもあるう大剣を振り回し、その重さを感じさせないぐらい俊敏な動き。

右手は包帯を巻いており、完全に片手で戦っている。

「強い…!!」

「まずい、押されてます…!」

「あの二人が押されるなんて、そんな…!」

ロングアーチも動揺を隠せない。

はやての傍らで浮遊しているリインフォース?も、驚愕の表情を浮かべていた。

ネロー人を相手に、空戦オーバースを誇る二人が押されている。

見間違いなどでは無く、現実。

相手は質量兵器を使用しているとしても、予想していない状況だった。

「ぐうつ…! FW陣の到着まであと何分や!?!」

「現在位置からすると…五分程です!」

「五分…! 頑張つてや、二人共…!」

依然戦闘を続ける二人に、小さく祈った時だ。

その声は、唐突に聞こえた。

【その必要は無いね。まだまだ、あいつらを戦わせるのは早すぎるんじゃないか？】

低く、落ち着いた声。

全員が待ちわびた男のモノだった…

～臨海第8空港～

「Too easy!!」

「ぐうっ——っわあっ!!」

「フエイトちゃんっ!!」

バルディッシュの魔力刃が弾き返され、空いた懷に強烈な蹴りの一撃。

追撃しようと放った弾丸は寸前でなのはに撃ち落とされるも、戦局は変わらない。

「そんなもんかい？ エースって聞いてたワリには大した事ねえな？」

「このっ…!!」

「…女の子にこんな事して、まだそんなひどい事言うんだ？」

フェイトが躍起になって、バルディッシュを強く握り締めた時だった。

なのはのその一声は、辺りを静まり返させる。

フェイトだけでは無い。ネロも今までとは違うプレッシャーに、眉を顰めていた。

なのはの瞳は暗くなり、ゆっくりと顔を上げる。

フェイトが立ち上がるうとするのを、手で制してから。

「少し…頭冷やそうか？」

その言葉は、普段の彼女からは考えもできない程冷たかった。

全く同じ言葉を聞いた事のあるフェイトに、一気に緊張感が走る。以前これを聞いたのは、ティアナの一件。

なのはの教訓を無視して危険な行動を取ったティアナを、非殺傷設定とはいえ撃ち落とした時だった。

「なのは、待って…!!」

「フエイトちゃんは、そこで待っててね。…すぐに、終わるから。」
「嫌な感じだな。」

ネロがそう言って、レッドクイーンを上段に構えようとした時だ。

何も無かった空間から桃色の輪が現れ、反応する暇も無く身体を拘束される。

それも一本だけでは無い。両手両足、更には縛った両手と胴体をも括り付けられた。

一気にネロの表情が青ざめ、引き笑いになる。

「こりゃ…まずいな…!!」

「…死ぬ事は無いから、大丈夫。」

「なのはッ!!」

なのはがレイジングハートを構えると同時に、エクシードモードへと変形。

鮮やかな桃色の羽らしき物が展開され、エネルギーが集束されていく。

「…エクセリオンバスター。」

その小さな声と同時に、一気に膨大な魔力が砲撃となって放たれる。

一直線にネロに向かっていく。

そして着弾。

爆風の影響は激しく、砂埃が舞い上がる。

「なのは…!!」

「ごめんね、フェイトちゃん。」

なのはが虚ろな目のまま、視線を下に落とした時だ。

「…随分と余裕ぶつてくれるな、おい…!!?」

低く唸るような声がなのはの耳に入る。

虚ろな眼は元に戻り、尚且つ驚愕に変わる。

今の声は幻聴などでは無く、一人の人間の物だと。そう信じる事ができなかった。

喋れるはずが無いのだから。

「まさか…っ!?!」

「そのまさか、だな…!! こんな早々に見せちまうなんてのは、予

定外だったんだが…！」

砂煙が晴れた時には、なのはの表情は変わっていた。

なのはだけでは無い。その場にいたフェイト、映像で見ていたロングアーチ、現場に向かっていたFW陣を乗せたヘリの面々をも驚愕させた。

着弾点には一人の男。

『異形の右腕』を伸ばし、薄く笑っている。
そう、右腕。包帯で巻かれていた、その下。

それは人間のモノでは無かった。

いつかに見た、ダンテのデビルトリガー時の腕と同類の様な。
刺々しく、うっすらと蒼い光を放ち続けている。

まるで、悪魔の様な右腕。

「エクセリオンバスターで、まだ…！？」

「それに、あのバインドをどうやって…！！」

「意外に脆いんだな、あれ。見かけ倒しってヤツか？」

その手を握ったり開いたりしながら、挑発気味になのはに問う。

「さて…今度はこっちだ…！！！」

「…！なのはッ！！！」

静かに、唸るように低くそう呟く。

右手から深蒼の魔力が迸る。

——迸った時だった。

「ハッハアツ!!」

なのは達の横をすり抜けたのは、二発の鉛弾。

ほんの一瞬だけ。認識する事ができたのはそれだけだ。

その弾に気付き、左手に握っていたレッドクイーンで弾き落とすネロ。

驚愕の表情を見せた後、鋭い視線で弾が飛んできた方向を睨みつける。

漆黒のバイクに跨った一人の大男。

ゆっくりとバイクから降り、右手の拳銃をネロに向ける。

「Huh... どうかで見た事あるような気がするんだが、気のせいかな？」

「あんたは...!？」

ダンテはそう言い、ネロと正面から対峙した…

…

「初めまして、ってワケでも無さそうだな？ 坊や。」

「…あんた…！！」

「ま、俺は生憎…初めましてと言っとくよ。」

白鍵《アイボリー》を向けながら、ニヒルな笑みで言う。

ネロは動揺が隠せず、驚愕の表情を浮かべたままだった。

「ダンテさんっ！！」

「良かった…！！」

「…悪いな、遅くなっちゃった。あとは俺の仕事だ。」

「ダンテ、だと…！？」

「？ 呼んだかい坊や？」

なのはの呼んだ名を聞き、ネロは更に驚く。

目の前にいる男は、自身の世界で邂逅した男と瓜二つ。

というよりは、若返った様な雰囲気だったからだ。

そして、名も一緒。

意思を固め、ネロは言った。

「あんた…ダンテなのか!？」

「…そうだと言ったら？」

「…俺はネロだ! 覚えてないのか!？」

今度はネロの言葉に、ダンテが疑問の表情を浮かべる。

「いきなりそんな事言われてもねえ…。」

「…覚えてないんだったら、思い出させてやるさ…!」

右手の拳を握り締め、ダンテに向ける。

左手はレッドクイーンの柄を捻り、エンジン音を鳴らす。

「…じゃあ、やってみせてくれよ?」

「…ハッ! いいぜ! だったら徹底的にやってやるっ!」

ダンテもリベリオンを抜き、手前に構える。

…そして数秒の沈黙。

次にレッドクイーンがエンジンを吹かした瞬間には、火花が散っていた。

銀髪碧眼の男同士が、灼熱の大剣と反逆の魔剣をぶつけ合って。

Mission・17 《魔を宿す右腕》（後書き）

えー… 皆さん明けましておめでとございます！

今年もダンテやなのは共々、よろしくお願い致します！

遅い？ 気にしないで下さい（キリッ

今回は後書きで新年の挨拶をさせていただきました。

相変わらず不定期更新ですが、今年もどうぞよろしくお願い致します。

V e r G i l

M i s s i o n ・ 1 8 〈因果〉（前書き）

その手に宿す因果の力。

その身体に宿す英雄の力。

その刀に宿す魂の力。

雨は降り止む事を知らず、
血を血で洗い流す。

Mission・18 《因果》

「ハアアアッ!!」

「オオオオオッ!!」

灼熱の大剣と反逆の魔剣が衝突し、激しい火花を散らす。

歯を食い縛り鋭い視線で睨みつけるネロと、力を込めながらも笑うダンテ。

両者の力はほぼ互角。一步も退く事は無い。

ネロが無理矢理レッドクイーンを振り上げ、硬直状態を破る。

そして、そのガラ空きとなった懷に銃口を向け、発射。
弾丸は的確に左胸を撃ち抜いた。

だが、当然それだけでダンテは倒れる事無く。
お返しと言わんばかりに、強烈なキックを繰り出す。

「Break Down!!」

「がああっ!!」

ブルーローズを弾き飛ばしてのキックは、ネロの腹部に直撃。

眉を顰め、吐血しながらも数歩後ずさるのみ。

そのタフさに、ダンテは目を丸くしながら口笛を吹いていた。

「くそつたれめ…!!」

「やるじゃねえか坊や。その手は見掛け倒しじゃなかったみてえだな。」

その言葉に更に目付きを鋭くし、レッドクイーンの切先を向ける。

「だったら見せてやろうか…?」

「…何をだ?」

「決まってんだろ…この右手の中にいる悪魔をだ!!」

そう言つて右手を突き出す。

腕からは深蒼のオーラが放出され、ネロの目が真紅色に変わる。

表情を引き締め、リベリオンを強く握った時だった。

「ストップ。今日はここまでよ。」

「何だと!? 俺はまだ…!!」

「時間切れ。タイムアップなの。」

現れたのはトリッシュ。

サングラスを外し、一度ダンテに視線を向けてから再び視線をネ

口に戻す。

無論ネロは納得いかないのか、目はまだ紅いままだ。

しかし指差す先には、既に悪魔の姿は無かった。

代わりに悪魔の血の結晶である《レッドオーブ》が落ちているだけ。

その悪魔達を殲滅したのは、地上に降り立った若きFW陣だった。

「なっ…スバルにティアナ!？」

「エリオとキャロも…!!」

「なのはさん! 大丈夫ですか!？」

「フェイトさんっ! け、怪我は!？」

なのはとフェイトの無事を確認したFWの面々は、我先にと走り寄ってくる。

ネロやトリッシュを怖れる事無く、二人の下へ集まる。

そこでなのはとフェイトに大声で怒鳴られながらも、涙を流しながら喜んでいた。

「…分かったでしょ? 状況はこっちが不利。」

「…クソッ!」

「それじゃ、私達はこれで。」

ネロにアイコンタクトし、何事も無くそこを立ち去ろうとした瞬間。

何の前触れも無くトリッシュが振り返り、寸前まで迫っていた弾丸を蹴り落とす。

二発の弾は地面にめり込み、少しだけ煙を出していた。

「ダンテ…。」

「待てよトリッシュ。もうちょっと遊んでいたらどうだ？」

トリッシュの予想通り、振り向いた先にはエボニー・アイボリーを構えるダンテ。

銃口からは軽く煙が出ており、その瞳はトリッシュだけを映していた。

「…そうしたいところだけど、今はやめておくわ。」

「…トリッシュ…！」

悲しげな表情でそう言った瞬間には、そこには誰もいなかった…

「機動六課」

「お疲れ様。大変やったな。」

「ううん、大丈夫。それに、私達よりも…」

「…そやな。分かった。」

はやてと並んで歩くのはとフェイト。

臨海第8空港での事件から約4時間。

時刻は午後8時42分。

現場状況の報告などもあり、今の今まで三人で隊長室にいたのだ。

だが、結局そこにダンテが来る事は無かった。

「はあ…何でなんやろな。」

「何でって…何が？」

「ダンテさんの事やよ。何で、こんなに避けられとるんかって。」

「それは…。」

それ以上は、誰も答える事はできなかった。

「…やっぱり、デビルトリガー？　が原因なんやろか…。」
「原因つて、何で？　別に私達は…！」
「私達は、やろ？」

はやての言葉に、フェイトは口を噤む。

彼女の目は、真剣なものだった。

「…悪魔の子や、普段はあんなんやゆーても。やっぱり、考えるもんなんやろな。」

「…だったらさ。私達は、黙ってた方がいいんじゃないかな？」
「…どゆ事？」

なのはは静かに、前を向きながら言った。

「ダンテさんは悪魔じゃないよ。」
「…あのな、その気持ちは——…。」
「ううん、違う。気持ち的な問題じゃなくて。
だって、悪魔と人間の子供なんでしょ？
何で、悪魔の方ばかり強調されなきゃいけないのかな？」
「…。」

今度ははやてが閉口する。

「ダンテさんも、ちゃんとした人間。」

ただ、私達とは少し違うだけ。柔らかく言ったら、珍しいハーフ？」

「結局、なのはちゃんは何が言いたいんや？」

にはははと笑ってみせるなのはに、はやては苦笑しながら尋ねる。その傍らでは、フェイトが俯いたまま話を聞いていた。

「はやてちゃんの続き。」

ダンテさんでも、考える事はあるんだと思うんだ。

けど…人の悩み事に勝手に首を突っ込むのは、駄目な事だからね。」

「…そやな。」

「…うん。」

「だから！」

…変な事考えずに、気楽にしよう？

それで、ダンテさんが話してくれるなら。

その時は、ちゃんとみんなで聞こう。ね？」

「…まったく、なのはちゃんには敵わへんわ。」

「さすが、なのはママだね。」

「にやはは…そうでもないよ。」

そうやって笑顔を作る事ができるなのはに、はやてとフェイトは改めて感心するのだった…

〃 廃棄街一角〃

「…。」

『マスター。』

「…何だ？」

『最近元気が無いようですが、何かありましたか？』

「…まあ、色々とな。」

半人半魔、半分は人間なんだ。悩み事だつてあるさ。」

『私で良ければ、いつでも相談に乗りますよ。』

「ありがとう。」

そんじゃ…ちょっとした気分転換だ。」

星が瞬く夜空の下。

ダンテは一人、廃棄都市の大通りに立っていた。

彼の前には浮遊するガジェット。

悪魔ではない敵に、鞘から静かに闇魔刀を抜く。

「何でかは知らねーが…随分と再現力高いもんだな。聞いてた通りだ。」

『…通信は？』

「さっき言つといたよ。今でもはやてが見てるんだろっな。」

『…来ます。』

「OK・派手にやってやろうじゃねえか。」

閻魔刀が冷静にそう言い、ダンテが答える様に構える。
姿勢は居合い。

前方には、迫る数体のガジェット？。

「デカブツは、消えてな。」

『Dimension Slash』

抜くのは一瞬だった。

横薙ぎの一閃はダンテの周りの大気を揺らし、次に呼吸した時にはガジェット？は鉄屑と化していた。

流れるような動きで再び納刀し、次の瞬間には走り出す。

いつの間にか、ガジェットの後ろには地獄の番人《ヘル・ヴァンガード》もいた。

「Hey!!」

『Rapid Slash』

その群れを駆け抜ける瞬間に閻魔刀を振るう。

横薙ぎ・袈裟斬りの順で振るわれた刀の軌跡は、的確にガジェットの本体を通っていた。

後方でガジェットが爆散し、気に留める事無くヘル・ヴァンガードと対峙する。

ヘルズ達よりも一回り大きな身体に、まるで絵画に描かれた死神が持つかの様な鎌。

漆黒のフードの中から、真紅の瞳がダンテを見ていた。

大きく構え鎌を振るう。

しかし予備動作の大きいそれにダンテが当たるはずもなく、寸前で回避されていた。

「Set」

『Spiral Swords』

回避と同時に、ヴァンガードを囲む様にして八本の魔力刃が現れる。

本体に纏う魔力と同じ、淡い蒼の剣。

「Shot」

『Sword Storm』

同時に放たれる魔力刃。

アンジェロ戦に使われたものと同じ、《烈風幻影剣》と呼ばれる技。

そしてその時と同じく、幻影の剣は全てヴァンガードの身体へと打ち込まれる。

程なくして、地獄の番人は塵へと還った。

残る静寂。

鉄屑とレッドオーブだけが残されたそこには、月明かりの下で佇むダンテだけだった。

「終わったな。」

「マスター。」

「ん？ 何か言ったか？」

呟くようにして言ったのは、闇魔刀だった。

静寂の中に、無機質な機械の英語が響く。

「私は何も、聞きませんよ。」

「What？」

「人の悩みに深入りする。というプログラムは、組み込まれていませんから。」

「ハッハハハ！ そういうところ、本当に機械なのか心配になってくるぜ。」

「どういう意味ですか？」

「気にすんな、ただの独り言さ。」

静まり返っていた空間に、もう一つ増えた音。

無機質な英語と、大笑いする男の声だった…

～某所～

「クソッ!!」

壁を包帯で巻かれた右腕で殴りつけるネロ。

後ろでは、その様子を心配そうに見つめるトリッシュの姿があった。

見れば、トリッシュだけでは無い。

月明かりが差す朽ちた部屋の一角には、イスに座ってネロを見るバージル。

ボロボロになったベッドの上では、レンとロイが何かを話している。

無論、ハルバートも窓際で外を眺めていた。

夜空に星は見えない。

分厚い雲が、彼らを嘲笑うかの様に空一面を覆っていた。

「ネロ…落ち着きなさい。」

「落ち着いてるさ！ 至って普通だ！」

「どこがよ？」

「…ちっ！！」

宥めようとしたトリツシュから顔を背け、壁に凭れ掛かる。

一瞬視線がバージルと合い、すぐに逸らした。

「この世界の事は割り切ったつもりだったさ…けど、それと今日の事は別だ。」

俯き加減にトリツシュを睨みつけ、話を続ける。

「あれが若い頃のダンテだって言うんなら、何で仲間にならないんだよ！？」

「それは…できないのよ。」

「できるさ！ 力尽くでもすればいい！」

「できる人がいないわ。」

「俺がやってやる！ 今なら…この右腕もあいつに届く！」

「…確かに、あなたなら可能性はあるかもね。」

「だったら何で止めた！？」

そう怒鳴った時だった。

「五月蠅いぞ小僧。」

「ッ——！！！」

バージルが目を瞑ったままそう言うと同時に、表現し難い圧力がネロを襲う。

それこそ、先程まで荒れていた彼が口を嚙む程の。

向けられた視線は、まるで蟻でも見ているかの様な目だった。

「…あんたには、関係の無い話さ。」

「関係が無い、か。…笑わせてくれる。」

「何だとッ！？」

「ネロ！ バージルも止めなさい！！！」

バージルが放った冷たい言葉に、ネロがプレッシャーを押しつけて右腕を振るおうとする。

しかし寸前でトリッシュが割って入る。

バージルは反抗どころか、自身に力を振るおうとする事ができたネロに少しだが驚いていた。

「大体あんたは何だ、お山の大将気取りか！？」

言っとくが俺が見た中じゃ、そうやっていい結末迎えた奴は一人もいない！」

「…トリッシュ。」

「何？」

「このガキにはまだ、話していないのか？」

「…そういえばそうね。」

「何だ？ 何の事だよ？」

ネロのその言葉に、バージルは嘲笑うかの様に苦笑しながら席を立つ。

そして、腰に携えていた刀を抜きながらネロに向かって歩く。

「何だ…？」

「…俺が誰なのか知りたいんだろう？」

「なら、覚えておくといい。」

「…？」

正面で止まり、一瞬でその刀《閻魔刀》をネロの首筋に添える。

瞬きすらさせない速さで。

「俺の名は【バージル】。お前も聞いた事はあるだろう。」

「…【魔剣士スパード】の息子…そして【ダンテ】の実の兄だ。」

そう言って部屋を去る彼を、誰も止める者はいない。

気付かない程に小さく、雨は降り始めていた。

Mission・18 〈因果〉（後書き）

蒼の剣士が伝えた言葉に、漆黒の狩人は愕然とする。

その姿は確かに同じだった。

髪色も、瞳の色も。

違ったのは、冷たい蒼と狩人には無い『闇』だった。

NEXT STAGE

Mission・19 『似非存在』・・・

M i s s i o n ・ 1 9 〈似非存在〉（前書き）

～お詫び～

今回のタイトルを、ご勝手ながらM i s s i o n 1 8の予告とは違うものにしてしまいました。

誠に申し訳ありません。どうかご了承頂ければと思います。

Mission・19 〈似非存在〉

〈機動六課司令室〉

「ガジェット・悪魔共に反応が消えました!」

「良かった…うまくやってくれたみたいや…。」

「それにしても、やっぱりダンテさんって凄いですね…。」

モニターを見ながら、管制のルキノがそう呟く。

「凄いつて?」

「あ、えと…その、初めてのガジェット相手にあの戦い方が…。」

「あー、なるほどな。」

路地裏から歩いていくダンテの背を見ながら、はやてはルキノに相槌を打つ。

だがしかし、自分でも驚くぐらいに『その事に驚かなかった』。

たかが人間の造り出した兵器が、魔を統べる帝が創り出した悪魔を『狩る』男に勝てるはずが無い。

そう、自分でも思ってしまった。

「ま、普通そうやなあ…。」

「はい？」

「あ、こつちの話。処理よろしくな。」

「了解しました！」

時間も夜遅い。

はやては隊長室に戻り、デスクワークに取り掛かった…

翌日

「…起きてますかね？」

「いないんじゃないですか…？」

「…。」

なのはは傍らにスバルとティアナを連れて、部屋の前に立っていた。

もちろん部屋の主はダンテ。

時刻は7時30分。

小鳥のさえずりも聞こえ、空は晴れ渡っている。

「…。」

「なのはさん？」

「ひゃああつ！ なつ、何！？」

「い、いや…呼んだだけですけど…。」

「そ、そつか…にやはは。」

名を呼ぶだけで飛び上がるなのは。そんな上司の姿に、スバルとティアナは微笑ましくなる。慌てて虚勢を張っているが、既に時遅しだ。

6時に起床した2人だったが、訓練場には既になのはがいた。一気に詰め寄られて、たった一言。

『ついて来て…。』

あまりに必死な様子に、ティアナは吹き出してしまった。スバルは相変わらず状況が掴めなかったため、そんな事も無かったが。

そしてなのはのなすがまま、部屋の前まで来たのだ。ティアナはその時点で理由が何か分かったが、スバルはクエスチョンマークを浮かべたままだった。

「ああもつ！ ちょっと退いてて下さい！」

「あつ、ティアナ…！？」

おどおどするなのはを避け、一気に扉の前まで詰める。

そして…

「開けるわよ？」

当然中からの返事は無い。
返事は無いのだ。

それを待つ事無く…

「じゃ、お構いなく。」

簡単にその扉を開いた。
ロックは掛かっていなかった。

「ちよつ、ティアナ…！？」

「行きましょう。開いてたんですから、ね？」

躊躇無く中に入っていくティアナに、なのはとスバルは動揺しながらも続く。

部屋は明るい。

カーテンは開けられ、太陽の日差しが入ってくる。

ベッドの上には、横たわる人間が一人。いや、半魔が一人。

「やっぱ寝てるわ……」

「寝てるね……はは……」

「ダンテさーん……？」

静かに声を掛けるのはだが、返事はない。

見れば、ベッドのすぐ傍にリベリオンを立て掛けている。それを見て、にやりと笑うティアナ。

「そこに置いてるって事は、大丈夫なんですよ？」

寝ているダンテに問いかける。無論、返事はない。

しかし次の瞬間、ティアナはクロスミラージユを起動。その銃口をダンテの顔面に向ける。

あまりの手際の良さに、なのはとスバルは呆けていた。

そして、静止の聲が飛ぶ前に。

「シュートッ……！」

…魔力弾は、放たれていた。

展開の速さに、ティアナを除く2人は呆然としている。

ベッドが吹っ飛び、部屋の床には衝撃の余波で亀裂が入る。

「ティツ、ティアナッ!!」

「何やってんのティア!？」

「あれ…?」

ようやく状況を整理し終わり、ティアナに怒声を浴びせるなのは、瞳は真剣そのもので、嘘だと言っても退かない目だ。スバルもなのは横で、信じられない様な視線をティアナに向けている。

一方ティアナは誤算だったのか、額からは大量の冷や汗。クロスミラージュも沈黙し、なのはの怒声もともに耳に入らない。引き攣った様な笑みを、震えながら浮かべていた。

しかし、次にその場を見た時に、3人は目を丸くする。

「消えた…!？」

「えええーっ!?! な、なんで!?!」

「知るワケ無いでしょバカスバル!」

そこにダンテが気を失っているのかと思いきや、誰もいない。

無残なベッドの破片と、荒れ果てた部屋の風景だけが残っていた。

そう。

立て掛けてあったはずのリベリオンも消えていた。
この程度の事じゃ、倒れもしない様な剛剣が。

「…こいつは随分と派手にやらかしてくれたじゃねえか、ハハッ。」

「えっ…？」

「ったく…今度からどこで寝りゃいいんだい？」

「…っのお！！」

後ろから掛けられた声に、反射的に振り返る3人。

聞き間違いでは無く、考えていた通りの人物。

壁に凭れ掛かり、呆れた様に無残な部屋を見ている。

銀の髪を軽く弄りながら、片手にリベリオンを握るダンテの姿があった。

「何驚かせてくれるのよ！！？」

「言ってる意味が分からねえぜ？ ティア。」

「さっきのあんたは何！？」

「…ま、手品ってヤツだな。種も仕掛けもありません。」

動揺していたところを見られていたと思い込み、あまりの恥ずかしさに衝動的に銃口をダンテに向ける。頬を赤らめ、鋭い目つきでダンテを睨んでいた。

そんなティアナの視線に、やれやれといった表情で肩を竦めるダンテ。リベリオンを再度壁に立て掛け、部屋に掛けてあった真紅のロングコートを羽織る。小さな風圧は銀の髪を揺らし、流れるような動作でリベリオンを背負う。これで、いつものダンテのスタイルになった。

小さく口笛を吹きながら、部屋を出ようとするダンテ。
当然、そんな彼を呼び止める声があった。

「ちよっ、ダンテさんっ!」

「ん? ああ、ナノハか。そっぴや何か用だったのかい?」

「用、って言うか、その...」

「そうか。なら、いいんじゃないか?」

「...はい?」

一人で話を進めていくダンテに、主導権を握っていたはずなのに置いていかれるのは。

考え込んでいた視線を次に上げた時には、ダンテの背中はずかしく遠かった。

呆けたままなのはだったが、スバルとティアナに背中を叩かれて我に返る。

その2人に催促され、整理ができないままダンテの背中を追った...

某所

「…。」

バージルは閻魔刀を高くかざし、それを見ていた。ゆつくりと刀身を一回りさせ、やがて鞘に納める。流れる動作で行われるその動きは、見ている者を不思議と見入らせる事があった。

現に、物陰から眺めていたネロもその一人だ。

「見ているんだろう。」

「…ッ！」

「出て来い。斬りはしない。」

「…気付いてたのかよ…。」

静かにそう呟きながら、バージルの前に姿を現す。

警戒は解いておらず、その目は閻魔刀に向けられている。

それもそのはずだ。

彼が元いた”世界”では、閻魔刀は彼に託されたものだったからだ。

現在このミッドチルダにいる、ダンテと酷似した人物から。

「…この刀か？」

「…ああ。」

「何か知っているのか？」

「閻魔刀、だろ。…『人と魔を別つ魔剣』だ。」

「…そこまで知ってるのか。」

ネロの解説に、バージルはそう漏らす。

その瞳を見つめたあと、おもむろに鞘から閻魔刀を抜き放った。

驚いているネロに、鋭い切先を向ける。

「…遠慮する事はない。そうだろう？」

「…分かってるじゃねえか！」

「来い。力の差を見せてやろう。」

ネロはその言葉に、返事の代わりにレッドクイーンを構える。

柄を捻り、イクシードを起動。バイクのエンジン音の様な唸りをあげ、レッドクイーンの刀身が灼熱の赤を帯びる。

対するバージルは静かに閻魔刀を上段に持つ。

冷やかな刀身は、蒼いネロの瞳までもを映していた…

5分後

「ぐっ、あ……!!」

「……予想範囲外だ。……ダンテと張り合ったというだけはあるな。」
「ちつく、しょうっ……!!」

地に膝を着いて呻くネロと、涼しげに立つバージル。

その状況を見ただけでも、どちらが優位かは誰でも分かる。

レッドクイーンはネロから離れた場所に無造作に突き刺さり、ブルローズはその反対側に転がっていた。

「何でそんなに強いんだよ……？」

「……。」

「……？」

バージルはネロの問いに答えない。

それどころか、最後に少したけ口元を歪ませたあと、その場を去っていった。

わけの分らないネロは、その場に寝そべる。
空を見上げる。晴天だ。雲一つ無い青空。

同じ空の下で、ダンテはいる。そして、”彼女”はいない。

この割り切った世界に再度不満を覚え、ネロは眠りに落ちていった。

『Break Down!!』

止めにブルローズの弾丸。

【スケアクロウ】が砂と還り、その場に静寂が訪れる。

ネロは勢い良くレッドクイーンを地面に突き刺し、辺りを見渡す。

『終わったな…。雑魚ばかりで、肩の凝る仕事だよ。まったく…。』

『

そう呟きながら、あの男を思い出す。

自分と同じ銀髪に、自分と同じ蒼い瞳。

無敗だった自分が唯一黒星を付けられ、子供扱いまでされた厄介者。

髭面のダンテがへばっている自分を見て、笑っている。そんな様子がすぐに想像でき、更に苛立たしくなる。ダンテという時はいつも、ペースを崩されるばかりだ。

そして痛感する。

10年以上もこの仕事を続けてきたダンテの凄さを。

絶対に本人の前では口に出さないが、その点では認めざるをえない。

現に、彼はこの程度の数なら暇つぶしにもならないだろうから。

『あー…想像すると腹が立つな。』

ブルーローズに弾を装填しながらそう呟く。
嘲笑うダンテの顔が頭から離れない。

余計な事を考えるなど言わんばかりに頭を振りながら、自前のバイクに跨る。

エンジンを吹かし、走り出そうとした時だ。

背後に迫っていた影に気付き、すんでのところで横へローリング。一瞬見えた”ソレ”は、ダンテの使用していた魔具《ルシフェル》の剣と酷似していた。

当然それはそのままバイクに直撃。

数瞬の後に激しい爆風がネロを襲い、鈍い衝撃音と共に彼の意識は暗闇へと落ちていった…

・・・

暗い。

瞼を閉じているからなのだが、光が無い。

この世の、最大の恐怖。

『うわあああっ!!!』

勢い良く飛び起き、息を荒げる。

静かな空気を揺らす様に、荒い息遣いが聞こえていた。

ようやく落ち着き、辺りを見回す。

生い茂る木々。空には一面の星。

自分が先程いた場所ではない事がすぐに分かる。

『痛ってえ…くそっ！　ここはどこだ…？』

何かにぶつかった衝撃の反動か、後頭部がずきずきと痛む。

幸いにもレッドクイーンとブルーローズは健在。それだけが、今のネロを支えていた。

自分の知らない空間に違和感を覚えるのも無理は無い。
そんな彼に追い討ちを掛けるかの様に、その右腕が疼いた。

『こんな時まで…！』

見れば、自分を囲む様にして立つ悪魔の姿。
文献に載っていた7・Heils。ネロは苛立ちながらも、背中からレッドクイーンを引き抜く。

『悪いが今は遊んでやる余裕は無い…さっさと失せろ！』

同時に襲い掛かってくるヘルズに、ネロは灼熱の赤の女王を振りかざした…

・
・
・

『ハアッ、ハアッ…！』

地面を覆う様にして撒き散らされた砂。

全てはヘルズのものであり、砂を媒介に現世へ干渉するヘルズを打ち倒すところなる。

ネロは突き刺したレッドクイーンの柄に手を置き、息を荒げている。

満点の星空の下で起こった異形との戦いは、当然ネロに軍配が上がつた。

『ふー……。』

額の汗を拭い、大きく深呼吸をする。

まだ齡18の若人。その身体能力と身に宿す力が異常であつたとしても、人間には変わらない。

右腕はもう疼かない。

視界にも悪魔はおらず、気配も感じない。

やっと気を緩め、傍にあつた木の幹に凭れ掛かる。

『ワケが分かんねえな……。』

そう呟きながら、少しの間目を閉じる。

10秒。

30秒。

1分。

かつと目を見開き、その場を立ち上がる。

ブルーローズに弾を装填。レッドクイーンを背負い直す。

『とりあえず、歩いてみるか…。』

ネロはそう言って、当ても無く歩き出す。

夜は明け始め、空は黒から青に染まりつつあった…

M i s s i o n ・ 1 9 〈似非存在〉（後書き）

この世界に存在するイレギュラー！。

それが齒車を狂わせ、運命を大きく捻じ曲げる。

世界の法則を崩す。抹消したはずの者。時空を越える者。そして自ら赴いた者。

それらの意思によって、破滅への曲調は変わり出す。

N E X T S T A G E

M i s s i o n ・ 2 0 《混沌齎す狂人》・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4715n/>

魔法少女リリカルなのはD.M.C

2011年1月22日13時05分発行